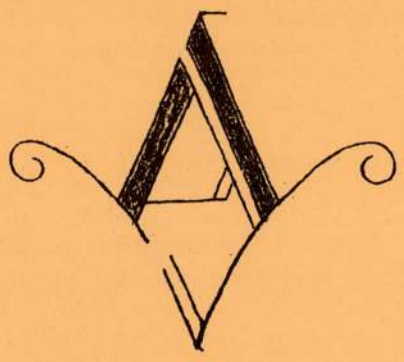
# 建築と社會

第八輯　第十貳号



日本建築協會

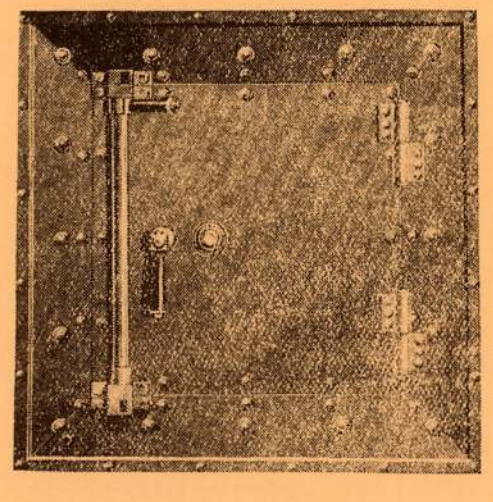
大正十四年十二月一日

# 大谷製
# 舶來形金庫扉

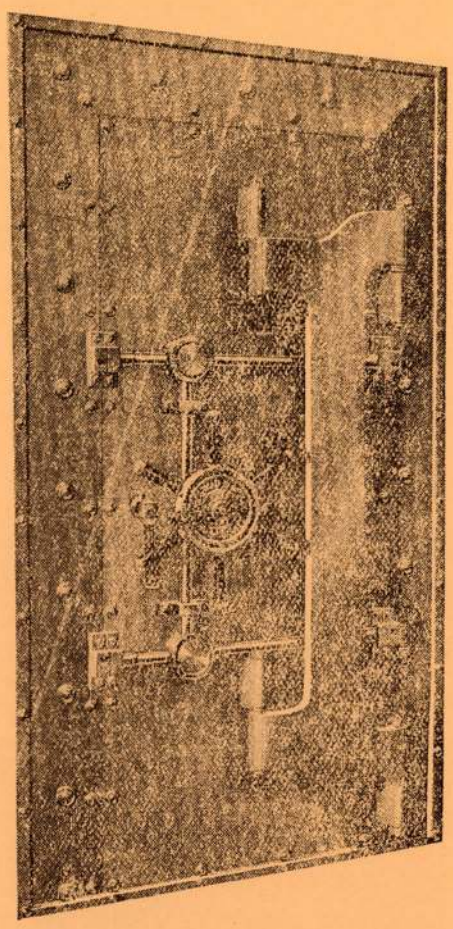
大谷金庫店技師



獨逸工學士
アルハレツトシユハルト



正金銀行大阪支店納



## 製作品目

一金庫
一金庫室扉
一保管金庫
一御眞影奉安庫（デポジツトボツクス）


東京市京橋區岡崎町二丁目二十五番地
大谷金庫店
電話銀座三一三四番

大阪市淀屋橋筋道修町四丁目
大谷金庫店
電話本局三九三四番

京都市松原通東洞院東入
大谷金庫店
電話下五三二番

神戸市楠町六丁目
大谷金庫店
電話本局四八〇七番

本　社　大阪市西區阿波堀通一丁目
工　場　九州若松市外二島（鐵道省指定工場）

大阪販賣店　本　社　内
東京販賣店　東京市丸ノ内ビルディング七階
九州販賣店　門司市大毎ビルディング三階

# 日米板硝子株式會社

## 製品解說

製造方法　世界最新コールボーン式自働連續板狀伸延製造法ト稱シ幅六呎ノ板硝子ヲ長サ無限ニ連續製出ス

特　徴　精密ナル機械ノ標準ト硬化作用ニヨリ板面ハ反リ歪ミ無ク厚サ整等ニシテ質强靱ナルヲ以テ破損ノ虞少シ

厚　味　二十四オンス品　並板（十六オンス）ニ比シ二倍ノ破壞强度及耐久力ヲ有スルヲ以テ學校病院工場會堂ビルディング等の高級建築及シヨウウインドウ用として最適品ナリ
三十四オンス品　汽車電車等ノ窓硝子トシテ貴用セラル

加工品　摺　結霜　奉霞

和洋建築窓、家具等ニ使用シテ頗ル優美ナリ

## 繪口


（1）長谷川峯造氏の新邸外觀

（2）同邸日本間よりヴエランダを望む

（3）同邸子供室と臺所

（4）黒田松之助氏新邸外觀と玄關

（5）同邸應接室と子供室

（6）同邸日本間と臺所

（7）同邸平面圖



◎「建築と社會」表紙圖案當選者……

◎吾が歩み……（一）

◎落葉……（二）

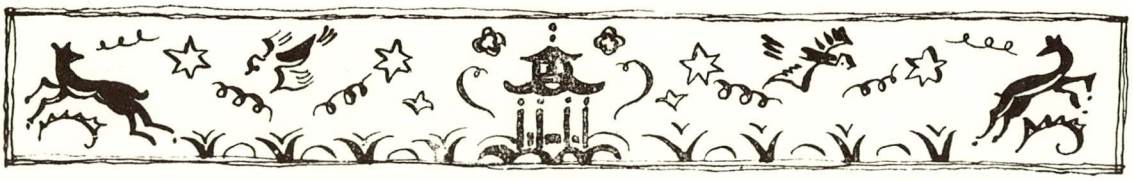
▲奈良朝の文化……佐藤小吉（三）

▲住宅問題の相關關係……宇治伊之助（一九）

▲大都市は斯く膨脹すべきである……方米治郎（四五）

▲大阪の風力に就いて……池田宮彦（五〇）

▲明治後期の建築……增山新平（二四）





▲建材科學片……細木松之助…（三）

××

▲K、H兩氏の住宅……松本儀八…（六）

▲柊會の作品展覽會を觀て……江村恒一（KO）…（六一）

××

△秋晴れに古刹を仰ぎて……（四）

△寧樂紀……それがし…（五）

△法隆寺雜觀……菅田登美雄…（六七）

△大阪及び大阪人……北村兼子…（七四）

××

▲創作　枯れてゆく向日葵……和倉泰…（七八）

××

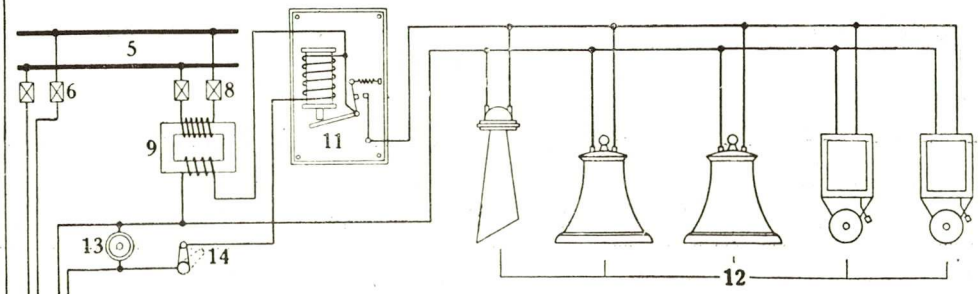
■俳壇　夜寒―寥松亭―夜話―貧厨―霜……溪舟選…（八六）

■俳文話　化俳句……溪舟…（八七）

××

▲主要建築材料値段表……（八八）

▲日本建築協會々報……



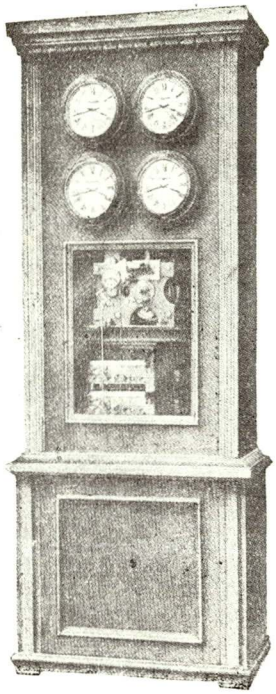

瑞西マグネタ會社インダクタ

# 無電池式電氣時計

親時計内ニ裝置スル永久磁石ニヨリ自ラ發電ス

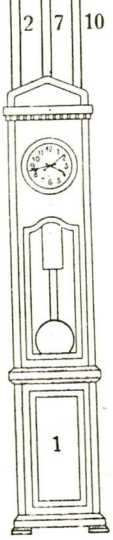
最小十五單位ヨリ最大六〇〇單位迄

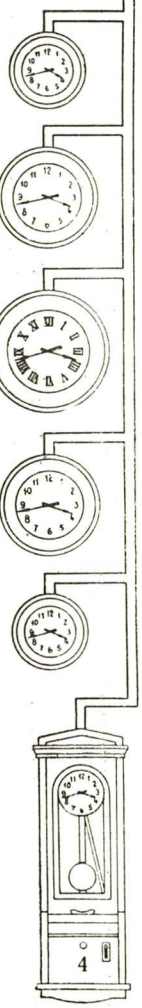
室用、街路、船舶、塔用各種



最近御用命先

大同ビルデイング　大阪中央公會堂
宮内省　名古屋鐵道局
東京市電氣局　大阪三品取引所
大阪市電氣局　名古屋伊藤松坂屋



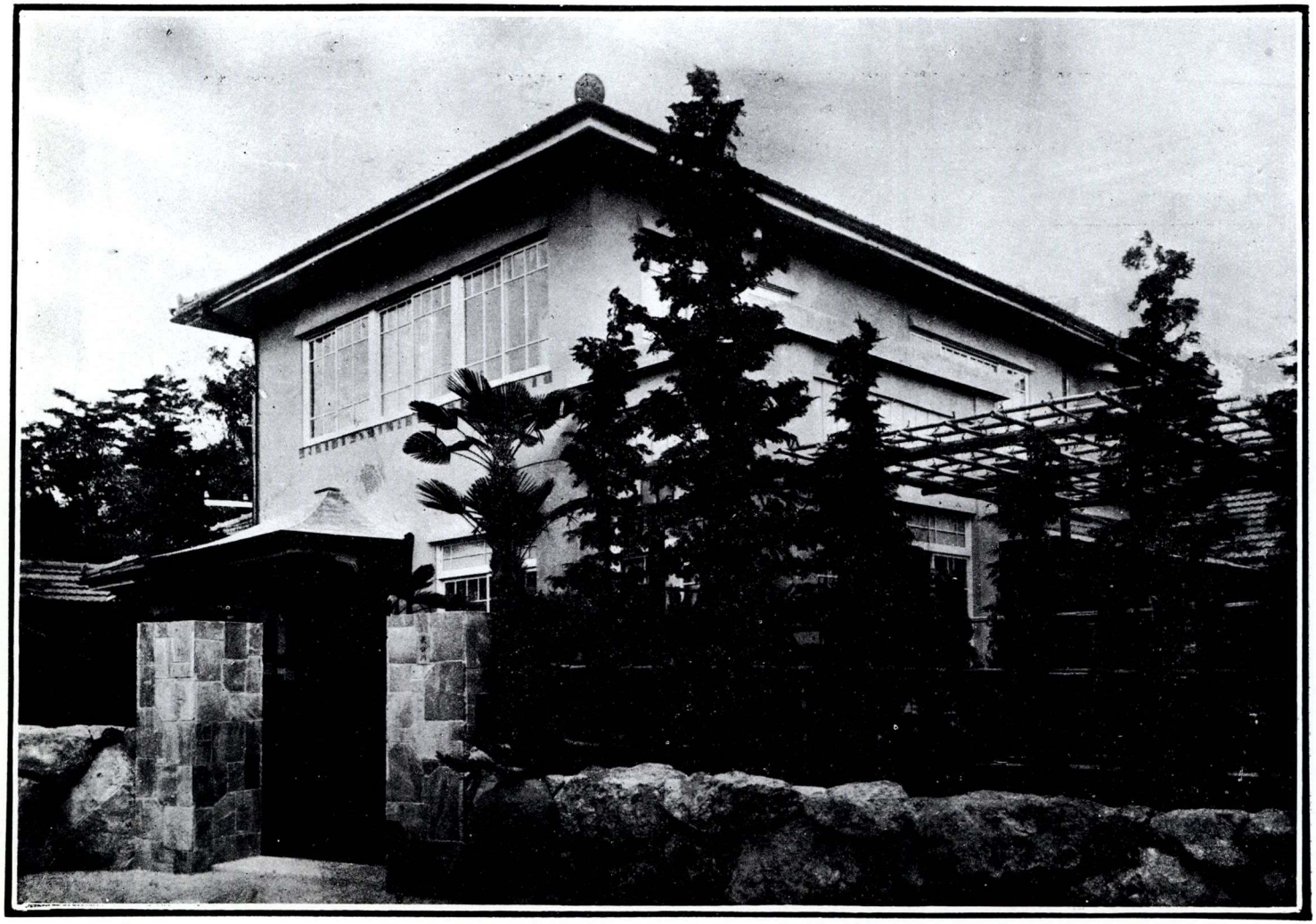

シーベル・ヘグナ商會

東洋總代理店　シーベル・ヘグナ商會工業部

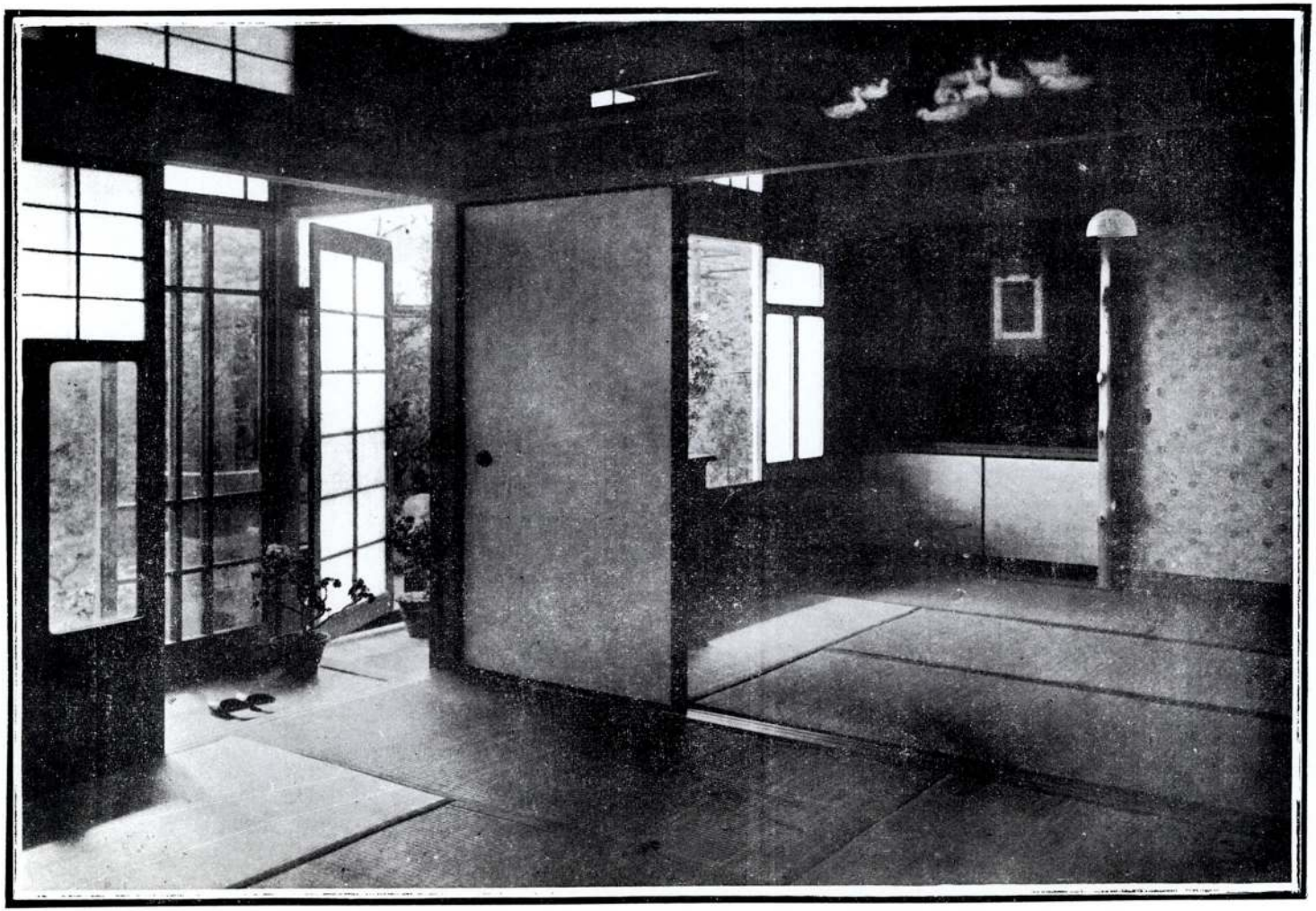
電話　土長三五四六番　土五七五四番

關東代理店　神奈川電氣株式會社

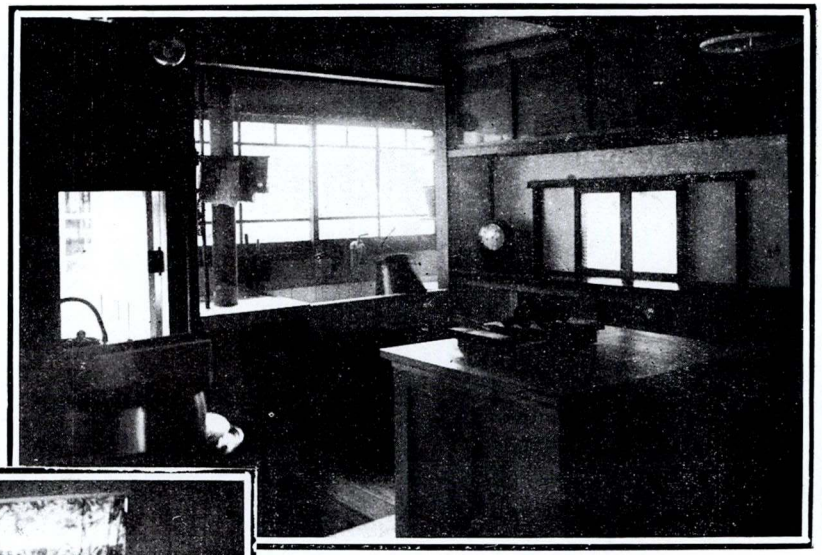
御紹介被下バ型錄進呈致スベク尙御說明御希望ノ向キヘハ係員參上可仕候



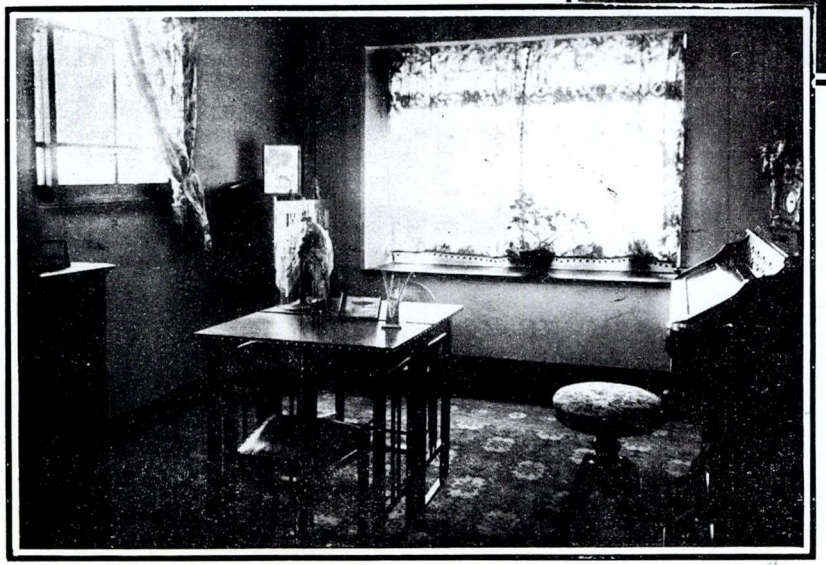
長谷川峯造氏の新邸（兵庫縣武庫郡住吉）



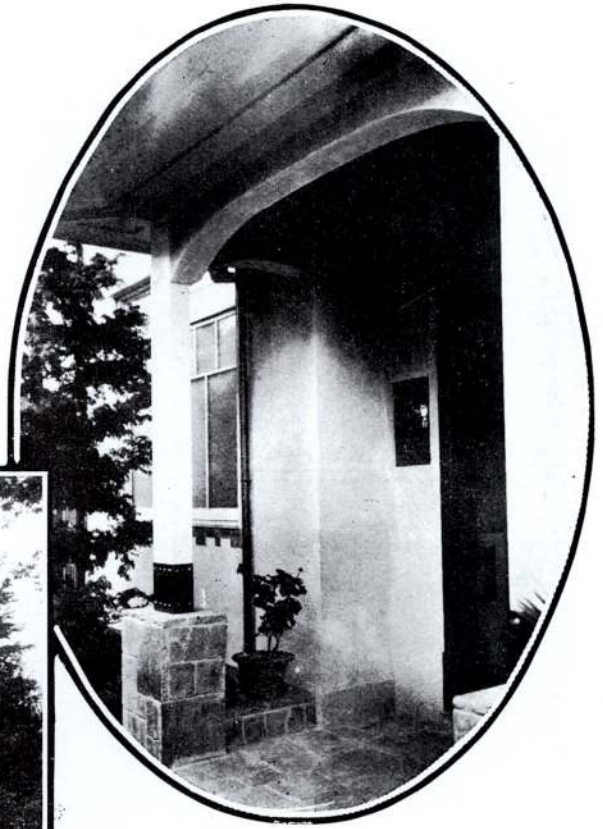
長谷川峯造氏新邸日本間（ヴエランダを望む）



臺所



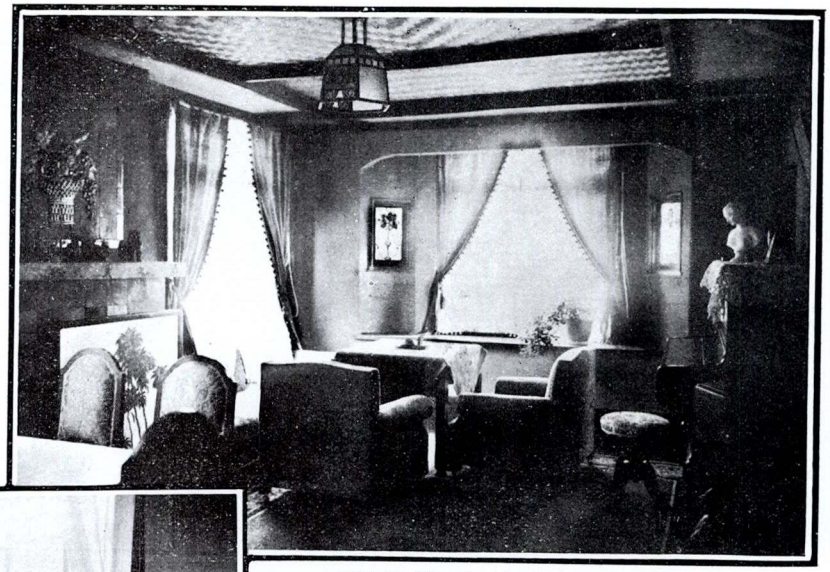
長谷川峯造氏新邸（子供室）



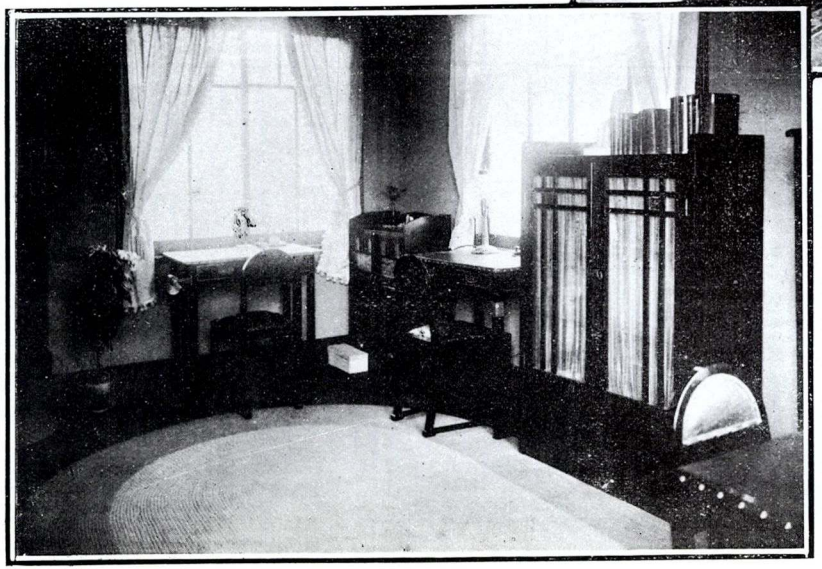
玄關



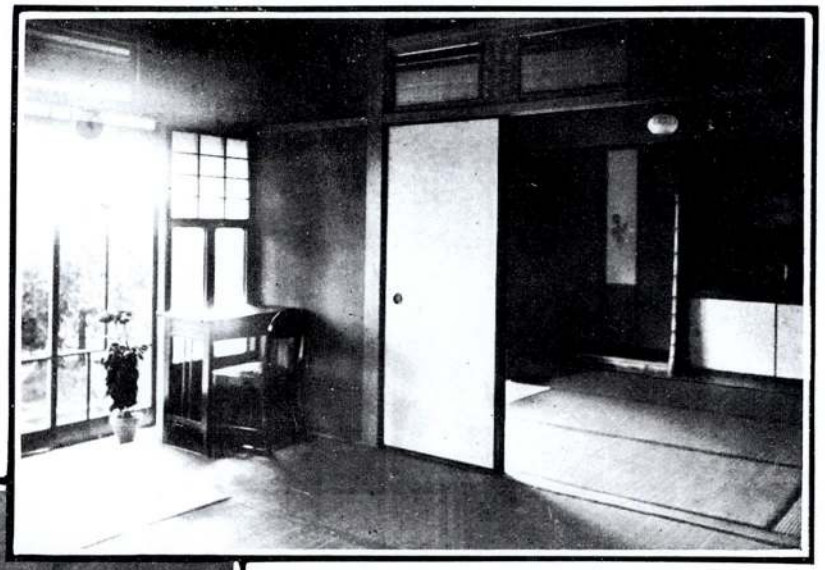
黑田松之助氏新邸（兵庫縣武庫郡住吉）



黒田松之助氏新邸〔應接室〕



〔子供室〕

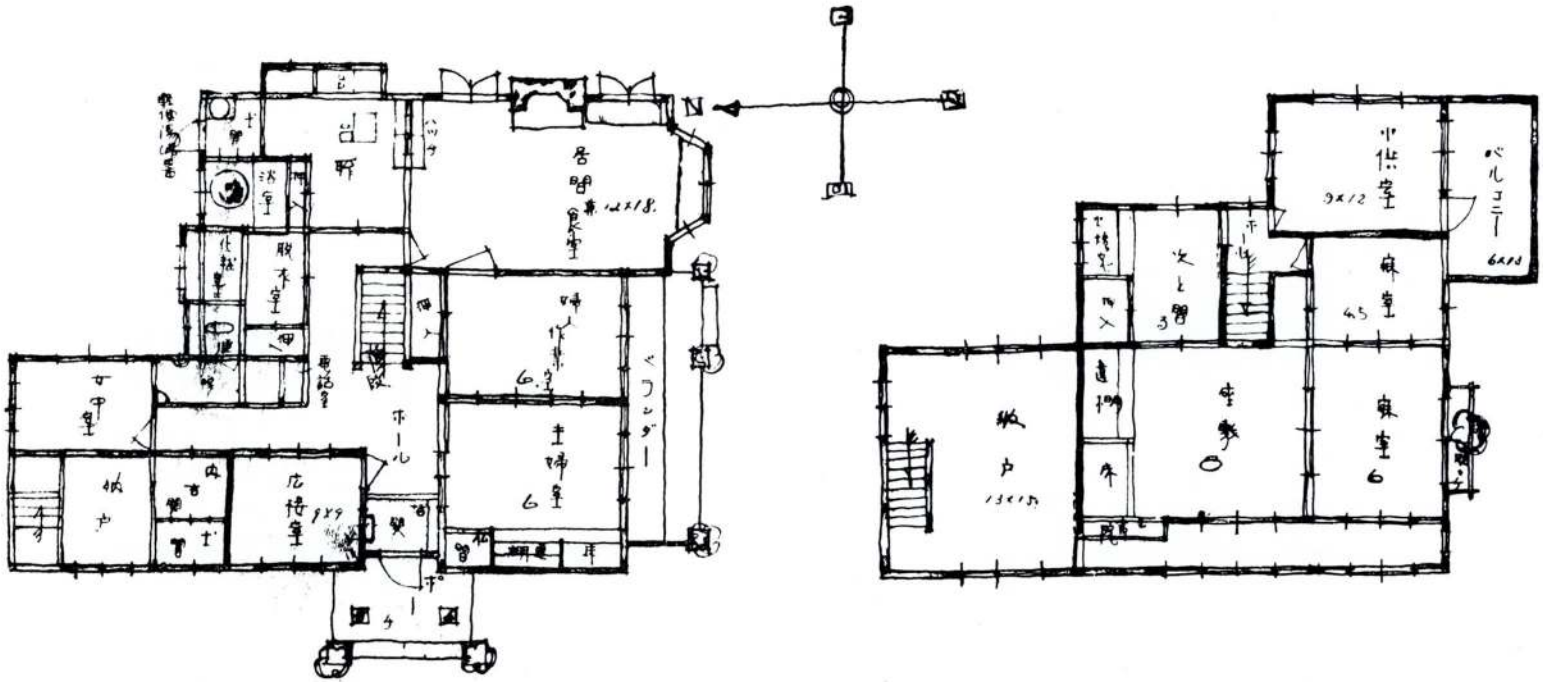


黒田松之助氏新邸〔日本間よりヴェランダを望む〕



臺所

実習図　平面図。




階下平面図　　階上平面図

# 懸賞圖案當選者發表

豫て募集の本誌表紙懸賞圖案審査の結果左の通決定せり

| | 氏名 | 住所 |
|---|---|---|
| 第一等 | 堤越郎君 | 大阪市此花區今開町一丁目三三 |
| 第二等 | 安田則世君 | 大阪市北區堂島ビルヂング三階竹中工務店設計部 |
| 第三等第一席 | 堀武雄君 | 大阪市北區堂島ビルヂング三階竹中工務店 |
| 第三等第二席 | 鈴木久君 | 堺市熊野町大道 |
| 選外佳作 | 山口芳春君 | 大阪市北區堂島ビルヂング三階竹中工務店設計部 |
| 選外佳作 | 堤越郎君 | 大阪市此花區今開町一丁目三三 |

大正十四年十二月

日本建築協會




# 吾が歩み

編輯者たる吾等の生涯は、本誌を、十二度び社會へ送つて、亦も一年の道程を歩み竭くした。顧みれば、憂たてき事もあり、歡喜であつた事もあり、煩はしき事もあり、「生」の闘ひの快さもあつた。されど、それが何んであらうとも、吾等の追想は、永遠に美化されたそれである、恰當、醜惡な素材が美しき繪畫や彫塑となるように。現在の一歩〳〵を、人は奈何に傷ましいものだと云ほふとも、吾等は永劫の彼方を目指して、その一と歩みこそ、美の國エルサレムを見出す旅であることを憶へば、吾等の時間的生活は、いつも意氣と希望の生ま〳〵しい心躍るそれである。氏ギユイヨオは曰つた『吾々の過去は、降り積んで、やがて靜かに吾々のうちに結晶する雪である。眼路もはるかに遲しない、甘美な景色を吾々に展り擴げて見せる。光明と昏氣樓の惑じ、新しい幻影にすぎぬ誘惑を示し見せる。吾々の過去の情熱は最早や一種の景色にすぎない。吾々の歩んだ生活が一幅の繪の樣な、半ば非情の、半ば生ある作品のやうな感じをもつて吾々自らに現はれてくる。「時」の雪の下積になつて、まだ生きてゐる。——生き得る力のあるものは生きてゆく。美であり、壯美であるものは吾々のうちに位置し、根を張つて段々とその力を生成さしてゆく』と。而して、吾等の「時間」の歩みはその素材が何んであらうとも、恒々、「美」を創造する力強い憧憬のそれであらればならぬ。……（K）



# 落葉

## ◎雪國に相應しい建築

外は洋館でも内容は日本建築から洋館にした一つのテンプルとしてそれがまた更に近代化されてアパートメントハウスになるといふ森本博士の札幌に於ける邸宅を或意味に於ての新らしい建築として書いて見たいと思ふ、此家は大分前に有名な有島武郎氏が建たのである、あの詩人であり、文學者である有島さんはこゝで北海道特有の吹雪を味はひ春が來て雪が融けてあのぬかるみのひどい北十何條の道路に北海道の再生を欣んだのであつた『死とその前後』にあらはれて來る北海道の場面など恐らくは此家に題し出された實感ではなかつたらうか、かやうに見て來るとあのバンガロー式の一つの建物も、なか〳〵歴史的に面白いものがあると思ふ、有島さんが去つたあとを森本さんが引受けた亞米利加仕込の文化生活であの化住宅だの洋館だのとあのあたりに櫛比してゐるが其頃は森本さんの此家が其代表であつたものだ、星移り物變り森本さん夫妻は例の文化普及會の事業で東京に居ることが多くあの家全體を森本さんのみの住宅として置くのも贅澤たといふのでポロダストンといふ亞米利加の富豪の先生が住まつてゐたこともあつた、其後北大豫科英語教師のブラウン氏夫妻が住まつて森本博士も一緒に住んでゐた、今度ブラウン氏夫妻が歸國することになつたので森本さんは此家を上と下とに仕切つてアパートメントにするんださうだ、すると此家だけで過渡期にある日本の建築の歴史的變化をあらはしたものといつてよからう。この間森本博士を訪れて見ると留守でブラウン夫妻の案内で見せて貰ふ、階下の南側の部屋は十疊が二つ並んで一つは違ひ棚の床の間が殘つてゐるけれど一寸も不自然ではない、奥の部屋にスピーキングチューブ（話をする間）があつて一つは臺所に一つは二階に通じてゐる南にサンポーチがついてブラウン夫妻はこゝで朝飯を食べるさうだ、この奥の十疊はアパートメントになると臺所になるのださうだが一寸惜い樣な氣がする北側は前が女中室、後の方が臺所に浴場が續く、アパートメントになるとこの臺所が居室に早變りするのださうだ二階は南側に客間とベッドルーム北面して居室、主婦室などがある居室はアパートメントの食堂になり、主婦室は臺所になるのだといふ、二階には浴室も出來るさうた。

## ◎日本家屋の暖房裝置

純粹の日本家屋で完全な暖房裝置をする、といふことは隨分困難であると思ひます、柱や壁に手を入れたり又は戸障子を變へたりすれば、それは大してむつかしいことではないと思ひます、在來の日本家屋を外見はもとより内部もそのまゝにして且つ暖房裝置を施すとすれば私の意見として、日本人は餘りに個人的であつて家族の者でも、食事時位は別として一家團欒をするといふことが尠いのですから是非家族の團欒室といふものを設け度いと思ひます、一體日本人は時たま見える來客の爲めに、家中で一番廣い上等の室を當てありますが、來客のためには適當に他の者を用意して、一番廣い部屋は家族團欒室と仕度いと思ひます勿論家の内部をスッカリ洋式に改造して仕舞つて心安い友達は家族と同樣其の部屋に案内すればよいのですが、夫をもとにして暖房裝置をするのですから、少々突飛かも知れませんが、一番廣い部屋の八疊なり十疊なりとします、八疊は何處の家にもあつて説明の上からわかりよいのですから、此處では八疊間としませう、先づ其八疊敷の中央である二枚の疊をあげます、そしてその一坪の床板を切つて床から地面まで叩きを拵へるのです、丁度湯殿と同じ調子でよいのですが、これは耐火の爲めどうしてもコンクリート風にして置き度いと思ひます、切り落した床板の處は爐のやうにして、床下一尺二寸か一尺三寸の高さに周圍に板を張ります、これは下の叩きと疊の間の段々のやうな調子にすればよい譯です下の叩きの中央に暖爐を置くのです、これは簡單なものです、或時は薪をたいてもよし其處いらにある木ぎれ枯枝を入れてもよいのですがたゞ煙突だけは屋外へ導いて取りつけて置かればなりません、でありませんと煙が室内に籠つたり、埃が立つたりしますからその意味で、古風の爐の榾火は考へものであると思ひます、暖爐の口は雲母で張つて置けば『ほのほ』はちらちらと見えるので焚火の溫かい感じを味はふことが出來ます、暖爐を地に据ゑたので天井の低い日本の家屋が天井が高くなる氣分がします、暖爐の上には必ず湯沸かしをかけるとか、自在鍵を用意して食事時は鍋位かけますと經濟でもあり室内に水蒸氣もとれて衛生上からも兩徳となります此處に腰をかけて幼い子の爲めには足つぎを用意すれば椅子なしの腰かけが澤山出來る譯です、木枯しの夜や雪の夜暖かい焔焰を顔にうつし、暖爐を中心として一家團欒が出來るのです、部屋の調子で隅にこの爐をとれば他の疊も流用出來ませう、それは適宜でよいのです、不必要の折はクレートをのせ床を張り疊を敷けばよいのですが、夏は私はこの叩きに水を入れ小さい噴水でも拵へて金魚が浮かべてそのまゝの涼しい團欒室と仕度いのです、水を張り金魚を浮かべて硝子床として見るも涼しく美しいでせう、何れにしてもこの裝置なら調子も變へす、金子も多く費さないで實行出來ると思ひます、



# 奈良朝の文化

佐藤小吉

## 一

先づ日本の歴史に於て奈良朝時代程偉大なるしかも立派な澤山の遺物遺跡を貽して居るものは他になからうと思ふ。私が喋々申上げるまでもなくお解りになつて居ることでありますが、奈良に於ての有名な建物である大佛殿を首め、十二月から御開封になる正倉院、其他奈良の附近に散在する所の種々のお寺や、又其中に藏められて居る佛像佛具乃至佛經、更に今尚遺つて居る奈良の都である平城宮の跡、是等の物を數へると、他のいづれの時代に較べても奈良朝程、偉大にしかも立派なる遺物遺跡を殘したものはないと云つても、決して誣言でなからうと思ふ。

奈良の大佛は皆樣の御承知の通り、御丈が五丈三尺五寸と云ふ非常に偉大なる金銅佛で、エヂプトの謎として例に引かれるスフインクスよりは幾分か丈は短いと云ふことでありますが、兎に角それに匹敵する位のものである、又正倉院の如き、大理石とか云ふやうな石造の建物でもなければ、鐵筋コンクリートの建物でもなく、唯あゝ云ふ風に三角形の材木を交互に組み合せて建てた所謂校倉造の倉庫であつて、而も奈良と云ふ所は、昔から平重衡や松永彈正の亂に幾度か兵火に罹り、興福寺や東大寺抔の建物が幾度か火災に罹かつて居るにも拘はらず、只正倉院たけが何等の害を受けずに是が遺つて居ると云ふことは、何と云つても不可思議に堪へぬ事であります、殊に其中には澤山の御寶物が納めてあつて、讀者も多分御覽になつたでありませうが、樂器もあれば武器もあり文房具もあれば、火鉢のやうなものもあり、世界に類のないやうな凡ゆるものが含つて居る、さう云ふものが此奈良の正倉院に於てのみ保存されて居ると云ふことは一方から云へば洵に有難いことであります、先年二三度引續いて正倉院を見に來る獨逸の或學者が最初見た時には一向勅封と云ふ意味が解らなんだが、二回三回四回と見るに及んで、初て正倉院と云ふものを了解したと云ふことを言つて居りますが、それは日本の如き國家でなければ斯の如きものが保存されないのであります、是は勅封でありまして、其封を解いて、之を開け

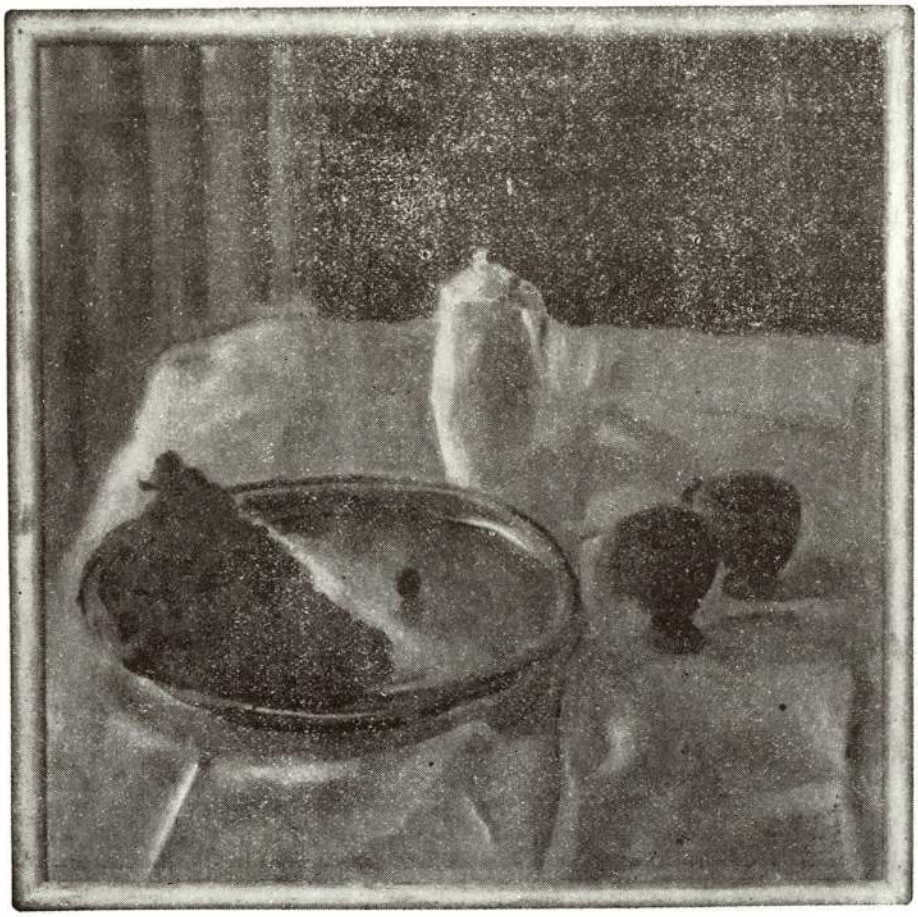
る時には態々勅使が立ちます、即ち日本天皇の勅封に依て初て斯う云ふ倉が遺つて居るのであります、其點に於て獨逸の或學者は感嘆して居つたと云ふことでありますが、其事を聞いて我々も同感に堪へぬのであります、兎に角古來未だ曾て燒けたことがないと云ふことであります、鎌倉時代に雷火があつて正倉院にも火が燃え付かうとした時に、他から龍神が出て水を吹き上げて消止めたと云ふ傳說があつて、今日でも正倉院の側にある小さなお宮には龍神が祀られてあります、さう云ふ風に勅封に依て何と云ふか威嚴と云ふものがあつて千何百年以來此建物は燒けなかつたのでありますが、而も其中に納つて居る御寶物には一々目錄が附て居りまして、光明皇后が納められた御寶物もあれば、聖武天皇の御遺物もあります、その重なるものは、聖武天皇の四十九年になつてから先帝陛下の愛玩されたものを大佛に献上すると云ふことで、納められたもので又外に種々雜多の藥品もありますが、草根木皮と云ふものは布のやうな袋に入れてありますし、毒藥や劇藥の如きものは木の壺とか又は土器のやうなものに入れてあります、さう云ふ藥草は實際大佛に献上されましたが、若し之を用ひやうと云ふ者があれば、用ひても可いと云ふ願文があります、それで孝謙天皇享仁天皇の御代にそれを民間に出されたと云ふやうな記錄が遺つて居ります、又武器にしても、孝謙天皇の御代に惠美押勝の亂がありましたが、其時に此處の弓矢を出して、實際にお使ひになつたと云ふものが納つて居ります、或は火鉢があつて、其灰まで遺り居りますし又筆にはまだ未製の軸まで遺つて居ると云ふ風に、雜多のものが遺つて居りまして、其内容を取調べましたならば、奈良朝の文明と云ふものが如何に發達して居つたものであらうか又どう云ふ傾向を有ち、どう云ふ傳來のものであつたかと云ふ事が研究出來るであらうと思ひます。更に又奈良の附近に散在して居ります處の寺院——無論或ものは奈良朝以來の建物でありますが、奈良朝になつて奈良に移轉して來たものであります、藥師寺然り元興寺然り、大安寺然り、其起りは飛鳥と云ふ所にあつたのでありますが奈良に都を置きましてから、さう云ふ寺は大抵奈良に移轉されたものである、其建物及び其處に含つて居る所の本尊なり、其他の佛像、或はそれに附帶する所の道具から、お經と云ふものは又非常に莫大なものであります、さう云ふものを見て、我々は其時の佛像彫刻はどうであつたか、建築はどうであつたか、或は當時の宗教はどう云ふものを見て我々は其時の佛像彫刻はどうであつたか建築はどうであつたか、或は當時の宗教はどう云ふものを崇拜して居たものであらうと云ふことが考へられるのであります、殊に此奈良の都所謂平城宮の跡と云ふものは建物は無論ありませぬが、土壇は今以て保存されて居ります、例へば大極殿の如きも立派に土壇が遺つて居て、其左右に齊等に建られた幾つもの建造物の址である土壇が遺つて居りますがさう云ふ土壇が牛馬も冒さず、田夫も耕さずして今日まで遺つて居ると云ふことは洵に不思議であると云はなくてはならぬのであります、京都の平安の都は書いたもの即ち記錄が立派に保存されて居りますから我々は平安の都の跡を見る事は出來ませぬが、書いたものに依て大體斯くあるべきものであると云ふ事は想像されます、併し奈良の都に就いては書いた物が無いのであります、けれども、實際の土壇の跡が遺つて

居りまして　京都の平安京に比べて多分斯う云ふものであらうと云ふことは想豫出來る、專門の鑑識に依つて御覽になれば、斯う云ふ建物であつたらうと云ふことは十分御了解になることゝ思ひますが、さう云ふものが此奈良に遺つて居ると云ふことは洵に我々史家に取つて有難いことゝ思ふのであります。

## 二

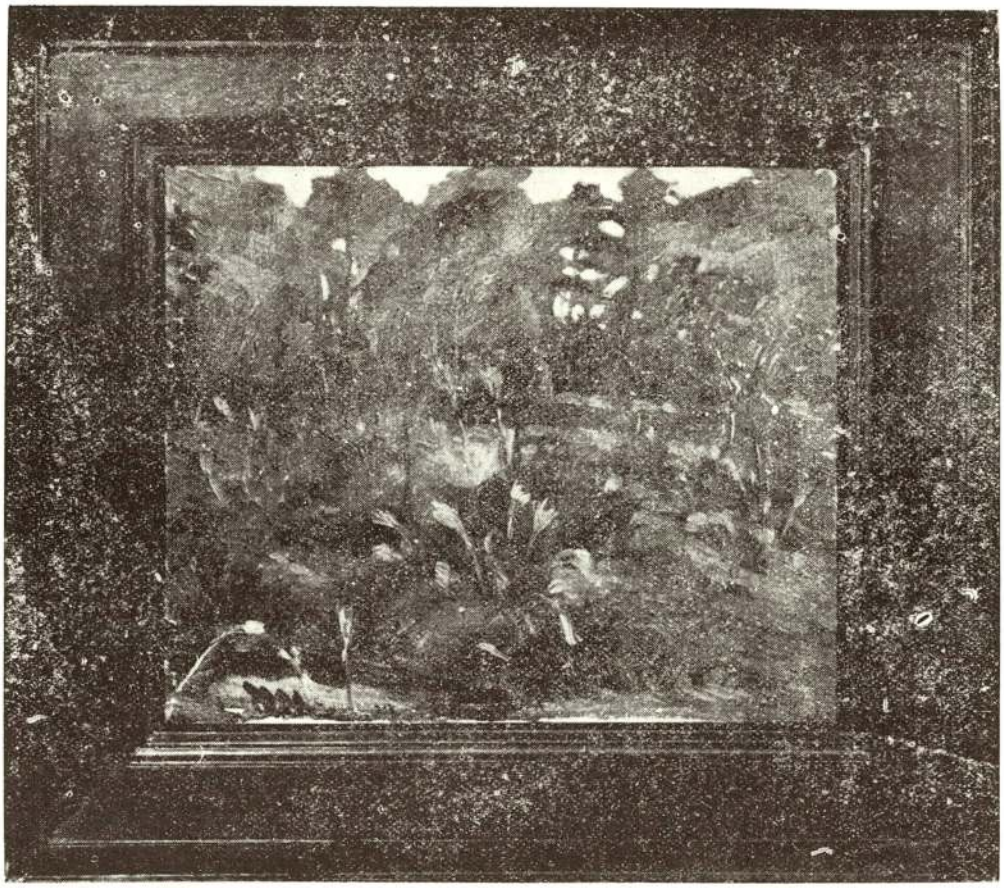
それで今列擧いたしました所の色々の遺物、或は遺跡を文學者でも、美術家でも、歷史家でも能く御研究にならなければ、此奈良朝の文化と云ふものは理解が出來ない事と思ふ、一概に言へば、奈良朝の文化と云ふものは大に大陸文明の影響があつたと云ふことは言ふまでもないことであります、而も前代の文明は三韓を通して大陸の文明を承けて居つたのでありますが、奈良朝に至つては直接に唐と交際が始りましたから、三韓の手を借らず大陸の文明を承けて居つたのであります、從て又當時非常に交通の頻繁であつた所の唐と云ふ國を理解しなければ、奈良朝の文明が十分に理解出來ぬことゝ思ひます、御承知の如く當時の唐は非常に廣大な領土を占めて居りまして、東は朝鮮を征服し、南は今の安南に至り、西は土耳其斯坦、中央亞細亞にまで及んで、亞剌比亞帝國や東羅馬帝國との交通もあつたと云ふことは歷史上明かなことであります、仍ち此奈良朝の文化には大陸の文明が入つて居ると云ふことは確に書いたものゝ上に於ても證明することが出來るのでありますが、今其一二の例を擧げますと先づ奈良の大佛を造つて其落成式を擧げる時に、時の帝孝謙天皇から朕は婦人の身であるから、大佛に向つて開眼供養をすることが出來ない、依てお前に此開眼供養の導師を頼むと云ふことの勅命が下りまして、其開眼供養の導師を勤めたのは誰であるかと云ふと婆羅門僧正（俗に所謂菩提仙那）であると云ふことが記錄に書いてあります、あの五丈三尺五寸の大佛の前に於て而も日本に於て初て行ふ開眼供養の導師を勤めた菩提仙那は何處の人であるかと云ふことを段々調べて見ますと、印度の人だと云ふことが歷史に書いてありますが、印度の僧である菩提仙那が日本に來て大佛の開眼供養の導師を勤めたと云ふことは餘程不思議なことゝ言はなければならぬ、傳ふる所に依ると此菩提仙那は印度に在つて、唐の五臺山に文珠菩薩が居ると云ふことを聞いて、遙々唐の五臺山まで文珠を訪ねて參りました所が、途中に於て一人の老人に會つた、『お前は何處に行くのであるか』――『私は山に登つて、文珠菩薩に會ふ積りである』――『さうか、文珠は今此處に居ない、日本に行つて居る』――『さうか』それではと云ふので、方向を變へて日本に來たと云ふことでありますが、其時に林邑の人佛哲と云ふ人を伴つて來た、此佛哲がどうして日本に伴はれて來るやうになつたかと云ふと、此人は非常に慈悲深い人で貧民を賑さうとして海中に珠を拾ふとした所が、暴風に會つて、破船して困つて居つた際に菩提仙那に會つて日本に行くと云ふ話を聽いて、それぢや私も一緒に伴れて行つて貰ひたいと云ふことで、天平の八年に日本の遣唐使が歸つて來る時一緒に日本にやつて來たのでありまして、當時行基菩薩が難波津即ち今の大阪灣に百人の僧侶を率ひて菩提仙那を迎へたと云ふことであります、而も傳ふる所に依ると、菩提僧正が梵語

で話をされたら、行基も矢張り梵語で以て之に應答され、行基が日本語で話をされると、菩提僧正は又日本語で答へられたと云ふことでありますが、果してさうであつたか、どうか言ひ傳へであるから判りませぬが、さう云ふ風に書いてあります。而して菩提僧正は日本に來てからは、聖武天皇の勅命に依て大安寺に居ることになりましたが、行基は菅原寺と云つて、電車で見ると今の西大寺の東の方に屋根が崩れかゝつて、今や傾かうとする非常に荒れ果てた寺がそれで、行基はその寺に居つて其處で亡くなつたのでありますが、行基が其の菅原寺に一日菩提僧正を招待して、一緒に御飯を食べ、お酒も飲んだのか、どうか知りませぬが、非常に愉快になつて遂には二人で飛廻り跳ね廻つた、所が其處へ又一人の汚い乞食のやうな老翁が入つて來て、三人一緒になつて踊り廻つたと云ふことが書いてあります。此汚い老翁が即ち世に謂ふ所の伏見の翁でありますが、此老翁は三四年前から其處に來て居つたのでありますけれども、何時も默つて居て、一言も發した事はない時々東の方春日山の麓の方を見て居つたと云ふことでありますが、數年の間一言も話をしたことがない、所謂唯默つて伏して見て居つたから、菅原寺附近一帶の地を伏見と云ふ名が付いたと云ふのであります、是は印度人であつて日本に來た爲に言語が通じないので、止を得ず獨り默つて居つた所が、そこに菩提僧正と云ふやうな人が來て、同國の人であつたから、初て言語を理解し、喜んで躍り廻つたのでなからうかと云ふ說があります、寺僧では此大佛殿を四聖建立の伽藍と云ひまして、即ち聖武天皇、行基菩薩、良辨僧正菩提仙那の四人が集つてあゝ云ふ立流な大佛を建てられたものでありまして、古來の傳說、寺の言ひ傳へに依ると、聖武天皇は觀音の化身であり、行基菩薩は文珠の化身で、良辨僧正は彌勒の化身、菩提仙那は普賢菩薩の化身であると云ふのであります、是は佛敎の方面で、あゝ云ふ大佛のやうなものは迚も人間業で出來るものではない、觀音とか文珠とか普賢彌勒と云ふやうな立派な佛樣が寄つて建てられたものであるさうでなければ、あゝ云ふものは出來るものでないと云ふ想像からさう云つたものでなからうかと思ひます、又文珠が行基菩薩に生れ更つたと云ふやうなことも、菩提僧正が日本に文珠に會ひに來たと云ふ、其處に巧く理窟を付けたものでないかと思ひますが、要するに傳說はどうであつても、菩提僧正は印度の人であつて、大佛の開眼供養の時に導師の大役を勤めた人である、さうすれば、菩提僧正は日本に印度直接の佛敎廣く云へば文化を傳へられたものでなからうかと思ひます、尙菩提仙那に伴れて來られた林邑の佛哲は日本に印度の音樂を傳へたと云ふことであります。林邑は簡單に云ふと、今の安南の一部分でありまして、唐の時の『占不勞（チヤンブラ）』とか『占城（シンヂヤ）』と云ふのは即ち安南のある所に當つて居ります、而して唐は最も盛なる大宗の時代、印度は戒日王（シラーヂチヤー）の時代に互に交際をして、此印度の戒日王が殺された時には唐の臣王玄策が印度の亂を平げたと云ふことがありますが、兎角印度と唐の交通のあつたと云ふことは言ふまでもないことであります、又唐の領土は安南にも及んで居つたと云ふことは、言ひ換へれば、唐と印度、安南との交通があつたと云ふことが證據立てられるのであります。さう云ふ唐と我國との交通があつたのでありますから、印度或は林邑の人が日本に來たと云ふこと



(三)　觀　展　會　柊

—氏吉鋭部谷長　「物　靜」—



（三一）　觀　展　會　柊

——氏文正藤伸　〔秋晩原草〕——

も是亦爭はれぬことゝ思ひます、續日本紀に依ると、波斯の醫者が來たと云ふことも見ゑて居ります、兎に角佛哲の傳へたと云ふ音樂は林邑の音樂で、雅樂と云ふものに當つて居りますが、佛哲の傳へた曲が八つあります、今日に於ても法隆寺や大佛殿の佛樣の前で時々奏するのであります、それで此雅樂と云ふものに就いて簡單に申して置きたいと思ひます。

## 三

雅樂は極く古い音樂でありますが、先年の御大典の時に宮中の饗宴場に於ても奏せられましたし、此奈良に於ては時々我々も見ることが出來ます、例へば十二月行はれます春日の若宮のお祭の時にも雅樂を奏せられます、是は大抵左舞右舞と分れて居りまして、左舞は印度や支那の舞樂、右舞は高麗や渤海の舞樂と云ふことになつて居ります、而して左の方から舞ひ始めて、右の方が舞ふ、之を番舞（カヘシ）と云ひ、左に對して右の方が舞ひますから、又答舞と云つて居ります、古い繪卷物や古い物語抔を御覽になりますと、左右に幕を張りまして左と右と別々になつて居る、それで佛哲の傳へた所の雅樂の八曲の中に菩薩の舞と云ふのがあります、それは先年法隆寺に於て聖德太子の千三百年祭の時にも舞ひましたが、大抵は佛の供養の時に奏する舞樂でありまして、菩薩の假面を被ります、又迦陵頻、胡蝶と云ふのがありますが、共に童舞と云つて、子供が舞ふ非常に優美な舞であります、それで此菩薩、迦陵頻、胡蝶が各々佛樣の前に出て花をお供へするのでありますが、胡蝶舞も迦陵頻舞も童舞でありまして、初めに四人ありますが、胡蝶は子供が蝶の羽を肩に翳し、冠に山吹の花を戴き、右の手に山吹の葉を採つて舞ひます。又迦陵頻は迦陵頻迦と云ふ印度の鳥の羽を肩に付け、矢張り花を翳して居ります、又鐃鈸と云ふものがあります、即ちお葬式の時に鳴す鉦の樣な物でありますが、ハチの音は迦陵頻の鳴く音を模したものであると云はれて居ります。それで菩薩が花を供へました後で菩薩が舞ひ、伽陵頻が舞つて胡蝶が舞ふと云ふことになつて居ります、さう云ふ舞が今日も遺つて居りますが、其意味はどう云ふことであるか十分に判りませぬけれども、印度の學問に造詣の深い高楠博士が南海寄歸傳に依て一說を立てゝ居られます、此本は先年高楠博士が英譯して『オックスフォード』大學から出版されてから西洋人の間にも非常に有名になつて居りますが、唐の三藏玄奘と云ふ坊さんが高宗の時に東印度に遊歷して普くお釋迦樣の跡を取調べ、其見た所を書き記した記事を唐に歸へる人に賴んで送つたと云ふのが即此書であります、それで博士の考證の大要は、此菩薩舞と云ふのは乘雲菩薩の慈悲深いことを現したものでなからうかと云ふのでありまして、即ち印度に於て龍族が金翅鳥に擊退されて、龍の一族が將に絕えやうとした時に、乘雲菩薩が慈悲心を起し、我身を金翅鳥に食はせて、龍の種族の絕滅しやうとするのを救つたと云ふことを、前に述べた印度の戒日王が演劇に仕組んだのが菩薩舞になつたものでなからうかと云ふやうなことを書いて居られますが、兎に角斯う云ふ雅樂と云ふものは洵に趣味の深いものでありまして、此處には寫眞を入れる事が出來ませんが、奈良人形の彫刻を御覽になりますと陵王の舞などゝ云つて、恐い假面を被り、何か風呂敷のやうな布を圓く切り抜いて頭を突通し恰度動亜のや

うなものをさげて棒の様な武器を持つて舞つて居るのがありますが、あゝ云ふ服裝を見ると、あれはどうしても蠻族、即ち西方の種族の服裝に相違ないのであります。印度や中央亞細亞ではあゝ云ふ服裝をして居りますから、あの舞樂を見ても、如何にも外國傳來のものであると云ふことが想像出來るのであります、それは毎年春日の若宮に於て行はれますから、それを御覽になれば、外國傳來の舞樂は斯う云ふものであるかと云ふことを味ふことが出來ます。奈良人形に於て今言つたやうなものが彫つてあるのも約りさう云ふ所から來て居るのだらうと思ひます、それで大佛の開眼供養の時には印度の樂も、唐の樂も、朝鮮の樂も、日本在來の樂も總ての樂を奏したので、續日本紀に佛法東歸せしより齋會の盛なること未だ曾て此の如きものあらざるなりと云ふやうなことを書いて居りますが、見る者をして非常に驚嘆したものと見えます此續日本紀の文章を見ただけでは私も本當のことは能く判らなかつたのでありますが、此春奈良の博物館に於て從來正倉院にありましたボロ〳〵になつた古い布を整理して、展覽されまして定めて皆樣も御覽になつたらうと思ひますが、其時列べてありました舞樂に用ひた古い布や大佛殿に吊り下げた幡などを見まして　如何にも齋會のさかんなること此の如きものはないと云ふことが洵に我を欺かないと云ふことを私は確に會得したのであります、又其大佛殿の落慶式の時には佛哲が林邑の舞を舞つたと云ふことが東大要錄に書いてありまして、一生懸命に舞つたものと想はれます。

## 四

尙ほ御覽になつた方もありませうが、唐招提寺の開山鑑眞和尙が日本に來たと云ふことも或意味から云つて、洵に不思議の感をいたします、此鑑眞和尙が日本に來たのは戒を授ける爲で、行基菩薩の如きも此人から戒を受けたと云ふことでありますが、戒を授けると云ふことは非常に嚴しいことで、而も日本には當時本當に戒を授ける坊さんが無かつた。そこで態々人をやつて、唐から戒を授くべき坊さんを聘び寄せることになつて、鑑眞和尙が日本に來るやうになつたのでありますが、其傳記は群書類徒の中に詳しく書いてありまして、鑑眞和尙は彼の有名な齋國の淳于髡の子孫で、彼方に於ても容易に得難い高德の坊さんでありましたが、佛法の爲に態々日本から人を迎へに來たと云ふので、それなら行かうと云ふことになつて、色々準備をして日本に渡らうとしたのでありますが、不幸にして風波の爲に五度も船が破損し、漸くのことで日本に來たのであります、而して此和尙は潮水が眼に入つて盲になつたと云ふことでありますが、其一行が四百三十餘人、無論其中には本當の宗敎家もあつたでありませうし、宗敎以外の人例へば佛師即ち彫刻家もあり、色々の人が雜つて居たでありませうが、其中に胡國の人安如寶、崑崙の人軍法力、膽波即ち林邑の人善聽と云ふ人があつて、此安如寶は桓武天皇の時に戒を授けた人でありますが、胡國の人と云ふだけで、果して何處の人であるかと云ふことは學者の間に色々の異見がありまして、白鳥博士などは窣利粟特即ちソグヂアナと云て今のボッカラー一地方の人であらうと云つて居られます、軍法力は、招提寺を御覽になつた方は御承知でありませうがあの金堂にあります梵天帝釋の二天又四天王の四體

或は講堂にあります彌勒菩薩持國多聞の二天の像は孰れも此唐の軍法力の作だと寺では云つて居りますが、是は崑崙の人であります、善聽は前申した佛哲と同じく林邑の人でありまして、是等の人々が其四百三十人の中に居つたのでありますが、其時に持て來たお經や、お釋迦さんの袈裟とか或は佛舍利であるとか云ふものが今でも唐招提寺に遺つて居ります。尙ほ奈良の戒壇院と云ふものがありますが、あれは日本に於ける三戒壇の一つで、其建物は昔から少しも崩れず、其儘今日まで續いて居ると云ふことであります。即ちあの戒壇に於て聖武天皇や光明皇后を首め當時の文武百官が鑑眞和尙から戒を受けたのでありまして、後此鑑眞和尙が勅命に依て新田部親王の邸を貰つて、其處に戒院を建てたのが即ち招提寺であります。從て今招提寺の北川智海師が戒を授けると云ふ時には矢張りあの戒壇に於て戒を授けるのでありまして、三百戒の中二百何戒までは、あの北川さんが有つて居ると云ふことであります。自分も大佛の落慶式がありました時に彼處で北川師から戒を受けましたが、其時もあの戒壇に鑑眞和尙の齋して來たお釋迦さんの袈裟と舍利を置きまして、聖武天皇や光明皇后がお受けになつたと同じやうな式に於て我々に戒を授けて呉れたのでありまして、又あの弘法大師の如きも彼處で戒をお受けなすつたと云ふことでありまして、高野山に行つて弘法の後を繼ぐものは必ず東大寺の戒壇院で戒を受けなければならないと云はれてありますが、今でも北川と云ふ人が彼處に出て戒を授けるのでありまして、我々もさう云ふことに依て、聖武天皇がどう云ふお心であれをお造りになつたかと云ふことを實驗したいと思ひます。

## 五

色々斷片的なことを記しますが、正倉院の中にあります寶物は數限りありませぬけれども、その中の紋樣に付てお話しやうと思ひます、茲に斯う云ふ實物（裂）がありますが、是は所謂狩獵紋であります、（寫眞略）斯う云ふ紋樣は正倉院、法隆寺の古裂又正倉院の碁盤の模樣にも出て居る、大體云ふと大小二つの同心圓が圈を作りその二の圓周間には數多の小圓があり尙四方の小圓は四個の小方形に代へられて、他の同一の圈を四方に結び付けて居る。此圈內には眞中に一本の樹木を配し其の樹木の方に向つて左右各騎馬武士が後向に弓を引いて後からは獅子が飛びかゝらうとして居る。尙その圈內の空間には鹿とか唐草とを巧に配してある。奈良の博物館の、一般の人が入る玄關を突當つて、左側に法隆寺から出品された四天王旗と云ふのがあります。これが即ち狩獵文で是等を見ると、どうしてもそれは外國傳來のものと見るより外仕樣がないのであります。此狩獵文の起原はアッシリヤでありますす。西洋史を見れば、どんな簡單な本にも書いてありますがアッシリヤ王のアッヒュルバニパール（紀元前六六八——六二六年）の獅子狩をして居る彫刻に是と同じものが出て居ります、それで此由來は何處にあるかを云ひますと、アッシリヤに起つて、それがペルシャに傳つたものであります。即ち紀元二百二十六年から六百四十二年までは榮へたササン朝の時分に盛に中央亞細亞等に往來したのでありますがペルシャ人がさう云ふものを模樣化して盛に此狩獵文を作り出した。ペルシャと唐との交通が始ると共に、之を唐に輸入し、それ

が又日本に持て來られたものであらうと思はれます。これが法隆寺にある聖德太子の御褥とか御旗杯に付いて居ます。大小同心圓の圓周の中に小圓がある所から俗に星つなぎ模樣と云つて居りますが、此馬を見ると、矢張り日本にないもので、ペルシャ模樣で馬に翼が付て居る、是はどうしても日本の模樣ではない、斯う云ふ猛獸の獅子が日本に居る譯がありませぬから、是は外國も中央亞細亞附近から來たものに相違ないと云ふこと誰でも氣が附きます。先づ簡單に云ふと、アッシリヤに起つて、波斯に入り、ペルシャから一方東は唐日本に傳り、又一方西は埃及東羅馬を經て歐洲にもいつたものと見わて獨逸佛蘭西などにも之に關係した模樣があります、斯う云ふものを注意して居れば、隨分澤山に我々は蒐集することが出來るのでありまして、之に依てもさう云ふ外來文明が驚くべき程日本に入つて來て居たと云ふことが判るのであります。

近十月一日に國勢調査が行はれたのでありますが、あの時の宣傳を見ると、國勢調査は一國の文明を卜するものであるから、日本國民たるものは確りやらなくちやならぬと云ふやうなことを云つて居りますが、此の一國文明を卜すべき國勢調査が既に奈良朝、詳しく云へば、奈良朝以前に於いて非常に精密に行はれて居たと云ふことを知つて我々は驚かざるを得ないのであります。即ち正倉院の古文書の中に約千三百年前大寶二年から養老年間に至るまでの、美濃、筑前、豊前、豊後、下總、陸奥、常陸、讃岐、因幡等の諸國の戸籍帳が立派に遺つて居る。無論或ものは斷片的でありますが、又戸籍帳に似た計帳を云ふもものありますが聖武天皇即位の神龜元年から始つて天平六年に至るまでの近江、山城及び左京の計帳が遺つて居ります、それで戸籍帳と云ふのは後世の人別帳でありますから、讀者はお判りになつて居りませうが、計帳と云ふのは何であるかと云ふと、一國から租稅を納めるのに、今日と違つて、昔は、四民誰も彼も男女に限らず土地を給せられて、一人一人一人前になれば稅を納めるもので非常に厄介である。然るに位のある人は稅金を納めぬでも可いとか、或は人一人に付て稅金を納めるのであるが、二十歳以上の者は正當の稅を納めて、二十歳以下の者は半分納めれば可いと云ふやうなことになつて居りますので、年齡を詳しく書いてあるし病氣の種類などを詳しく書いて、其後に正當の稅金を納める人が幾人で、半人前の人が幾人あつて、病氣の人が幾人あると云ふことを細かに書いてあるのが計帳であります。是は今の國勢調査よりもつと精密なものと私は考へるのであります。どう云ふ風にして之を作るかと云ふと、例へば戸主の者から書付けを出させ、それを基礎にして地方官が書類を作るのであります、それは其印刷物に

凡男女三歳以下爲黃。十六以下爲少。廿以下爲中。男廿一爲丁。六十一爲老。六十六爲耆。

とある其分類に依て書くのでありまして、私は正倉院に現在保存されて居る最も古いと思はれる『太寶二年十一月御野國山方郡の戸籍』と云ふのを實物大に寫眞に撮つたのでありますが、右と比較して先づ斯う云ふ風なものであると御承知を願ひます。而して行政區劃の單位は今は府縣でありますが、元は國が單位で、其基準が國、郡、里(今の町村)となつて居ります、そこで

三井田里戸數五拾戸　上政戸拾壹　中下壹戸　下中一戸
下上壹戸　下下捌戸
中政戸貳拾壹下中伍戸
下下拾陸戸　下政戸拾捌下上壹戸
下中壹戸　下下拾陸戸

此上政戸中政戸下政戸と云ふことに付ては簡單に云へば、兎に角租稅を出す者が五人以上あるものを上政戸三人以上あるものは中政戸、二人以上あるものは下政戸と云つて等級を分けたのであります、而も御覽の通り數字は非常に精確で、今のやうに唯簡單な棒を一本引いて一、二本引いて二と云ふやうなことにせず、必ず難かしい壹貳參肆伍と云ふ文字を使つて居る、證文は皆さうでありますが、此戸籍帳に於ても總て斯う云ふ文字を使つて居ります、非常に正確に書いたものであります。

口數捌佰仇拾仇男肆佰貳拾貳　有位捌正丁參　廢疾壹
次丁參　嗜老壹

此『丁』と云ふのは後に變りまして、二十歳以上を正丁、二十歳以下十六歳以上を次丁と云ふ事になつて居ります、『廢疾』と云ふのは、癈、殘、篤と云つて病氣の種類を三つに分け、それを又細かに規定してありまして、耳が聽へない者、眼が見えない者、或は手足の指が無い者、禿頭病等が癈疾であつて啞、倭人、手足の亡い者等は癈疾、癩病、癲癇、兩眼の見えない者等が篤疾と云ふことになつて居りますが、さう云ふものが戸籍帳にちやんと書いてあるので、非常に精密なものであります、耆老は即ち六十六以上の者であります。

正丁壹佰伍拾參之中兵士參拾貳、遺壹佰貳拾壹

即ち二十歳以上一丁前の人間が百五十三名あつて、其中兵隊になつて居る者が參拾貳、遺が百二十一と云ふので此遺と云ふのは引いた殘りのものと云ふ意味であらうと思ひます。

次丁　拾　少丁肆拾壹之中　兵士參
遺參拾捌　小子壹百肆拾肆　緑兒伍拾貳
癈疾伍　篤疾貳　耆老陸
女肆佰陸拾參　有位次女壹　正女貳佰拾貳

それで昔の何處の戸籍帳を見ても常に女の數が多い、是なども大に注意すべきことで、日本に於て妾を置くと云ふことも此女が多いと云ふことに原因して居るかも知れないと云ふ研究も出來る譯であります。

次女　拾伍　少女肆拾　小女壹佰貳拾捌
緑女肆拾伍　耆女貳拾貳　奴　陸
正奴參　次奴壹　少奴壹
小奴貳　婢　陸　正婢肆
少婢參

丁度計算は合ふて居ります、斯う云ふ風に戸籍帳には色々詳しいことがありまして、種々樣々な研究が之に依て出來るのであります。

## 六

次に計帳の方もちつと好い例があつたかも知れぬが、好い加減に一番初になつたものを書いたのでありまして、神龜元年近江國志何（滋賀）郡の計帳であります。

戸主廣麻呂　年卅　六　正丁　職分資人、右頬黑子
母若子賣　年六十八　耆女　頤贅
男羸人　年　五　小子
弟脩麻呂　年卅　四　正丁　儲人、上脣黑子

（賣脫力）
妻車以君支麻須年卅六　　右頰黑子
（賣脫力）
女　虫　年十　六　小女　鼻右柱黑子
（賣脫力）
女阿流自　年十　一　小女　逃、養老五年
賣脫力）
女伊夜玉　年　九　小女　右頰黑子
（賣脫力）
妹床世　年廿　七　丁女　右頰黑子
妹姉賣　年　廿　少女　右眉上黑子
（賣脫力）
姑古阿麻　年六　十　丁女　逃、養老五年
姑阿麻賣　年五十九　丁女
大田史加比麻呂　年卅四　正丁　逃、養老七年
丈安史法麻呂　年七十四　耆老　右目下黑子
奴手麻呂　年廿　九　逃、養老五年

之に依て我々が面白く感ずることは下に註を書いてあることである、『資人』と云ふのは今日の護衞兵のやうなものであります、即戸主の廣麻呂の職分は資人で右の頰に黑子があると書いてある、又お母さんには頤に疣があつて、弟には上唇に黑子があり、妻君には右の頰に黑子があると云ふので、お母さんも夫婦兄弟も黑子があるのは遺傳したものと見ねる、そして十六歳の娘には右の鼻柱に同じく黑子があつて、十一歳の娘は養老五年に逃亡して居る、其次ざ二人は共に右頰に黑子があつて、次は右の眉の上に黑子があり、次の婆さんは養老五年に逃げて居るし、二十四歳の男も養老七年に逃亡し、次の七十四の老人は右の目の下に黑子があつて、次の奴が又逃げて居る。斯う云ふ風に逃亡でも何でも詳しく書いてあるのでありますが、中には十一歳の女が子供を有つたと云ふのがあり、十二歳にして人の妾となつたと云ふのがあります、是は戸主が三十六歳で、妻君も三十六歳で、夫婦同年でありますが、夫婦同年と云ふよりも、妻君の方が年長であるのが澤山ある。さう云ふ關係から妾を置く必要があつたのかも知れませんが、二人三人も妾のあるのが澤山ある、兎に角此計帳を調査して見ると、それが非常に精密なものであることが判るのであります。

それで斯う云ふものを作るには地方官に當る人が自から調査して廻るのでありますが、其費用を原帳とか何とか云ふものに、ちやんと計算してある、又先述べたやうに、廢殘篤と云ふ病氣の種類に依て稅金を免れることも出來るので、病氣でない者が病氣であると誤魔化してしまへば、それだけ稅收入の上に影響する譯でありますから、調査に廻る役人は醫者を伴つて一人々々見て歩く、それを貌閱と書いて居ります、而して此戸籍帳は三通作りまして、二通太政官に差出すのでありますが、其一つは時の宮内省を經て、陛下の御覽に入れ一つは今の内務省に當る民部省に留め置き、殘りの一通は地方廳に保存されるのであります　而して此戸籍帳は六箇年毎に改正を致しまして　前のものと比較すると云ふのであります、之に付て特に注意すべきことは當時の一戸即ち一家族の數が現今に比較して非常に相違があると云ふことでありまして最も多いのは百二十四人と云ふ大家族があると云ふ文書が

遺つて居りますが文書に遺つて居らぬものでもつと多いのがあつたかも知れませぬ、餘り詳しく申上げませぬが、飛彈國大野郡に今日でもさう云ふ大家族が遺つて居ることが或る雜誌に發表されて、非常に學者の注意を引いたことがあります　尙ほ先の戸籍帳の家族の中には奴婢が含まれて居りますが、其百二十四人と云ふ大家族の中には奴婢が三十七人含まれて居ります、其中には又能く調査して見ますと、戸主の奴婢が幾人と云ふやうに、戸主の私の奴婢と云ふものがある、戸主一個人の附屬物となつて居る、又昔の奴婢と云ふものは賣買が出來て、物體同樣に取扱ふことが出來た、彼の物部守屋が亡された時に蘇我馬子が其奴婢を沒收いたしまして、難波の天王寺に納めたと云ふことが書いてあります、又聖武天皇も東大寺に奴婢二百戸を寄附されたと云ふ事が書いてありますが、其時の奴婢が、元正天皇の靈龜元年の햡踏に依ると、奴の方が一人六百文、婢の方が四百文と書いてあります、之を見ても、奴隷として賣買したと云ふことが判るのであります。

## 七

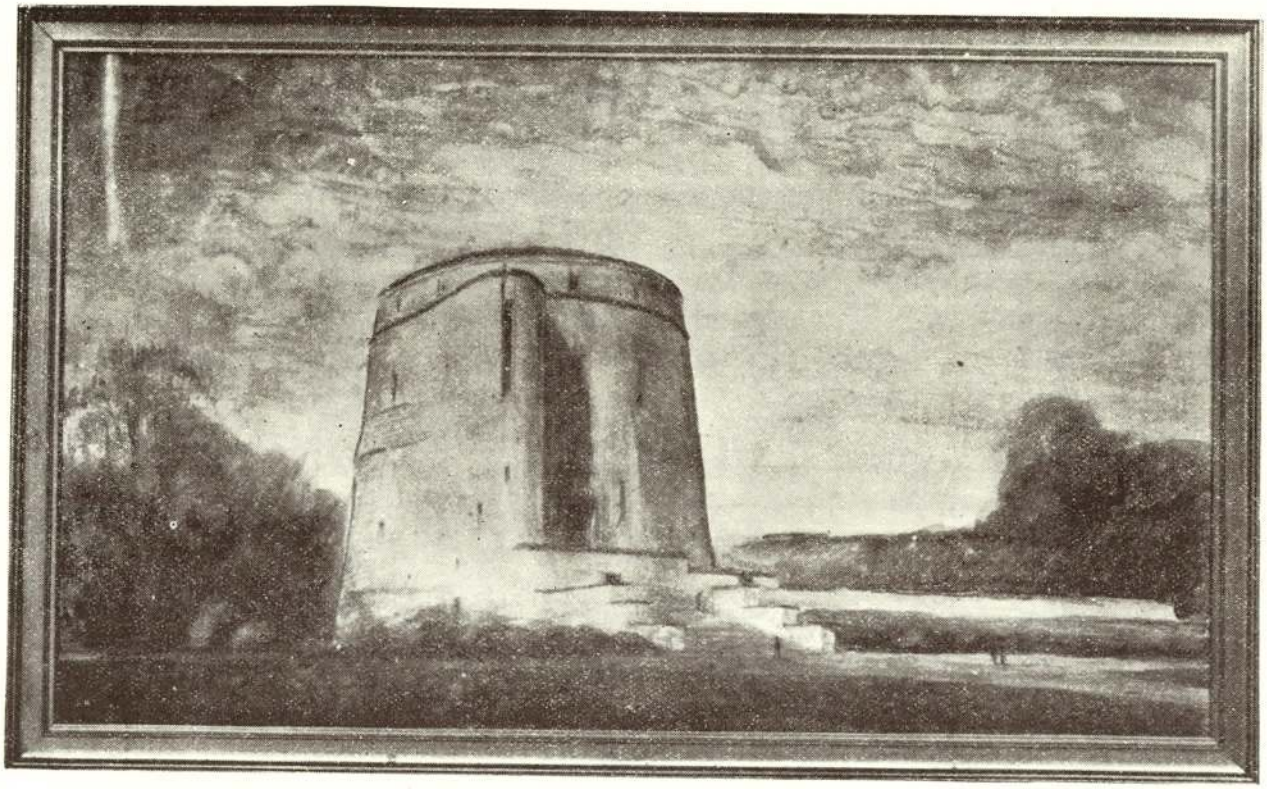
日本にあります奈良朝の遺物遺跡と云ふものは、法隆寺の釋迦像にしても藥師像にしても、それは鳥佛師が造つたと云ふ寺の言ひ傳へがあるのみならず、其背後の銘文を見ると、何々天皇の冥福を祈らん爲に造つたと云ふことが、ちやんと書いてありますので、何時の誰の作であると云ふことが明に判る樣に、又正倉院に於ても今日遺つて居るものに付て見ると先に申しましたやうに、光明皇后の願文があつて、是は先帝の四十九日であるから、大佛殿に納める、どうか先帝陛下が極樂に往生されるやうにと云ふ意味のことが書いて、ちやんと目錄が備つて居ります、例へば一つの屛風にしても、横がなんぼで、縱はなんぼ、どう云ふ模樣で　何の色であると云ふことが細かに書いてありますし、其他火鉢にしても筆にしても皆それ〳〵の由來が明瞭に書いてありますが、是等のものは前に申しましたやうに、日本の國體、日本の國家と云ふものゝ特別なる事情に依て今日まで立派に保存することが出來たのであらうと思ひます、それで今日奈良に於て大佛殿があり、正倉院があり、其他古いお寺が澤山ありますが、それが如何なる意味で建てられたものであるか、又それ等のものが現す文明はどう云ふ風にして傳へられて來たものであらうかと云ふことを研究し、發明する所がなければ、本當に奈良朝に於ける文化の眞髓を理解することは出來ないであらうと思ひます。

要するに奈良朝の文明化と云ふものは從來にない發達を致して洵に驚くべきものがありますが、それは即ち從來日本に無かつたものを外國から取込んで來たのでありまして、段々時代が下りますと、凡ゆるものが和樣になつて來ます、例へば當初は色々な法律を見ても、漢文で書いてありますし、建物としても從來にないやうな大きな建物を造つて居りますし佛樣の顏も日本には無いやうなものになつて居りますがそれ等が段々日本的になつて來ます、佛敎の如きもさうでありますが、さうしてそれが行詰つて停滯して其極腐敗して來ますと、又外國から新しい文明を取入れて來る、即ち鎌倉時代には禪宗の加き佛敎が入つて來まして、風紀の頽廢を濟ふ、

さう云ふ風に外國の文化が入つて來て、清新な空氣を吹込んで呉れますが、それが又時を經るに從て腐敗をして來る、例へば、德川時代に於て漢學が大に興隆して日本の風敎に好影響を與ふるものがありましたが、驕て餘りに漢學かぶれをして、無暗に支那を崇拜し、日本人にして本末を顚倒するやうになりますと、それに啓發をされて、國學が興つて來て、堯舜禹湯文武周公孔子を擧げて、無暗に支那を崇拜するが、日本に於ては日本獨得の國體があり、獨得の文明、獨得の歷史があると云つて、大に國粹を高唱する、そこで又一方醫者の連中は從來人の胃の腑や腸が何處にあつて、どう云ふ風になつて居るかと云ふことも解らずに、人の生命を預つて居たが是では可かぬ、和蘭の醫術は非常に進歩して居て、解剖も非常に精密である、我々もさう云ふものを研究し、人體の構造も明にした上で人の生命を預るやうにしなければならぬと云ふので、先づ醫者が蘭學の研究を始め、西洋文明の空氣に接し、世界の事情を窺ひ、歷史を知り、兵法を學ぶと云ふ風になつて居つた時に、外國の艦がやつて來た、恰も日本でも相當準備が出來て居たから、どん〳〵彼方の文明を取入れて今日の文明を將來するやうになつたのであります、仍ち奈良朝の文明を研究するに付ても讀者の多くの御專門は建築でありますが獨り建築のみならず、凡ゆる文學美術を研究し、綜合的に奈良朝時代の精神はどう云ふものであつたかと云ふことを了解するやうにしたいと思ひます、今日奈良に於ては前申すやうに毎年舞樂と云ふものを見られますし、正倉院に行けば奈良朝時代の外國傳來のものも澤山あつて、我々に取つて限りなき興味を惹き起すのであります。

## 冬空

廣い空一面
灰色の雲は　蒼ざめた
冬な　さまよふ
纖弱な赤子の目の如き蒼空は
寂しい地平近く
うるみがちにのぞいてゐる

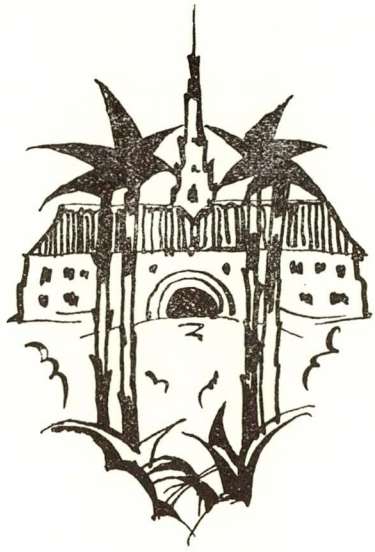


（七）　觀　展　會　柊

——氏吉鋭部谷長　（その一）〔案圖の堂念記災震〕——

# 柊會展觀（七）

## ——〔震災記念堂の圖案〕（その二）長谷部鋭吉氏——



# 住宅問題の相關關係

## ―數字の物語る景氣と不景氣（二）

宇治伊之助

## 第三章　引用統計と改容（二）

### 第三節　景氣統計

凡そ景氣統計は經濟界に於ける諸種の基統計を選出しその合成することによつて作出せらるべきものである。然し乍ら此等各種の統計の諸要素計數は皆夫々其性質を異にして居るから此等の諸要素計數につき各別に相互にその輕重及比率を見出すことは決して容易でない。而かしその要素が多くなればなる程之れが合成は困難となるのみならずために諸種の點に於て却つて往々その實際的効力を殺ぐのおそれなしとせない、さればこゝに於ては次の理由により財界を根本的に支配する有力なる代表的一要素のみを採ることゝした。

思ふに景氣の消長は實に財界の雰圍氣の裡にある。而して其雰圍氣は共同心理社會心理の作用を多分に含有して居る。且つその作用の中心は利念の觀念即ち收益の獲得を通じて資本を形成せむとする意見の表現に外ならない、しかし氏の意思實現と最密接の關係を有して居るものは就中金融關係ではあるまいか、何となれば資金即ち購買力なるものは一に收益からのみ生じ得るからである。詳言すれば資金の供給が增加すれば財界は回復に轉じ資金の供給が減少すれば財界は不況に傾く、此意味に於て資金俱給力は財界を根本的に支配する代表的一要素なりと看做すことが出來る、之れ景氣統計として今暫く此資金供給力バロメーターを採用し之れによる所以である。

即ち假りにかのスタンダード社のビジネスバロメーターを模ねて作成したる資金供給力バロメーターによることゝした

但しフィッシャー教授の述べた如く經濟界に於ては物と金とが常に均衡關係を得んとしつゝあるといふことより見て單に資金供給力のみならずその對象物となるべき生産取引高及在荷高の如き要素をも考慮に入れねば決して完全なものなりといふことは出來ない。

此非難に對しては甘受するより外仕方がない。

而して此バロメーター作成に當りてはその材料を東京及大阪銀行通信錄により其東京及大阪組合銀行の貸出に對する同預金の比率に大阪市中割引日歩の百分比（金利が高くなる事は資金供給力の減少を意味する事であつて從つて百分比例にしなければ資金を貸出で、除した比率と反對の結果を生ずるからである）を加へて之を二分したものを用ひた、即ち次の如し。

第八表　資金供給力

| 年次 | 大阪市中割引平均金利 | 東京及大阪組合銀行 平均預金（千圓） | 東京及大阪組合銀行 平均貸出（千圓） | （A）金利息比 | （B）貸出ニ對スル預金ノ比率 | （AトBトノ平均）資金供給力 | 同三十七年ヲ百トセル指數化 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治三十七年 | 一、六六 | 二三九、一九五 | 二二四、一三九 | 六〇 | 九四 | 七七 | 一〇〇 |
| 明治三十八年 | 一、七八 | 二六一、二七三 | 二四一、四一八 | 五六 | 九九 | 七八 | 一〇一 |
| 明治三十九年 | 一、六四 | 三六〇、五九八 | 三三三、六五九 | 六一 | 一〇八 | 八五 | 一〇六 |
| 明治四十年 | 一、七四 | 三九三、二六六 | 四〇六、六二八 | 五七 | 九七 | 七七 | 一〇〇 |
| 明治四十一年 | 二、一五 | 三五三、一八六 | 四〇五、〇八一 | 四七 | 八七 | 六七 | 八七 |
| 明治四十二年 | 一、三五 | 四一四、四九九 | 四〇三、一一七 | 七四 | 一〇三 | 八九 | 一〇二 |
| 明治四十三年 | 一、〇四 | 四七九、三〇九 | 四五六、六九五 | 九六 | 一〇五 | 一〇一 | 一三一 |
| 明治四十四年 | 一、三三 | 五〇六、八八九 | 五一五、七二〇 | 七六 | 九八 | 八七 | 一一三 |
| 大正元年 | 一、七三 | 五五二、七二七 | 五八八、六五七 | 五八 | 九四 | 七六 | 九九 |
| 大正二年 | 二、〇三 | 五八五、九二三 | 六四九、一〇七 | 五〇 | 九〇 | 七〇 | 九一 |
| 大正三年 | 一、八〇 | 六四九、四七三 | 七五九、八九二 | 五六 | 八五 | 七一 | 九二 |
| 大正四年 | 一、〇一 | 七八二、六六七 | 八二三、八一七 | 九九 | 九五 | 九七 | 一二六 |
| 大正五年 | 一、〇三 | 一、一三三、六八二 | 一、〇七九、二〇七 | 九八 | 一〇四 | 一〇一 | 一三一 |
| 大正六年 | 一、三四 | 一、六五五、七七三 | 一、四九四、二八二 | 七五 | 一一一 | 九三 | 一二一 |
| 大正七年 | 一、四八 | 二、五六四、三六三 | 二、一二六、五九六 | 六八 | 一二二 | 九五 | 一二三 |
| 大正八年 | 一、九二 | 三、一三五、三五五 | 二、八九二、〇六五 | 五三 | 一〇八 | 八〇 | 一〇四 |
| 大正九年 | 二、六四 | 三、二八七、四八一 | 三、五三九、八九七 | 三八 | 九三 | 六六 | 八六 |
| 大正十年 | 二、〇二 | 三、四〇一、九九六 | 三、六三七、六〇九 | 五〇 | 九四 | 七二 | 九四 |
| 大正十一年 | 二、一八 | 三、三七六、七三六 | 三、六五九、七九九 | 四六 | 九二 | 六九 | 九〇 |
| 大正十二年 | 二、三三 | 三、三三九、七八一 | 三、八〇〇、八二七 | 四三 | 八八 | 六六 | 八六 |

前表により財界の好況時代は資金供給力の大なる時期であり不況時代はまたその小なる當時として此資金供給力の變動から大阪市の過去を觀察すれば次の如く所謂景氣不景氣の循環を窺ふことが出來る

第九表　資金供給力より觀たる景氣循環表

| 年次 | 資金供給力 | 平均との偏差(負△) | |
|---|---|---|---|
| 明治三十七年 | 七七 | △四 | 不況 |
| 三十八年 | 七八 | △三 | |
| 三十九年 | 八五 | 四 | 中間景氣 |
| 四十年 | 七七 | △四 | 不況 |
| 四十一年 | 六七 | △一四 | |
| 四十二年 | 八九 | 八 | 回復 |
| 四十三年 | 一〇一 | 二〇 | 好況 |
| 四十四年 | 八七 | 六 | 衰退 |
| 大正元年 | 七六 | △五 | |
| 二年 | 七〇 | △一〇 | 不況 |
| 三年 | 七一 | △一〇 | |
| 四年 | 九七 | 一六 | 回復 |
| 五年 | 一〇一 | 二〇 | 好況 |
| 六年 | 九三 | 一二 | |
| 七年 | 九五 | 一四 | |
| 八年 | 八〇 | △一 | 衰退 |
| 九年 | 六六 | △一五 | |
| 十年 | 七二 | △九 | 不況 |
| 十一年 | 六九 | △一二 | |
| 十二年 | 六六 | △一五 | |
| 平均 | 八一 | | |

以上に於て大略ながら觀察の範圍及方法を考案したのであるから愈々本問題に入り人口家屋及景氣の相關關係に就いて觀察の歩を進めやう。

# 第三章　相關的關係

## 第一節　人口と世帶數との關係

人口と世帶數との間に存する關係を知らむがためには先づ此兩者につきその累年に於ける增減狀態の一般的趨勢を知らねばならぬ。

前章により大阪市の人口及世帶數の累年に於ける增減狀態を推定し得たるを以てこゝに此兩者につき各々その增加實數並に增加率を對比すれば次の如くである。

第十表　人口及世帶數の增減狀態の對比

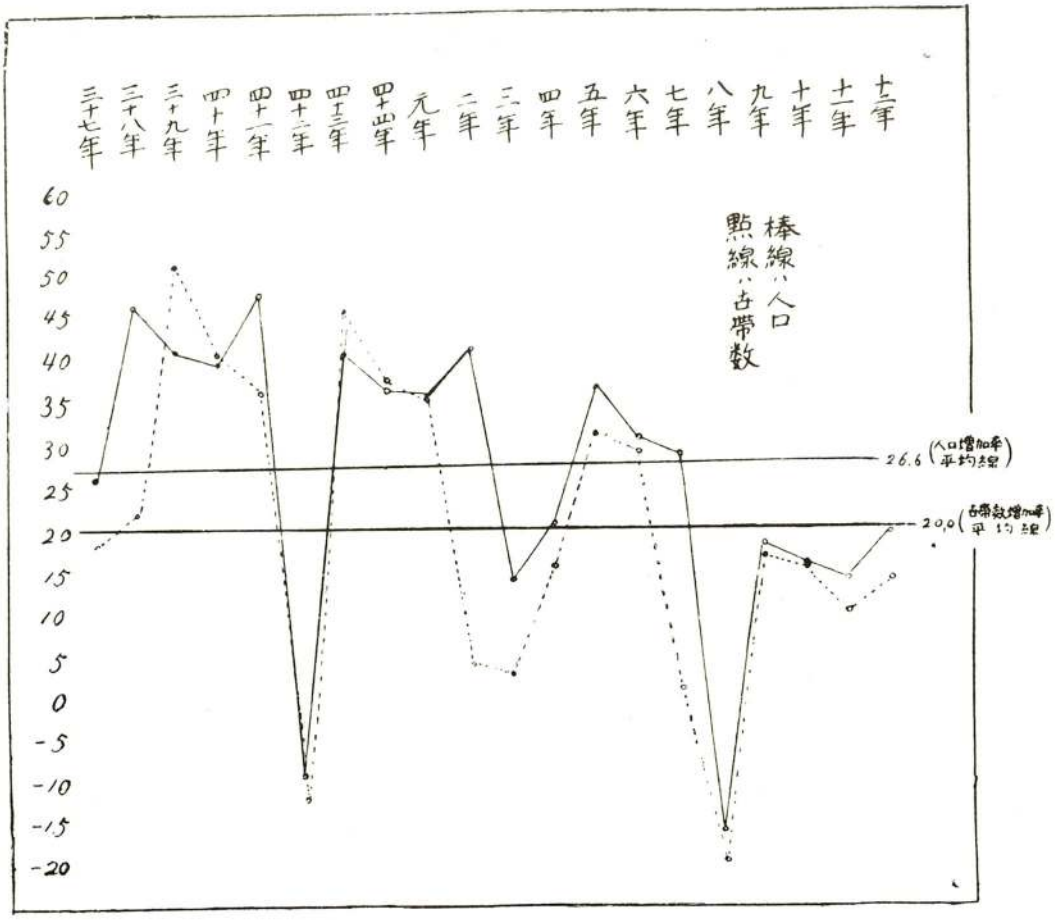
| 年次 | 增加實數 人口 | 增加實數 世帶數 | 增加率 人口 | 增加率 世帶數 | 順位 人口 | 順位 世帶數 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治三十七年 | 二〇、四〇三 | 三、五三五 | 二五、九 | 一八、四 | 一三 | 一〇 |
| 三十八年 | 三八、三二 | 四、五三四 | 四六、四 | 二三、五 | 二 | 九 |
| 三十九年 | 三五、六七七 | 一〇、九七七 | 四一、四 | 五一、六 | 四 | 一 |
| 四十年 | 三五、五二三 | 九、〇一六 | 三九、六 | 四〇、七 | 六 | 三 |
| 四十一年 | 四四、七七〇 | 八、五〇一 | 四七、五 | 三六、九 | 一 | 五 |
| 四十二年 | △九、〇四〇 | △二、九二〇 | △九、七 | △三、八 | 一九 | 一九 |
| 四十三年 | 三九、二三三 | 一〇、八三七 | 四〇、四 | 四五、五 | 五 | 二 |
| 四十四年 | 三六、二一三 | 九、二〇八 | 三五、九 | 三七、二 | 八 | 四 |
| 大正元年 | 三七、三一八 | 九、〇一八 | 三五、六 | 三五、二 | 九 | 六 |
| 二年 | 四五、五四二 | 一一、一八四 | 四一、七 | 四、六 | 三 | 一六 |
| 三年 | 一六、一九二 | 八三三 | 一四、六 | 三、二 | 一七 | 一七 |
| 四年 | 二三、六六〇 | 四、〇九六 | 二〇、一 | 一五、六 | 一三 | 一三 |
| 五年 | 四四、三二六 | 八、九〇六 | 三七、七 | 三二、八 | 七 | 七 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 六年 | 三七、九九〇 | 八、〇七二 | 三一、三 | 二八、九 | 一〇 | 八 |
| 七年 | 三七、三四五 | 二七〇 | 二九、八 | 〇、九 | 一一 | 一八 |
| 八年 | △一九、四八四 | △五、二六六 | △一五、八 | △一九、四 | 二〇 | 二〇 |
| 九年 | 二三、八四五 | 四、九二六 | 一八、二 | 一七、八 | 一五 | 一一 |
| 十年 | 二二、〇五〇 | 四、六七六 | 一六、五 | 一六、六 | 一六 | 一三 |
| 十一年 | 一八、一六七 | 二、八五三 | 一四、二 | 一〇、一 | 一八 | 一五 |
| 十二年 | 二六、二八五 | 四、二四一 | 一九、九 | 一四、七 | 一四 | 一四 |

尙前表の結果を一層明白にするために圖表に示せば即ち次の如くなる、

**第十一表　世帶數對人口の割合（一世帶當人口）**

| 年次 | 人口 | 世帶數 | 一世帶當人口 |
|---|---|---|---|
| 明治三十七年 | 七八七、五七二 | 一九一、二〇一 | 四、一二 |
| 三十八年 | 八二五、八九四 | 二〇一、六八三 | 四、〇九 |
| 三十九年 | 八六一、五七一 | 二一二、六六〇 | 四、〇五 |
| 四十年 | 八九八、〇九三 | 二二一、六七六 | 四、〇四 |
| 四十一年 | 九四一、八六三 | 二三〇、一七七 | 四、〇九 |
| 四十二年 | 九三二、八二三 | 二三七、二五七 | 四、一〇 |
| 四十三年 | 九七二、〇四六 | 二三八、〇九四 | 四、〇八 |
| 四十四年 | 一、〇〇八、二五九 | 二四七、三〇二 | 四、〇八 |
| 大正元年 | 一、〇四五、五七七 | 二五六、三二〇 | 四、〇八 |
| 二年 | 一、〇九一、一一九 | 二五七、五〇四 | 四、二三 |
| 三年 | 一、一〇七、三一一 | 二五八、三二七 | 四、二九 |
| 四年 | 一、一二九、九七一 | 二六二、四三三 | 四、三一 |
| 五年 | 一、一七四、二八七 | 二七一、三三九 | 四、三三 |
| 六年 | 一、二一二、二七七 | 二七九、四一一 | 四、三四 |



| | | | |
|---|---|---|---|
| 七年 | 一、二四九、六三二 | 二七九、六八一 | 四、四七 |
| 八年 | 一、二三〇、一三八 | 二七一、四一五 | 四、五三 |
| 九年 | 一、二五二、九八二 | 二七六、三三一 | 四、五三 |
| 十年 | 一、二七四、〇三三 | 二八一、〇〇七 | 四、五四 |
| 十一年 | 一、二九二、二〇〇 | 二八二、八六〇 | 四、五五 |
| 十二年 | 一、三一八、四八五 | 二八八、一〇一 | 四、五七 |

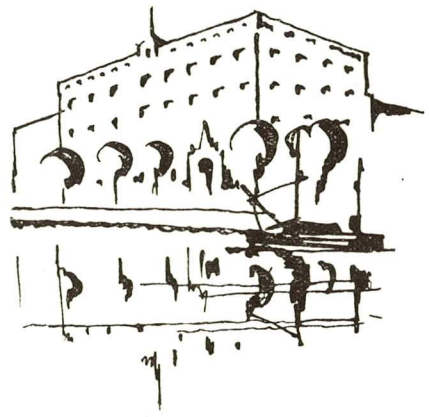
第一圖　人口及世帶數の增減狀態對照圖

右對比表並に對照圖より察すれば人口及世帶數は累年一樣の割合を以て增加し或は減少することなきは明かであつて最近過去二十年中明治年代に於ては八回のうち四回は世帶數增加率が人口增加率よりも上位を占めて居るに反し大正年代に於ては世帶數增加率は常に人口增加率よりも下位にある從つて世帶數對人口の割合即ち一世帶當人口は次表の示せる如く大正に入りて逐寺增加の傾向を現出しつゝあるを知る。

然し乍ら毎年の對比を離れて暫く長年月に涉つてその大勢を通觀すれば大體に於て此兩者の間には常に不即不離の關係を有して居ることを推知するに難くはなからう

山風のふく夜の月に音はして

くもるともなく散る木葉かな



# 明治後期の建築

## ―明治大正に於る建築觀（三）

增山新平

總　説……既　出
明治前期……既　出
明治中期……既　出
明治後期……第三期

内　容

（一）樣式に關する論爭。
（二）鐵骨構造の發達。
（三）明治後期建築の實例。
（四）古建築の研究とその保存。

當期は日清戰捷の後を受けて國政の基礎も强固となり、民間の事業も健實となりたれば各種の施設は年を追ふて計劃せられたり。然して第一期第二期に於ける大建築の多くは外人によりてなされたるが、當期に入りては工科大學出身の技術者もその數五十餘名に達し、その古きものは十數年の經驗を積みたれば、洋式建築に對する知識も進み、彼の國に於る建築の精神も了解せられ、その式樣も研究せられたり。而して好んで建てられたる建築の多くは近世ルネッサンススタイルにして、クラシック式ゴシック式等その中に織り込まれたり特に目立てるものは、辰野博士一派の手により建てられたる赤煉瓦積みに數層の石のバンドを入れたる英國風復古式の建築にて各地到る處の大小の洋式建築は皆この表現を摸せり。

これらの實例を通觀して當代の傾向を察するに、只西洋の樣式を忠實に墨守し少しもこれを誤らざる建築を以て最良のものとせる風あり。而して留學歸朝の技術家の重用視せらるゝありて、一層この傾向著しく、技術は精細となり確實となりて、洋式建築に對して何等の不安なく、危懼を感ぜる程度に達せり。

## （一）樣式に關する論爭

以上のことは三十七八年以前のことにて、日露戰捷後は國民全般の自覺自信も加はり、單なる外國の模倣に飽きたらず我が國民性に立脚して外來の文物を取捨撰擇し、或は折衷を加へ、或はこれが改善を叫ぶ者生じ、又一方には國粹を發揮せんとする運動も起りて、我が建築界に於ても新生面を開拓せんとする希望は識者の間に論議せられたり。その第一聲をなすものは建築雜誌二六五號に於て、伊東博士の發表せられたる『建築進化の原則より見たる我國建築の前途』と題する論文なり。次ざにその大要を示せば、伊東博士の論文梗概。

世界各邦の建築はその發生の當時如何なる材料を用るも後には一齊に進化して石造に歸着するなり、而して石造の大建築に進化せる後の樣式を驗するに、必ず發生當初の精神と意味を傳ふるものにてギリシア建築に於てもエジプト建築に於てもその發生當時の材料構造の痕跡をとゞめ、これと密接なる關係あり、故に國土の起源をはなれて建築の樣式は成立せざること歷史の立證する處なり。故に日本の建築もこれと同じく木造建築が石造に進化する時に於てもこれと同じき經路を進むべきものなれば長年月の後には一種の完美なる形に進化し得べきものなり。故に日本に於ては從來發達せる美しき木造建築が何處までも主調となり、其れを進化せしめて日本將來の形式となす事が理論上正當なりと主張せられ、何處までも日本古來の建築を本位として之を進化せしむることが正道にして歐洲建築の模倣及折衷等の手段は一時的の方便にして究極の目的に非らざることを主張せられたり。

これに對して文學博士大塚保治氏は（帝國文學十五卷第七號四十二年）に於て日本將來の建築は洋式建築を基礎とし和洋趣味の融和によりて完成せらるべきものにして、それに到達するには洋式建築を日本化することを以て順路とし、日本固有の建築樣式の上に新需要新材料を適應せしむるといふごとき迂遠なることは、よしや間道となり得ても本道とはなり得ざるものなり。現今の日本に於ける社會狀態より見て先づ平易なる既成洋式建築を採用し、當面の要求を充しつゝ次第に之を日本化するといふ經路を涉り、長年月の後には和洋を融合せる樣式に統一さるべきものなり。從來の日本建築を基礎としてこれを進化せしむるといふ如きは、古代に於ては順當なる經路ならんも、現代に於ては望まれざる處なりと主張せらる。其後建築學會は四十三年に至りて『我國將來の建築樣式を如何にすべきや』の問題を撰びて討論會を催し、廣く專門家の意見を求めたり、これらの說は多種多岐に別れたれども、その主張を次に異記すれば、

三橋四郎氏は、純日本式にも非らず、純西洋式にも非れざる所謂和洋の長所を採りたる所の、一つの折衷式を產まんとの說を立て、

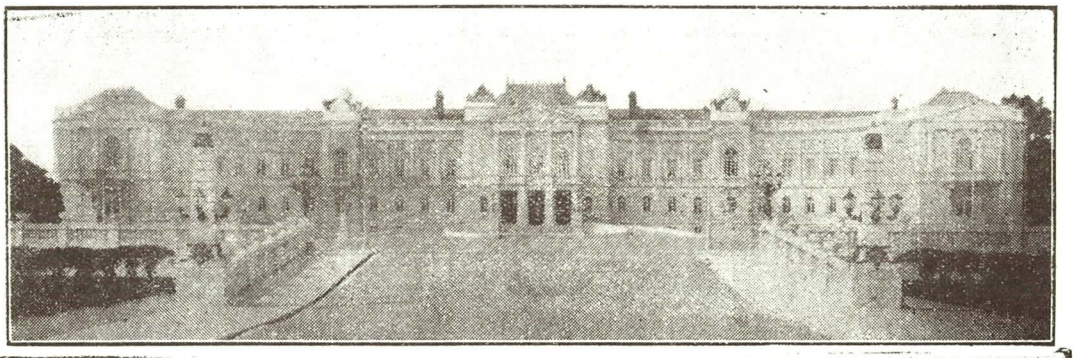
關野博士は、總ての建築を參考して自由に研究し、自由にデザインして從來の日本式にも非らず又從來のどの國の式にも非らざる立派なる國民的樣式を創造すべきことを希望せらる。

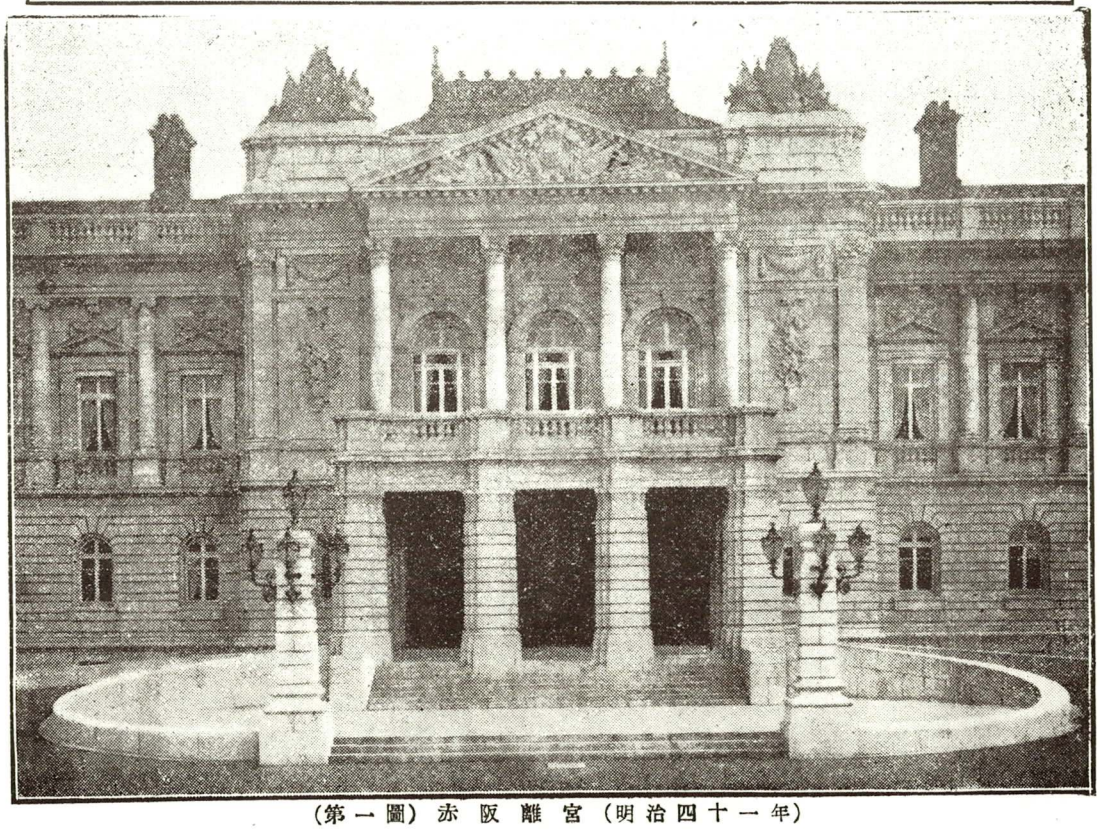
長野博士は、歐洲の今日の建築は段々世界共通となり形の

上に著しいナショナリテクーが失はれつゝある有様なれば日本も歐洲と同一軌道を歩して行く以上、日本固有の著しい形を墨守して行くことは如何か、而してかゝることは今後到底永續せしむること能はざるは必然のことにて只日本人の氣風精神を含蓄する點に於て無形の所に國粹を現はすべきものとの說を立てらる。

佐野博士は、關野氏の說に賛し、日本國民として有すべき建築樣式はシンプクシテーにして、品位を保持し重量と支持との明確なる力學的表現をなす處の形式を得て、その表現を助長し、內容を示すに歷史的又は日常的國民の最も善く識る所のサブジエクトを撰びてオーナメントするにある。その意味に於てセセッション開創の意義精神を學ぶべきであるとの說。

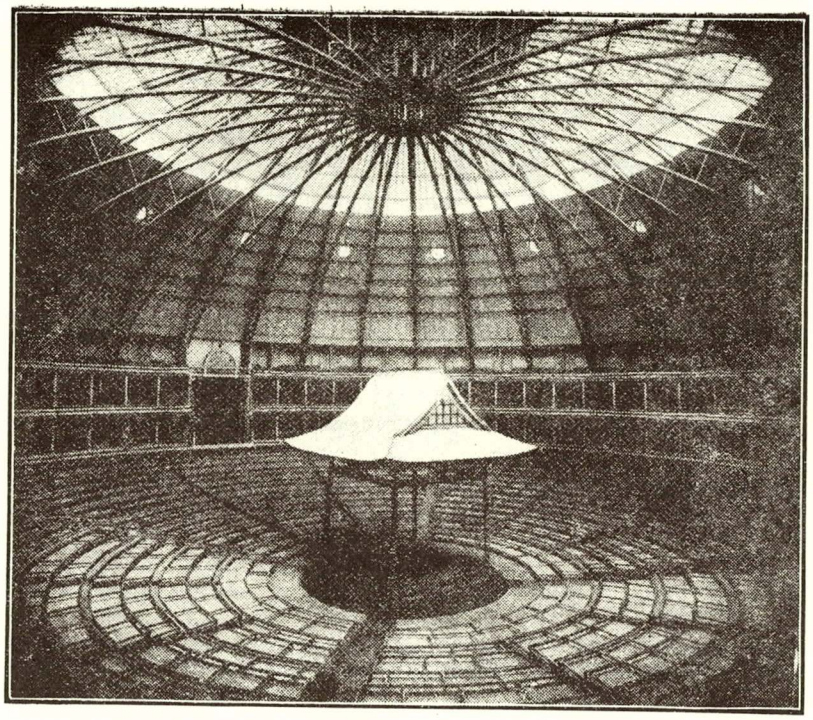
岡田信一郎氏は、諸外國及日本に於る建築の歷史的講究





（第一圖）赤阪離宮（明治四十一年）

を一層盛にし、將來の建築樣式を解決する手段と考へ、如何なる國の式なりとも、我々の趣味思想を土臺として、新らしき樣式に移り行く關野氏の說に贊成せられたり。



（第二圖）兩國々技館內部構造（明治四十二年）

要するにこれらの說を分類すれば、大體に於て左の如く四說となすことを得。

三　橋　四　郎氏　和洋折衷說
伊　東　忠　太氏　進　化　說
關　野　　貞　氏　新樣式創造說
長　野　宇　平　治氏　純洋式直寫說

斯の如き論議は他の發表機關に於ても闘はされ內面的にも外形的にも、研究せられ、覺醒のエポックメードを作りたるものにて、我國の樣式推移の上に重要なる起點をなせども今日よりこれを吟味すれば徹底を缺く嫌なきに非ず、當時にありても進化論は學究の迂遠なる說と考へられ、歐化論は腑甲斐なき軟論とせられ、和洋の折衷論は不徹底極まるものとして斥けられ、創造說は言ふべくして行はれざる空論とせらるゝなど、甲論乙駁歸する處なく討論を終りたれども爾後の方針に資する處多なりき。然れども建築の實地界にありては殆んどこれと無頓着に、益々洋式模倣に熱中し、日本的基礎の上に立つ新樣式も現れず、僅かに木造建築に折衷を試みたるのみにすぎずして明治後期を終れり。

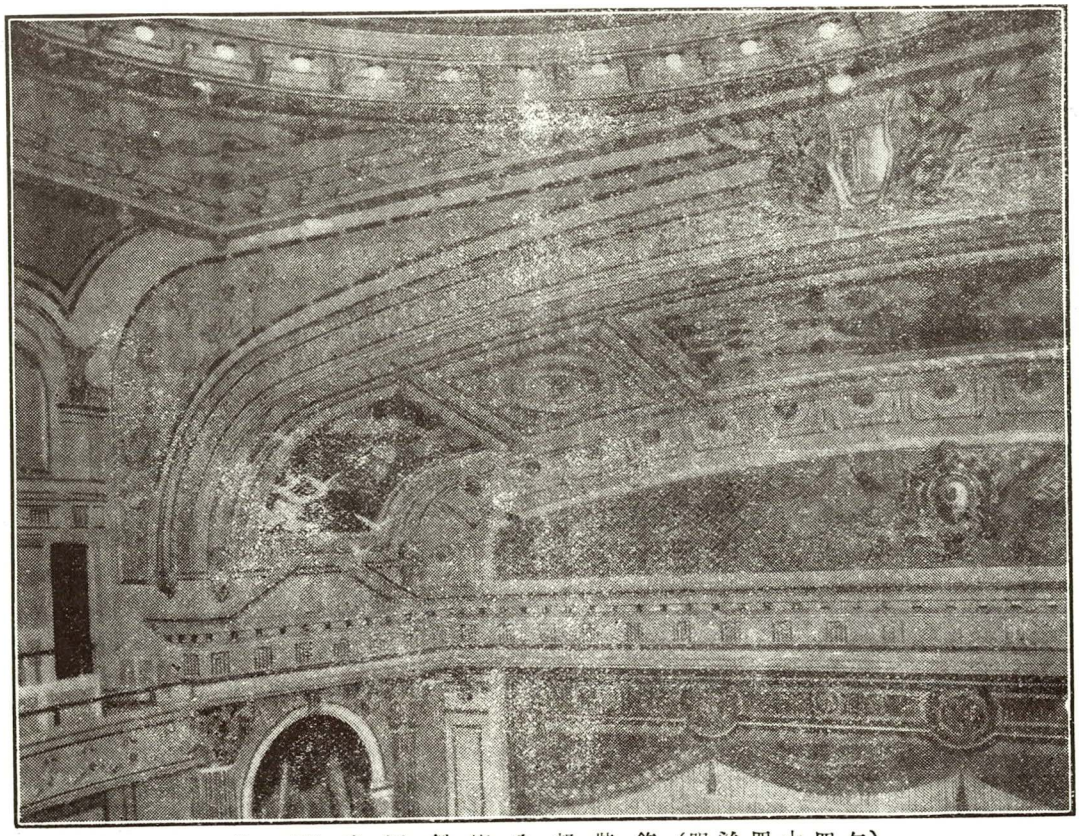
## （二）鐵骨構造の發達

當期の建築は樣式に於てこそ第一期第二期の經續を意味し格段の進步を示さざれども、その構造方面及び材料に於ては異常の進步を遂げたり。即ち第二期の初め米國シカゴに於て試みられたる鐵骨構架の方法は、普く世界の建築技術界を風靡し、當期の初めに於ては我國にも傳へられたり。二十八年早くも秀英舍の建築を鐵骨構造を以て建てたるに始まり、三十二年工科大學は橫川博士に囑して鐵骨構造學を敎授せしめ同三十五年には同氏によりて三井銀行本店の建築を鐵骨構造を以て實現し、今後の大建築の總てはこの方法によりたれば第一期第二期に於ける木骨煉瓦造に比して著しく堅牢となり

構架の方法に於ても自由となりて大建築の出現を容易ならしめたり。四十一年には、辰野博士により兩國々技館の大鐵傘を組まれ、四十三年には、片山東熊氏によりて赤坂離宮の鐵骨石造の完成を見、大正三年落成の東京驛の大鐵骨構架も當期に於て計劃せられたるものなれば、當期を稱して鐵骨煉瓦造時代と稱するを得べし、而して第一第二期期の建築の壁體は煉瓦積みのまゝにて外貌をつくらふことなかりしが、この期に於ては鐵材を使用せるのみならず石材を使用すること多く煉瓦積のものには貼付けタイルを以つて覆ふこと流行し、外觀の體裁に注意し、樣式の正統を重じたる時期なりき。

## (三) 明治後期建築の實例

| | | |
|---|---|---|
| 東京商業會議所 | (東京) | 妻木　賴黃氏 | 三十二年 |
| 日本勸業銀行本店 | (東京) | 武田　五一氏 | 三十二年 |
| 大阪株式取引所 | (大阪) | 田中　豐輔氏 | 三十二年 |
| 兵庫縣廳 | (神戸) | 山口　半六氏 | 三十五年 |
| △三井銀行本店 | (東京) | 橫川　民輔氏 | 三十五年 |
| △第一銀行本店 | (東京) | 新家　孝正氏 | 三十五年 |
| 日本銀行本店 | (大阪) | 長野宇平治氏 | 三十六年 |
| △橫濱正金銀行本店 | (橫濱) | 妻木　賴黃氏 | 三十七年 |
| 大阪圖書館 | (大阪) | 野口　孫市氏 | 三十七年 |
| 神戸地方裁判所 | (神戸) | 河合　浩藏氏 | 三十七年 |
| 帝國圖書館 | (東京) | 久留　正道氏 | 三十八年 |
| 京都府廳舍 | (京都) | 久留　正道氏 | 三十八年 |



(第三圖) 帝國劇場內部裝飾 (明治四十四年)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 大阪瓦斯株式會社 | （大阪） | 田邊　淳吉氏 | 三十八年 |
| 名古屋日本銀行支店 | （名古屋） | 辰野　謹吾氏 | 三十九年 |
| 關東都督府高等法院 | （大連） | 前田　松韻氏 | 四　十年 |
| 大連民政廳舍 | （大連） | 前田　松韻氏 | 四十一年 |
| 赤坂離宮（東宮御所） | （東京） | 片山　東熊氏 | 四十一年 |
| 日比谷圖書館 | （東京） | 三橋　四郎氏 | 四十一年 |
| ◁專賣局廳舍 | （東京） | 大藏　雀一氏 | 四十二年 |
| 神戶市廳舍 | （神戶） | 秋吉　全德氏 | 四十二年 |
| 表　慶　館 | （東京） | 新家　孝正氏 | 四十二年 |
| 兩國國技館 | （東京） | 辰野　謹吾氏 | 四十二年 |
| △海軍參考館 | （東京） | 吉井　茂則氏 | 四十二年 |
| △遞信省本館 | （大阪） | 村井　三吾氏 | 四十二年 |
| 大阪稅務監督局 | （奈良） | 妻木氏岡野氏 | 四十二年 |
| 奈良ホテル | （東京） | 吉井　茂則氏<br>內田　四郎氏 | 四十三年 |
| △京橋電話交換局 | （東京） | 佐野　利器氏 | 四十三年 |
| △丸善株式會社 | （東京） | 橫川　民輔氏 | 四十四年 |
| 帝國劇場 | （東京） | 福　岡　氏 | 四十四年 |
| △警　視　廳 | （千葉） | 矢橋　賢吉氏 | 四十四年 |
| 千葉縣廳 | （東京） | 辰野　謹吾氏 | 四十五年 |
| △兩國國技館（再築） | | | |

△印の建築は大正十二年九月の震火災に破壞燒失せり。

東京商業業會議所は妻木賴黃氏の設計に成り、獨逸復興式の三階建煉瓦造にして、堅實にして整頓せる建築なり（三十二年落成）日本勸業銀行本店、武田吾一氏の設計になり木造三階建にして、和風を主調とし洋式を取入れたる折衷式公館なり。明治初期の鵺的建築と異り、外觀に於ても、設備に於ても、調和に成功せるものと云ふべし。三十二年竣工

三井銀行本店、復古式三階建の大建築にて、橫川民輔氏の設計に成り鐵骨煉瓦造にて外裝に貼付タイルを使用せることは始めての試みにて、その樣式も英國風ルヂッサンスの正統を傳へたる無難の作なりしが、震火災のため破損甚だしく改築の計劃中なり。

表慶館は新家孝正氏の設計にして、石材を以つて外裝し極めて忠實に復古式の型を踏める煉瓦造にして、小屋組に鐵材を使用せる建築なり。

赤坂離宮は片山東熊氏の設計に成り、鐵骨煉瓦を花岡石を以つて外裝する三層の大建築にして、その樣式は佛國ルネッサンス式を以つてし、エルサイユ宮殿の直寫と云はるゝ程なれば、殆んど作者の個性も國民的精神も表徵せざる模倣的建築にて獨創の分子少き事は遺憾なることなり。

奈良ホテルは四十二年の建建にて、和洋折衷の木造建築なり先きの勸業銀行本店と行方を同じくすれども十年後の建築なれば一段の進境を示せり。

帝國劇場は橫川民輔氏の設計に成り、佛國復興式に則れる近世劇建築にて、その內外の裝飾絢爛を極め多少意匠の題材を日本に求めたる處あれども、全體としては純然たる泰西現代の建築に比して損色なきものにて、模倣の技術もこゝに於て完成せられたるものといふべく震災後の改造は外貌の整理せられたる點なきにあらざれども、その內部は震災前の豐麗を失ふ。

## （四）古建築研究とその保存

明治元年神佛判然の令を下し、神社佛寺の分離を斷行し神社に於る別頭寺及び佛教的堂塔、本地佛としての佛像、經卷の類を委く社域外に移して神祇の純一を圖れり。又一方寺院の所領と、御朱印を奪ひたれば寺院は經濟的にも、權勢に於ても、昔日の如くならず、新興せらる伽藍も少く、遺存の堂塔も全く荒廢に委するのみなりしが、明治中期の終りより着手せる古建築の研究は大いに進み、伊東博士、塚本博士、關野博士、武田博士、天沼博士、大熊博士、等の大家輩出し、從來輕視せられたる古建築の眞價を闡明して史學的基礎を確立しければ、一般社會にも古粹保存の主張も興り、明治三十年には特別保護建築物の規則を定め、危く廢滅の運命にありし古建築も、政府により保護を加へ修理を施すことゝなる修理に際しては、小屋組の如き外部に表はれざる所は堅牢を主とするため、鐵材及洋式を用ひたる所あれども、その外部に見ゆる總ては出來得る限り舊材料を用ひ、舊樣式舊手法を維持して、舊觀を損せざる樣注意せり。而して明治以前の修繕に於て無理解甚だしき修補は徹去して創建當時のものに復原せしめたるものもあり、三十一年には新藥師寺本堂、法起寺五重塔、中尊寺金色堂　大報恩寺本堂、淨水本堂の修理始められ、三十二年には日光の大修繕開始せられ、その後大佛殿、法隆寺等、年々數個の社寺を繕ひ、又數十棟の特別保護建造物を指定して今日に至れり、大正の今日に於てはその數一千二百有餘の數に登る。維新以後は建築の本流が公共建築に移りたるを以つて、社寺の建築さるゝもの丶數は極めて少く、當期建築の主なるものをあぐれば次の如し。

| | | |
|---|---|---|
| 豐國神社 | （京都） | 伊東　忠太氏 |
| 武德殿 | （京都） | 寺尾　瀧藏氏 |
| 東本願寺祖師堂 | （京都） | 伊藤平左衞門氏 |
| 同　阿彌陀堂 | （京都） | 木子　棟齊氏 |
| 同　勅使門 | （京都） | 龜岡　末吉氏 |
| 靖國神社々殿 | （東京） | 木子　清敬氏 |
| 築地本願寺別院 | （東京） | 伊藤平左衞門氏 |
| 臺灣神社 | （臺北） | |
| 藤島神社 | （越前） | 安藤　時藏氏 |
| 佛光寺阿彌陀堂 | （京都） | 市田重郎兵衞氏 |
| 南禪寺本堂 | （京都） | 寺尾　瀧藏氏 |
| 增上寺本堂 | （京都） | |
| 大鳥神社 | （攝津） | 安藤　時藏氏 |
| 總持寺 | （神奈川） | 伊藤平左衞門氏 |
| 出石神社 | | 龜岡　末吉氏 |

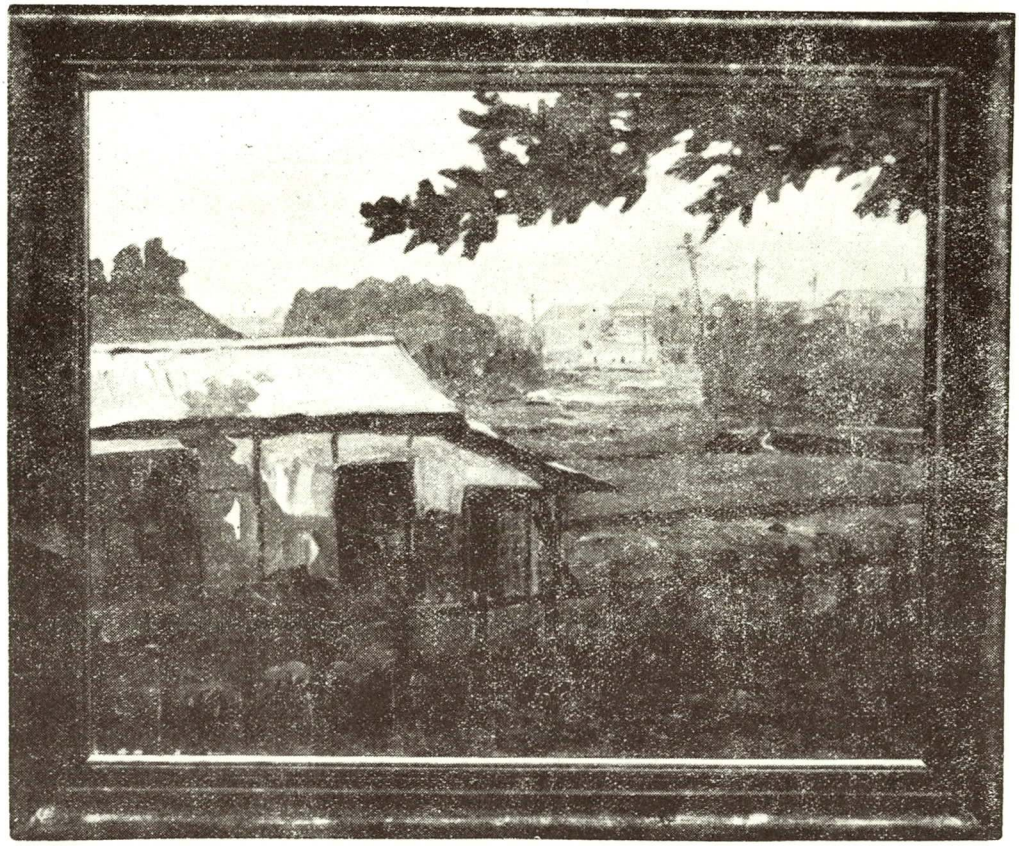
| | |
|---|---|
| 三十一年 | |
| 三十二年 | |
| | |
| | |
| 四　十年 | |
| 三十四年 | |
| 三十四年 | |
| 三十四年 | |
| 三十四年 | |
| 三十四年 | |
| 四十一年起工 | |
| 四十三年 | |
| 四十一年起工 | |
| 大正年間完成 | |

以上の建築は古建築研究の結果として明治時代の精神を手法上に現はすものなきにあらざれども、伊東平左衞門氏の設計の如きは江戸末期の傳統を繰返すにすぎず何等の新味を有せざる建築なり。安藤氏及び龜岡氏の建築は鎌倉、室町、桃山時代の溫蓄を消化して清新の氣分を示し、明治時代の作風として一家をなせり。



(〇二)　觀　展　會　柊

——氏郎三得村木　〔顏　寢〕——



（四二）　觀　展　會　袷

——「秋晴」　川村種三郎氏——

# 建材科學片

細木松之助

## （一）鉛白製造の化變

前回白ペンキの材料なる鉛白に就いて、卑見を概述せしが尙ほ場さゝる處あり

雜製法中の其三なるローリー又はマイルド法を除く諸他の製法は孰れも皆金屬鉛と醋酸と水、炭酸及び空氣の間に於ける化學作用による物であつて、最終の製品は何れの場合に於いても皆水酸化炭酸鉛(Hyroxy=carbonate of lead)である事は同樣である然るに西曆一千七百七十四年以前に在ては鉛白は酸化鉛と酢との化合物であると考へられて居つたので同年にベルヒマン（千七百五十五年より一千七百八十四年）が鉛白を化學的に研究して其成分を決定したる結果として、之れをLuftsaurer-Blei-Kalx—即ち今日の化學語に直せば炭酸と酸化鉛と云ふのである

から取も直さず炭酸鉛であるのです。

其次の肝要なる研究はホーホステッター（一千八百二十九年より一千八百八十四年）及びリービッヒ（一千八百〇三年より一千八百七十四年）の兩氏が堆積法による鉛白製造の化學變化を研究して其間に起る作用を說明すべき化學方程式を左の如き者となせり。

(1) $2Pb+2H_2O+O_2=2Pb(OH)_2$

(2) $Pb(OH)_2+2CH_3COOH=Pb(CH_3COO)^2+2H_2O$

(3) $Pb(CH_3COO)_2+2Pb(OH)_2=Pb(CH_3COO)_2 2Pb(OH)_2$

(4) $3[Pb(CH_3COO)_2 2Pb(OH)_2]+4CO_2=2[2PbCO_3 Pb(OH)_2]+3Pb(CH_3COO)_2+4H_2O$

右の方程式によれば醋酸鉛は獨媒として働く物で又鉛白は炭酸鉛二分子と水酸化鉛一分子との化合物であるとせられて居るので其後に至るも此公式を正確なる者と認められて居つたのである又獨媒としては醋酸が普通の商品で且安價なる物であるから最も多く用ひられて居るが又此外に酪酸ヴレリアン酸及びプロピオン酸等も用ひらるゝ特許の方法がある位である。

右に述ぶる如く鉛白は炭酸鉛と水酸化鉛との化合物であるとの說はリービッヒとホーホステッターが始めて唱道したる物であるが其後近年の化學者にして鉛白は炭酸鉛と水酸化鉛との機械的混合物であるとの說を主張する者もあるのは奇と云はざるを得ぬが最近代の化學者の大多數は之に反對である。然れ共鉛白中の水酸化鉛分がペイントとして延びる性質を生じ、炭酸鉛分が不透明質を附與する者で

るあとの說を持する者尠くないのであつて鉛白の眞價は此等の二成分の平均數によりて決定せらるゝのであると云ふ者あれ共元より正當ではないが英國の建築師協會の學術委員（Science-Standing-Committee of the Royal Institute of British Architects）の報告文中にさへ左の如き文句があるのは奇なりと云ふべしである。

『鉛白は炭酸鉛と水酸化鉛との混合物であつて常に多少の化合水を含有す』

然るに鉛白製造の諸法はマイルド法を除きたる以外の物は其原則皆同一であるから製造中に起る變化の第一步の說明を得る爲に先づ鹽基性醋酸鉛に於ける炭酸の作用を攻究する必要があるのです然るに鹽基性醋酸鉛の分解するのは決して上記の方程式にて示したる如き分解でなくして且又第一に出來る生成物は上記方程式に示したる者よりも炭酸を含有する量の少なき水酸化炭酸鉛であつて此下級炭酸鉛は其後に炭酸を取り之と結合して炭酸の含有量を增す者である。

又トンプソン氏の說に從へば最初沈澱して生ずる物は鹽基性炭酸鹽と鹽基性醋酸鉛の幾分の混合物であると云へ共其實鉛白は水酸化炭酸鉛の成分不確實なる者である其證據には堆積より取れる試品に就きて其成分を檢するに內部と外部との成分一樣ならずして外部の物は內部に於ける物よりも炭酸を含有する量が多いのであつて外部に在る物は最初に出來たる物であるから炭酸を吸收して之と化合する事內部にある後に出來たる者よりも餘計に進みたる物である又或場合には試品の孰れの部分も皆上記の $2PbCO_3Pb(OH)_2$ なる式に適合する丈の炭酸を含有せざる事があるので即ち炭酸化が尙不足して居るのである。

**鉛白の分析**　鉛白の分析法として一定したる標準分析法が採用せられて居らぬ爲に其品質を決定すべき分析法が區々であるから其成績に於ても多少の差異を生ずる事ありて爭議の種となる事もあるのである假令ば鉛白の一成分なる炭酸の量の如きは同一試品に就ても分析法又は分析者の異なるによりて其量に一又は二ペルセントの差を生ずる事があるのである故に標準分析法を一定して斯る爭論の種を絕つ事は好ましい事と考ふるのである。

然るに油を以て處理せざる鉛白に對しては普通の注意を怠らざる限り其分析に困難はないのであるが油を混じ、碾磨したる鉛白は其分析困難であつて其由は主として左の二である。

第一　分析法の異なる爲に起る誤差

第二　油の爲又は其中に含有せらるゝ物の爲に鉛白が作用せらるゝ事

鉛白を分析するには其成分なる酸化鉛と炭酸と水との三成分を定量するのであるが若し鉛白が純粹であれば其內の酸化鉛は容易に且正確に定量し得る物である。即ち其法は一瓦半の試品を取り之を磁製の坩堝內にて熱して其重量が一定不變に至らしむるのである斯くて出來たる酸化鉛が一部融熔するまで熱するも鉛丹を生ずる患はないのである。

炭酸や水分の定量に障害を爲す物は例の油であつて之を試品中より溶劑を以て完全に除去する事は不可能であるからである、即ち其油の一部分はエーテル又はアセトンの如き溶劑を以て容易に抽出除却し得るのであるが一定度を越ゆる時は其以上之を除去する事は幾回溶劑抽出を繰返すとも更に其効を見ないのである。而して尙殘れる油は極めて少量にして恐くは、三ペルセントを超へざるべしと雖ども此少量の油の爲に分析の結果に不正確

を生ずる着である。

扨炭酸を直接に定量するには約三瓦の試品を少しく過剰の稀硝酸を以て分解し依て發生する炭酸をウエッツエル氏の加里球に吸收せしめて其重量の增加に依て知るのである。

**鉛白粒子の大小**　鉛白の分子は全部同一大の者でなくて大小各異の物が混合して居るのである。而して此粒子の大小混合して居る事が鉛白の貴重なる性質の原因をなして居る者とせられて居る故に鉛の可溶性鹽の溶液にアルカリの炭酸鹽を加へて沈澱せしめて得たる鉛白は其品質劣等なので斯くして出來たる粒子の大さに不同なき爲であるとせられて居る而して優良なる製品を得る方法は皆最初に水酸化炭酸鉛を造り之を炭酸氣中に置きて炭酸化せしむるのである。

トンプソン氏は水簸器を以て鉛白を淘汰し其粒子の大小を區分して之を數等に分ち左の成績を得たり(Proc. Amer. Soc. Test. Mater. 1910.10.1 參照)

| | | |
|---|---|---|
| コーン一の分 | 三、四二ペルセント | 四より小なる物七四、四八　〃 |
| 同　二　〃 | 六、四一　〃 | |
| 同　三　〃 | 六、六一　〃 | |
| 同　四　〃 | 八、七〇　〃 | |

近年說をなす者あり曰くペイントの堅牢なる事も鐵筋コンクリートの堅牢なる事と同樣であつて其分子が大小各異の物の相混合せるが爲に增進するのであつてペイントの製造に際してボイル油に混和すべき鉛白の粒子が大小各種混合して居る事は誠に肝要な事である然れ共之を以て鐵筋コンクリートと同一視するは稍誇大に失するの恐がある。

**鉛白のエージング**　亞麻仁油と鉛白を混和して貯藏して置けば其間に化學作用即ち所謂鹼化を起して其品質を良好ならしむる者であると稱し又之に反對する論者もあれ共兎に角古き鉛白の優良なる事は油中の脂肪酸と鉛との化合物を注ずるからであるとする者が多いのである。然るにハンネイ氏は之に反對して去る化合物を檢出する事能はずと稱し且亞麻仁油と鉛白との混和物なるペイント中より亞麻仁油を悉く抽出し得たりと云へり然れ共其後の研究によれば悉く亞麻仁油を抽出する事は不可能であるのみならず抽出したる油は必ず幾分の鉛を含有せりと云へり元より兩者間に於ける化學作用は極めて僅少なりと雖ども之によりて左の說明を得べし。

(イ)飽和せる脂肪酸即ちステアリン酸の如き物の鉛鹽を生ず

(ロ)不飽和脂肪酸の鉛鹽を生じたる物は更に酸化して前者と共に普通の溶劑に不溶解の者である

右の如く抽出したる油中にある鉛分は不飽和脂肪酸と鉛の化合によりて可溶性の鹽を生じたる者であつて此金屬有機性鹽の存在が少量ではあれ共ペイントの性質を良好ならしむるに與つて力ある者なるべし。

又久しく貯藏して品質を良好ならしむる原因として更に物理的變化を擧ぐべき者があるのは貯藏中に上部の者が底部の者を壓する壓力の爲に起る物理的變化であつて之れが其品質に良好なる影響を及ぼすのである。

又鉛白を油と混じてエージングしたる物の分析成績は其分析者の異なるに依て一致を欠くのであるが今一例を擧げんに出來得る限り油分を除去したる試品を分析して

| | |
|---|---|
| 酸化鉛 | 八六、〇六% |
| 炭　酸 | 一一、二七% |

$PbO:CO_2$の比七、六四の者を取り之を廣

口瓶に入れ其口を密閉して三週間置きたる後に更に油分を抽出し尚油の酸化によりて出來たる皮を去り（此皮はアセトン、醋酸エチル、クロ、ロフォルム、ベンジン及びザイリン等の溶劑に不溶解の物）たる物を分析したるに

酸化鉛　八五、七六%
炭酸　一一、八九%

$PbO:CO_2$ の比 七、二一

にして瓶内に在る間に變化して酸化鉛の量、〇、三ペルセントを減じ炭酸の量は之に反して〇、六ペルセントを增したり然れ共更に之を二ケ月間置きたるも是以上の變化を生せざりしを以て見れば變化の極限が比較的急速に到達する物なるべく又油と混じたる鉛白の分析によりて其油と混和する前の鉛白の成分を明示する事は出來ない物であると同時に又異りたる分析者の分析成績を偶然其供試品が同一程度に變化して居つた場合若くば既に變化を終りたる物に就ての時のみに限りて符合する物である事を知るべきである。

**鉛白の毒性**　鉛及び其化合物が人體に有毒なる事は非常に昔から知られて居つた事で西曆紀元前四百六十年頃の人なるヒッポクラテスは既に鉛毒の事を記述して居るし又同紀元前百年頃の人なるヴイトルヴイウスは鉛管を通つて來た水の有毒なる事を認めて居つた又紀元後百年頃の人なるデイオスコリデスも鉛毒の事を述べて居るし又有名なるプリニーは曾に其時代に鉛毒が一般に知られて居つたのみならず鉛及び水銀より製品を造るに從事する者は其有毒なる粉末を吸入するを避けんが爲に其面を覆ふて仕事をなせし事を記して居るラフハエルやコルレジオやミケルアンジエロの如き大家も鉛毒に苦しみたりと稱せられラマッチニは一千七百十三年に詳細に書家が鉛の製品に接觸する爲に其毒に感じたる事を述べて居る英國に於て始めて鉛毒の事を論じた者は恐くはサー、フイリバート、ヴエルナッチ氏であつて氏は鉛白製造の關係なる題下に當時ヴエニスに於て行はれたる鉛白製造法を記述して鉛の中毒の徵候を下の樣に述べて居る

鉛白製造に從事する者の中毒の最初の徵候は胃の疼痛であつて腸の捻廻を起こし便は秘結して泄瀉せず又灌腸も効なく時に發熱して喘息や息切れを起し又次には眩暈を起し失明、痴鈍、半身不隨、食慾減退、嘔吐に膽汁や粘液を混じて出し體力を衰へしむるのであつて此等は主として粉碎及び乾燥に從事する者に起るのである。

然れ共英國政府が其當然の職責として研究を始めたのは一千八百九十一年であつた其後引續き監督奬勵を怠らず當業者をして製造工場の設備改良及び紛塵除去裝置等に漠大の費用を投せしめ現業員の衞生狀態を改良したのである今其保健に要する主なる點を左に揭ぐ

（一）鉛の化合物に接する事が危險である事を一般從業員をして充分承知する樣に彼等を敎育する事

（二）上衣及び適當なる洗滌設備、浴場レスピラトル等を備へ尚醫師の監督と充分なる營養物を供給する事

（三）從業員を選定するに當り自然的素因を有する者並にアルコール中毒の傾ある者を避ける事

（四）粉塵を生ずる事を極度に避け且鉛の製品を人間が直接取扱ふ事を避ける事

尚少しく之を詳述すれば從業員の敎育法としては鉛の凡ての化合物が有毒である事又此等の有毒物が如何にして人間の體內に侵入するか如何なる徵候を現はすか

如何なる豫防の注意が必要であるか等の事を最も平易に最も通俗的に記述したる物を印刷して彼等に配付し其知識を進むる事である。

食事の前には必ず手を洗ひ可成毎日入浴して上衣も屢々洗濯し醫師をして屢々健康診察を行はしめ又營養物としてはコヽア及び牛乳を供給して就業前と食事の時に之を取らしめるのである牛乳は從來の經驗上頗る有効な物であり又普通の醫藥なる舍利鹽カストル油、及び硫黄錠劑等を備へ置くべく英國の工場にては硫化ナトリウムの錠劑を使用する所もあるが之は體内に在る鉛の鹽類を硫化鉛に變化せしむるから有効なので此硫化鉛は胃液に不溶解であるから無害となるのである又伊太利の鉛白製造所にては其從業員の鉛毒に中る者が極めて稀であるより之を調査するに同國の勞働者は麥酒を飲む者少なく粗食にして多く野菜を食し中にも蒜を好んで食するから蒜の含有する黄硫分が有効に働くものなるべしと思はれるのである。

又近年クラグ氏の發明したる鉛毒の電氣療法は廣く世の注意を惹いて居るが之は電氣を以て體内に在る鉛分を排除する法であつてオリヴアー氏が英國醫學雜誌ランセットに記す所によれば氏が實驗したる法は患者の手足を食鹽水の浴槽中に入れて患者の體と水とに電流を通すのである斯くて患者の體に接する電極には體内より出たる鉛が附着するのを見ると云へり、此法は病者に有効なるのみならず未だ發病せざるも既に鉛分が體内に侵入せる者よりも此鉛分を取出す事が出來るのであるから發病に先ちて豫防になるのである。

以上記す所は鉛白製造の從業員のみならず其製品を取扱ふ者即ちペイント塗工にも適用すべきものである。

## (二)鐵其他金屬の蝕腐

鐵材の腐蝕は建築や機械に關する技術者を惱ましたる最も古き問題の一であるに拘らず眞面目に其因て來る所を研究して之れが防止策を講ずる事は近く第十九世紀より始まつた事であるが、輓近鋼材其他の板金や、新しき合金類が土木や建築に使用せらるゝ事が激增し、就中從來は大抵木材を以て造り來りし橋梁、船體、屋根組、電柱、貯藏槽等は殆んど全部鋼若くは鐵を以て之を造るに至りたるが爲に益々此研究が必要になつて來たのである。而して此等金屬の腐蝕は殆んど全部電氣作用によりて起るのであつて、其電流の起る原因は幾個もあるが、第一に金屬若くは合金の二個以上の成分より構成せらるゝローカルカップルにより起りて第二には二個の異りたる金屬又は合金の直接若くは間接の接觸によりて生ずるカップル假令ば鐵筋コンクリートの建築に銅板製の看板を掲げたる場合の如し第三には近傍を通過する電流の漏洩より起るもの及び第四には故意に電流を使用する場合である。

建築に使用せられたる金屬材料は空氣（雨露をも含む）の作用を受くる者が多いから此空氣の作用に關する事より述べますが鐵に少量の銅を加へると其材料は空氣の侵害に抵抗する事が非常に强くなるのであつて假令ば三十二ヶ月間空氣に暴露した試驗の成績によれば〇、〇一ペルセント銅を含有する鐵は其面積一平方呎に付三十三オンスの重量を失ひ〇、〇一八ペルセントを含有する者は二十三オンスを失ひ〇、二ペルセントを含む物は六オンスを減じたるに過ぎないのであつて此試驗に際して見出したる事實は數ヶ月

間暴露すれば其板面に堅く附着せる膜を生ずるのであつて此膜は針金のブラシにても容易に除去せられぬ程堅く附着して居るのである又此膜の厚みを測る爲に先其重量を秤り置き之をブラシにて掻き落し次に枸櫞酸アンモニア液を以て悉く取り去り再び其重量を秤りて其減量を見たるに其一平方呎が八ケ月に二、三乃至二四オンスであつて三十二ケ月間に生じたる膜は其一平方呎が二、八乃至二、九オンスであつた故に其厚さは約〇、一二乃至〇、一五ミリなるを知つたのである。故に鋼鐵に銅を加へて其腐蝕を防止する作用は二種あるのであつて第一は鐵中にある硫黄の有害作用を銅の爲に緩和する事と第二は板面に生じたる膜の爲に大氣の侵害作用を防止するのである。

此事實を證明すべき實例を求むるに三十年以上大氣の侵蝕に抵抗したる鐵材の内にて〇、一若くば其以上の銅を含有したる者は何等異狀を呈せざるに銅を含有せざる物若くば只其痕跡を含有する物は著しく腐蝕したのである。

又含銅鋼が燃燒成生物の侵害に對する抵抗に就ての一説には一ペルセントの銅を含める鋼は〇、〇六ペルセントを含める物より三倍強しとあれ共又他の一説には純粹なる鐵は銅を含める物よりも煙道内にて八倍久しく持續したと云つてある。

次に含銅鋼が水中及び電解質中にての侵蝕を受くる事を試驗する爲に左の三種の鐵板より切取りたる試品を用ひたり。

| 板番號 | 炭素 | 滿俺 | 硫黄 | 燐 | 銅 | 砒素 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| K | 〇、〇四 | 〇、二九 | 〇、〇三八 | 〇、〇七〇 | 〇、一〇 | 〇、〇一五 |
| C | 〇、〇一一 | 〇、〇三二 | 〇、〇三九 | 〇、〇五五 | 〇、一五一 | 〇、一〇三 |
| A | 〇、〇一一 | 〇、〇一五 | 〇、〇三八 | 〇、〇〇六 | 〇、〇三八 | 〇、〇一三 |

此等の試品を重クローム酸加里、硫酸礬土、鹽化アルミナ、冷搨酸及び稀硝酸に浸漬したるにKとCとはAより速かに侵害せられたり然るに之に反して硫酸及び硝酸中にてはKとGとはAよりも良成績を示したり。

又別の試驗に據れば即ち〇、七ペルセントの硫酸二ペルセントの第一硫酸鐵及び〇、一五ペルセントの第二硫酸鐵の溶液を用ひ其液中へ空氣を吹込みて常に之を循環せしめて六十日間經過したる成績によれば市販の純鐵と稱する〇、〇一八ペルセントの銅を含有する者は其一平方呎毎に〇、三八〇オンスの重量を減じたるに對して〇、三〇四ペルセントの銅を含める鐵が〇、四三〇オンスを減じ〇、三四〇ペルセントの含銅鐵が一、二一三オンスを減量したり。

此等の成績によりて見れば大氣の侵害と藥品溶液の作用とは別であつて一方に強きを以て必ず他に對しても強しとは云へない樣である只銅を加へたる結果は其腐蝕を時によりて强弱の不同を生ずる事なく常に平等に起らしむる物である假令ば〇、〇一ペルセントの銅を含める鐵板は其一平方呎に付一ケ月に一オンスの減量の割を以て侵蝕せられ〇、二〇ペルセントの銅を含む鐵板は同一ケ月に五分の一オンスの割を以て腐蝕せらるゝが如し。

又純水と十ペルセントの食鹽水に普通の鐵板、軟鋼板及びオープンハース純鐵を浸漬して一組は靜置し一組は空氣を吹込みて液體を動搖せしめ且試品皆一定の面積を有して之を浸漬する前に其重量を秤り置き試驗の進行中に時々之を取出して附着せる腐蝕成生物を除去し且其重量を秤りて其減量を毎平方呎に割當て算出し又試品は自然の儘にて驗するを可とするを以て製鐵所より來る儘の物を使用する物とす。

使用したる試品の成分左の如し

| | 硅素 | 燐 | 硫黄 | 滿俺 | 全炭素 | 銅 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| オーブンハース純鐵 | 0.003 | 0.001 | 0.014 | 0.031 | 0.035 | 0.110 |
| 普通鐵 | 0.028 | 0.031 | 0.035 | 0.457 | 0.253 | 0.015 |

其試驗成績左表の如し（數字は一平方サンチに對する瓦數）

| | 水靜置 | 十%食鹽水靜置 | 水動搖 | 十%食鹽水動搖 |
|---|---|---|---|---|
| オーブンハース純鐵 | 0.0137 | 0.00800041 | 0.0139 | |
| 普通鐵 | 0.0031 | 0.00700043 | 0.0043 | |

此試驗の成績によれば九九、九五ペルセントの純度に達したる鐵も之を普通の若と比較して腐蝕に抵抗する點に於ては何等勝る所はないのである。

次には純酸素を空氣に比較して何程腐蝕作用が速かであるかを試驗する爲にオーブンハース軟鋼十六番板を六吋角に切りたる物を以て左の如き試驗を行ひたり

第一　空氣を毎日二時間動搖せしむる水

第二　同　上　板は一週間に三回隔日に乾燥せしむ

第三　酸素を以て毎日二時間動搖せしむる水

第四　同　上　第二の通り乾燥す

其成績左表の如し（表中の數字は瓦數）

| 浸漬日數 | 第一條件 | 第二條件 | 第三條件 | 第四條件 |
|---|---|---|---|---|
| 100 | 八、二 | 五、三 | 三、四 | 六、八 |
| 二〇〇 | 一五、六 | 一〇、一 | 二四、四 | 一五、七 |
| 三〇〇 | 二二、三 | 一七、〇 | 三五、二 | 二四、七 |
| 四〇〇 | 三二、二 | 三〇、四 | 四三、四 | 三三、五 |
| 五〇〇 | 四〇、三 | 四五、〇 | 六六、九 | 四八、九 |
| 六〇〇 | 五〇、二 | 五六、八 | 七四、八 | 五七、九 |
| 八〇〇 | 六八、八 | 七六、七 | 一〇七、二 | 七〇、六 |
| 一〇〇〇A | 八五、〇 | 七三、七 | 一二八、〇 | 八四、九 |
| 一〇〇〇B | …… | 一六七、〇 | …… | 一三九、〇 |

此表によりて見れば酸素の作用は著明であつて一千日に於て平均百十八瓦の重量を減じたるに比較の爲になしたる空氣の

| 符合 | 成分 | 硅素 | 燐 | 硫黄 | 滿俺 | 炭素 全量 | 炭素 黑鉛狀 | 炭素 化合狀 | 銅 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | | 0.040 | 0.007 | 0.015 | 0.023 | 0.059 | …… | 0.059 | 0.110 |
| C | | 0.030 | 0.005 | 0.016 | 0.120 | 0.056 | …… | 0.056 | 0.100 |
| B | | 0.040 | 0.008 | 0.015 | 0.024 | 0.030 | …… | 0.030 | 0.015 |
| I | | 0.021 | 痕跡 | 0.019 | 0.021 | 0.030 | …… | 0.030 | 0.013 |
| J | | 0.007 | 0.003 | 0.016 | 0.013 | 0.030 | …… | 0.030 | 0.015 |
| K | | 0.008 | 0.003 | 0.013 | 0.030 | 0.030 | …… | 0.030 | ナシ |
| U | | 0.008 | 0.015 | 0.043 | 0.043 | 0.164 | …… | 0.164 | 0.021 |
| W | | 0.004 | 0.030 | 0.041 | 0.021 | 0.097 | …… | 0.097 | 0.030 |
| T | | 0.005 | 0.043 | 0.290 | 0.450 | 0.119 | …… | 0.119 | 0.030 |
| V | | 0.008 | 0.250 | 0.335 | 0.470 | 0.133 | …… | 0.133 | 0.030 |
| D | | 0.140 | 0.210 | 0.314 | 0.310 | 0.033 | …… | 0.033 | ナシ |

みの方は僅かに八十五瓦を減じたるのみなり然るに隔日に乾燥せしめたる方は其腐蝕最も著しくして多數の小孔を生じたり酸素が腐蝕作用に於て空氣よりも强烈なる事は右の實驗成績が示す所であれ共隔日に乾燥せしめて一千日間に於ける重量の減少は空氣の方が酸素よりも大なりし事を示したのは奇異の觀があるのである。

斯の如く試驗の成績未だ充分徹底的ならざる點あるを以て尙進んで之を研究すべき必要があるから更に左記多數の試品に付て試驗せられたのである。

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| E | 〇、一五〇 | 〇、一七〇 | 〇、〇一九 | 〇、〇三〇 | 〇、〇三〇 | …… | 〇、〇三〇 | 痕跡 | | |
| X | 〇、〇〇三 | 〇、〇五二 | 〇、〇一三 | 〇、〇二九 | 〇、〇六〇 | …… | 〇、〇六〇 | 〇、〇四七 | | |
| F | 二、七一〇 | 〇、八二〇 | 〇、一一〇 | 〇、三二〇 | 三、一一〇 | 二、六二〇 | 〇、五九〇 | ナシ | | |
| S | 二、一四〇 | 〇、四〇〇 | 〇、一二一 | 〇、四四〇 | 三、〇八〇 | 二、六七〇 | 〇、四一〇 | ナシ | | |
| L | 〇、八一〇 | 〇、一三七 | 〇、〇五四 | 〇、一五一 | 一、三五〇 | 〇、〇五〇 | 一、三〇〇 | ナシ | | |
| O | 〇、四八〇 | 〇、一四三 | 〇、〇四四 | 〇、一一六 | 一、五五〇 | 〇、〇五〇 | 一、五〇〇 | ナシ | | |
| M | 〇、九〇〇 | 〇、一三四 | 〇、〇九〇 | 〇、一三〇 | 〇、五七〇 | 〇、五〇〇 | 〇、七〇 | ナシ | | |
| N | 〇、七七〇 | 〇、一六四 | 〇、〇六七 | 〇、一六〇 | 二、四四〇 | 一、四四〇 | 一、〇〇〇 | ナシ | | |
| G | 二、九五〇 | 〇、九二〇 | 〇、一一〇 | 〇、三三〇 | 三、〇六〇 | 二、七二〇 | 〇、三四〇 | ナシ | | |
| R | 二、一五〇 | 〇、三二七 | 〇、一二一 | 〇、四六〇 | 三、一五〇 | 二、三五〇 | 〇、八〇〇 | ナシ | | |
| P | 〇、二六〇 | 〇、〇一一 | 〇、〇二四 | 〇、五八〇 | 〇、一〇〇 | …… | 〇、二〇〇 | ナシ | | |
| Q | 〇、一三〇 | 〇、〇三六 | 〇、〇四一 | 〇、五八〇 | 〇、二一〇 | …… | 〇、二一〇 | ナシ | | |
| Y | 一五、〇〇 | | | | | | | | | |

AとCは含銅軟鋼
BとIはオープンハース純鐵
JとKは同上コールドロールド
UとWはオープンハース鐵
VとDはベスルメ鐵
Eはブッドルド鐵
Xは木炭鐵
LとOは白色鑄鐵
GとRはセミスチール
FとSは鼠色鑄鐵
MとNはマリエーブル
PとQは鑄鋼
Yはヅリロン

此等二十四種の鐵板は各六吋角のものとして左記八種の異りたる條件の下に之を試驗したり

(一)蒸溜水にて靜置
(二)同上　板を一週間に二回乾燥す
(三)蒸溜水に空氣を吹込んで動搖せしむ
(四)同上　板を一周二回乾燥
(五)十ペルセントの食鹽水にて靜置
(六)同上　板を一周二回乾燥す
(七)同上　空氣を吹込んで動搖す
(八)同上　同上　板を一周間に二回乾燥す

斯くて試品は一千日（木炭鐵のみは五百日）の後に取出して其腐蝕せられたる狀況を檢査したる結果は左の如し

(一)の條件に於ては重量の減少によりて測定せる腐蝕作用は頗る規則正しく進むのであつて之に必要なる酸素は液の表面より空氣中の酸素が溶解して全部に瀰散するのである又生じたる銹は粗鬆であつて容易に剝落するのである此場合に於ける如く靜止せる水中にて鋼若くは鐵が腐蝕せらるゝ時は主として其成分に關して其變化の多少が生ずるのであるが生したる銹による事は少ないので又不純なるものは最も多く侵害せらるゝのである。

此條件の下に於ける腐蝕は堅く附着せる銹の生ずる事の少ないのが特點である。

(二)此條件の下に於ける腐蝕の特徵は堅く附着せる磁性酸化鐵の銹を生ずる事であつて板面には小瘡を生ずる物多く試品は皆黑色の厚き銹を以て覆はれたり而して此黑色の酸化鐵は赤色の第二酸化鐵の下層にありて恐くは其還元によりて生じたる物なるべく又此還元作用は電解によりて生ずる水素によりて起り左の如くなるべし。

$$3Fe_2O_3+2H=2Fe_3O_4+H_2O$$

或は第一と第二酸化鐵の結合して出來る物かも知れず左の式に示す如し。

$$F_2O+F_2O_3=F_3O_4$$

又此黒色の酸化鐵の錆はロールド金屬には鑄物よりは遙かに固く附着する物である。

(三)此條件の下に於ては腐蝕は著しく增大するので其原因は空氣を吹込みて水を飽和せしむるからであるので試驗成績表に就て見れば明瞭である而して最後の結果は種々に働ける作用の總勘定結果であつて此等作用の或物は反對に働く物もあるのであるが其差引勘定の結果である。板の全體は皆小孔を生ずる事を示すので又小瘡や小圓錐狀の凸起や小噴火口の如き物を生ずるが一般にロールしたる金屬は鑄物より多く腐蝕せらるゝのである中にも鑄鐵及びセミスチールは黒鉛質炭素及び硅素を最も多く含む物で其表面は最も腐蝕の少ない物である。

(四)本條件の下に於ては試品は皆多少赤褐色の錆を以て覆はれロールしたる金屬は鑄物よりは甚だしく腐蝕せられ又銅を含有せる軟鋼の二種類中にてAは全然崩壞したるにCは孔を生じて著しく腐蝕したれ共未だ其形體を失ふに至らざりき而して此事實は一の疑問であつて二種共に其成分は頗る相似たるに拘らず斯の如くに結果の異なる事は成分以外の未知の原因(恐くは機械的處理の差異)によりて斯く腐蝕を異にする物なるべしと思考せらるのである。

鑄物は全體に於て此條件の下に良成績を現はし就中鼠色鑄鐵及びセミスチールは孰れも特に優秀の成績を示したり

(五)食鹽及び其他の電解質が金屬の腐蝕を促進する事は一般に知らるゝ通りであつて殊に交互に乾燥と濕潤とを繰返す場合に甚だしきものである。

(六)此條件の下に於ては多く孔を生じ鑄物はロールしたる金屬よりも腐蝕さるゝ事微弱なりし又オーブンハース鐵の一なるはロールしたる金屬中にて最大の減量(一七六・八瓦)を示したり

(七)本條件の下に於ては凡ての試品(下記の除外を以て)は空氣を以て動搖せしめたる水中に(三)に於けるよりも腐蝕少なかりし只鼠色鑄鐵とセミスチールの二品は多く腐蝕したのである然れ共此等の二種でさへも(三)に於て凡ての試品が現はしたる如き孔を生ずる事は之を示さゞりしなり一般に本條件の上に於ては試品の表面は平滑に且清淨に保持してロールしたる金屬は微細なる結晶狀を示し鑄物は微なる粒狀の組織を示したり又稀には表面に錆の附着したる物もありたれ共之は除外例と認むべき物である。

然れ共空氣を以て動搖せしめたる水中に於て多く腐蝕せる物は空氣を以て動搖せしめたる食鹽水中に於ても甚だしく腐蝕して互に相一致せる成績を現はしたり。

(八)板の外觀と其重量の減少の二點より判定すれば本條件中にて最も酷烈なる物であつて凡ての試品は皆赤褐色の錆を以て覆はれたり。

不純の物は純なる金屬よりも腐蝕に抵抗する事強くして本試驗の成績によるも白鑄鐵は平均減量一五一瓦セミスチールが同一九六瓦マリエーブル鐵Mは其含有炭素の量に於て同Nよりも少ないから其減量は二三七瓦なるにNは一九二瓦の減量に過ぎざるなり。

試驗成績表(表中の數字は減じたる重量瓦なり)

板は常に濕潤

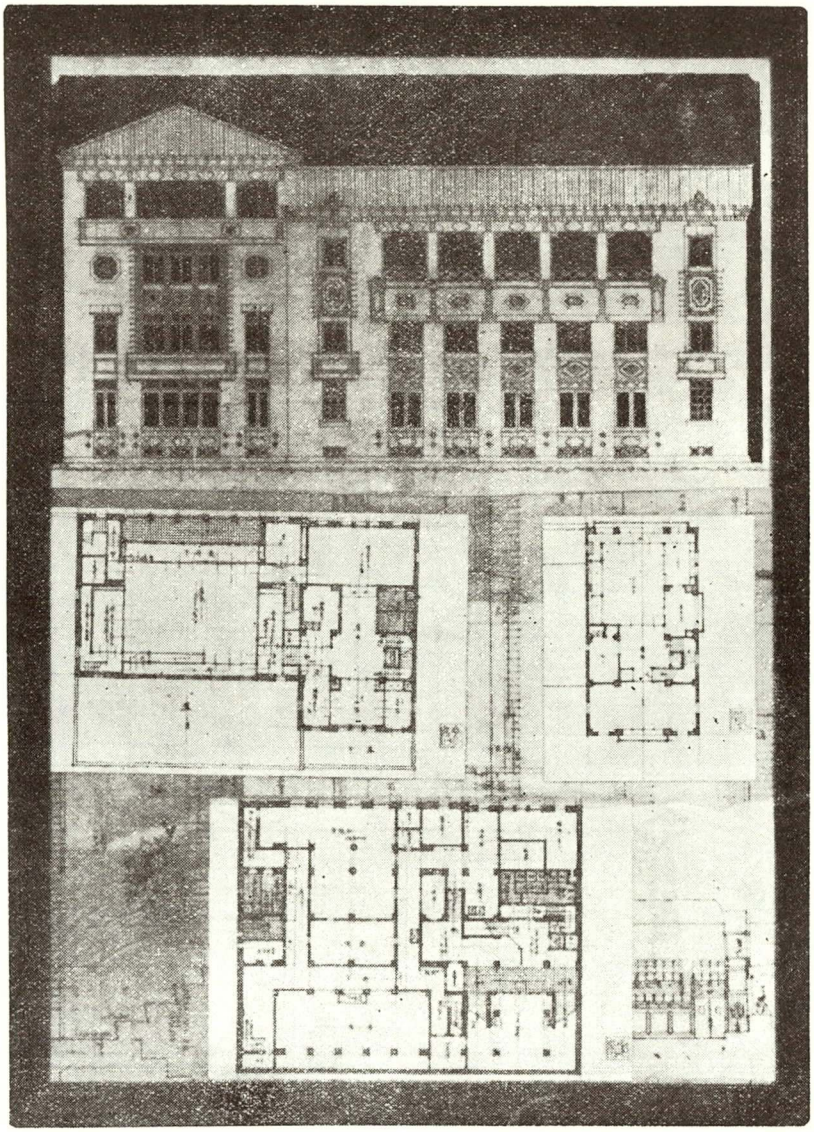
| 鐵の記號條件番號 | 靜置 眞水(一) | 靜置 鹽水(二) | 空氣にて動搖 眞水(三) | 空氣にて動搖 鹽水(四) |
|---|---|---|---|---|
| A | 二三、七 | 一八、〇 | 一七七、五 | 一一〇、六 |
| G | 二三、〇 | 一九、〇 | 一八四、九 | 一一一、二 |
| B | 二八、四 | 二一、五 | 一六〇、八 | 一一一、六 |
| I | 二六、六 | 二七、九 | 一五五、四 | 八九、七 |
| J | 二四、一 | 一六、四 | 二三三、一 | 一二八、五 |
| K | 二四、一 | 一四、一 | 一九二、〇 | 一一四、四 |
| U | 一一、三 | 二二、二 | 一八八、六 | 九五、九 |
| W | 三一、八 | 一五、九 | 二一五、五 | 一〇二、三 |
| T | 二九、五 | 一四、一 | 一七八、四 | 九六、八 |
| V | 二三、二 | 一六、九 | 二三〇、七 | 一〇一、六 |
| D | 三九、一 | 二四、一 | 一九六、六 | 一〇二、一 |
| E | 二六、八 | 二〇、三 | 二三三、七 | 一〇八、四 |
| X 五百日 | 二一、六 | 一一、四 | 一五三、九 | 七〇、六 |
| F | 三二、一 | 一九、九 | 七八、八 | 八八、一 |
| S | 二八、六 | 二三、三 | 一〇三、四 | 一四三、五 |
| L | 二七、二 | 二四、五 | 二三〇、七 | 一一六、二 |
| O | 二九、六 | 一八、一 | 一四四、一 | 一〇三、〇 |
| M | 二三、八 | 一七、八 | 二二三、二 | 一一八、五 |
| N | 三〇、五 | 一九、五 | 二一八、三 | 一一三、一 |
| G | 三三、九 | 二〇、五 | 九七、三 | 一二四、〇 |
| R | 二八、八 | 一八、五 | 一一八、六 | 一二四、五 |
| P | 三〇、六 | 二四、四 | 二四二、二 | 一〇七、四 |
| Q | 二九、二 | 二四、九 | 二四七、六 | 七八、五 |

板を一週間に二回乾燥す

| 靜置 眞水(五) | 靜置 鹽水(六) | 空氣にて動搖 眞水(七) | 空氣にて動搖 鹽水(八) |
|---|---|---|---|
| 四五、九 | 一三一、一 | a | a |
| 三六、八 | 一五三、九 | 二〇四、二 | a |
| 五一、二 | 一四五、七 | 一六四、八 | a |
| 四八、五 | 一三三、五 | 一四八、七 | 二四七、九 |
| 四一、三 | 一〇七、二 | 一二四、三 | 二五三、〇 |
| 四一、五 | 一三九、二 | 一三一、七 | a |
| 五一、一 | 一七六、八 | 一四六、五 | a |
| 四九、九 | 一四七、三 | 一八六、六 | 二三一、九 |
| 五三、五 | 一六一、八 | 一七一、〇 | 二五二、一 |
| 五〇、三 | 一五三、八 | a | 二三二、六 |
| 六五、六 | 一五一、九 | 一四三、一 | a |
| 四三、九 | 一一一、九 | 一〇七、九 | 三〇五、三 |
| 三三、八 | 九〇、六 | 一八九、四 | 一六〇、三 |
| 二四、四 | 九五、〇 | 六二、九 | 一九六、六 |
| 三三、八 | 五七、二 | 四二、〇 | 一九、五 |
| 一三、六 | 七〇、九 | 五一、四 | 一五三、八 |
| 二四、八 | 六五、五 | 五九、七 | 一四九、九 |
| 三一、六 | 一三〇、二 | 六三、一 | 二三七、六 |
| 三九、五 | 一〇三、六 | 八六、五 | 一九一、九 |
| 三三、二 | 八一、五 | 六二、一 | 一九二、六 |
| 二五、二 | 八一、四 | 四八、一 | 一八九、二 |
| 五五、五 | 二一八、〇 | 一三〇、七 | 四四七、七 |
| 三六、二 | 一六〇、三 | 一三一、三 | 二八五、九 |

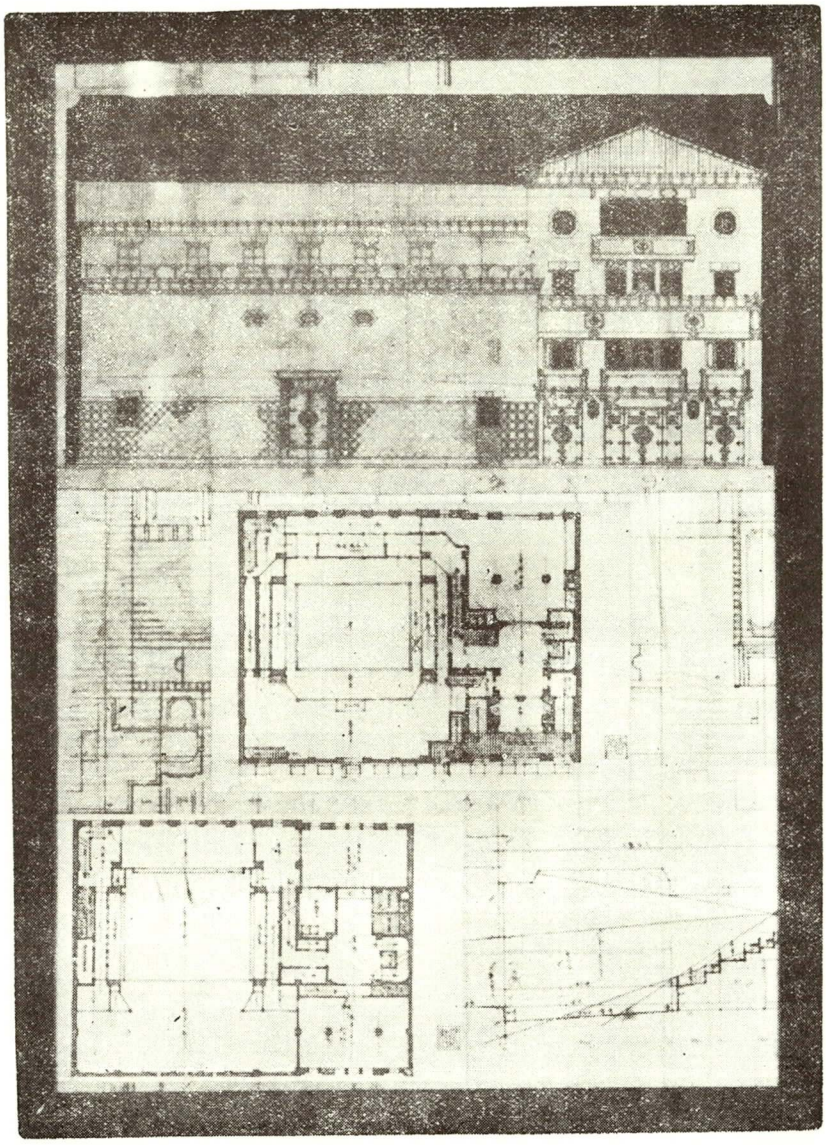
表中のaは金屬が崩壞せし事を示す





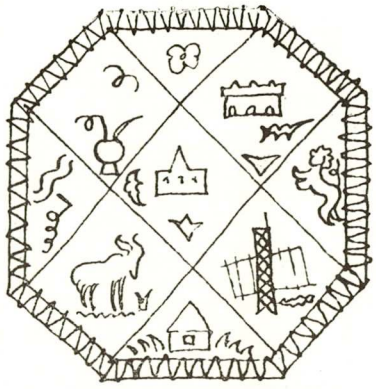
(二二)　觀　展　會　柊

——氏　郎　三　得　村　木　(一のそ)〔塲　武　演〕——



（二二）　觀　展　會　柊

——氏郎三得村木（二のそ）〔塲武演〕——



# 大都市は斯く膨脹すべきである

方米治郎

都市の構成は須らくその地域分布が有機的で合理的でなければならない、そして都市計畫上に於ける地域制定が重要な問題であることは爰に贅言を要せない。次の一篇は曩にロバート、ホハイテン氏が都市構成上に於ける有機的構造を、理想的に創案された同氏苦心の挿圖を説明すべく發表された所論の大要であるが、都市問題の喧しき此頃又一つの好資料と思はれるので、圖に添へて大意を抄譯した次第である。詳細は原文（Landscape Architecture Vol. XIV No. 2）を御參照下さい。

吾々が現今首府だの大都市だのと誇つて居る都會もよく考察してみると、何れも初めから或る計畫のもとに出來上つたものは殆ど無いのである。總てが小邑の漸次に累集したもので詮り中心部となつてゐる大きな町が溢るゝやうな勢で段々と外部に流れ出して行く中に、以前獨立して自治であつた郊外地の町村をもこの膨脹圈内に捲き込んで了ふのが常であるそれで之等の町々の構成に特異な差もなければ各町村が各々獨特の特技と謂ふべき機能をも持つてゐない。そして調和した發達を試みやうと云ふ計畫もない。唯種々の活動上の施設が錯雜して居て中心部の都市の生命或は事業に對しては各町村の機能に就て一般的に何等の考慮も拂はれて居ない有様である。

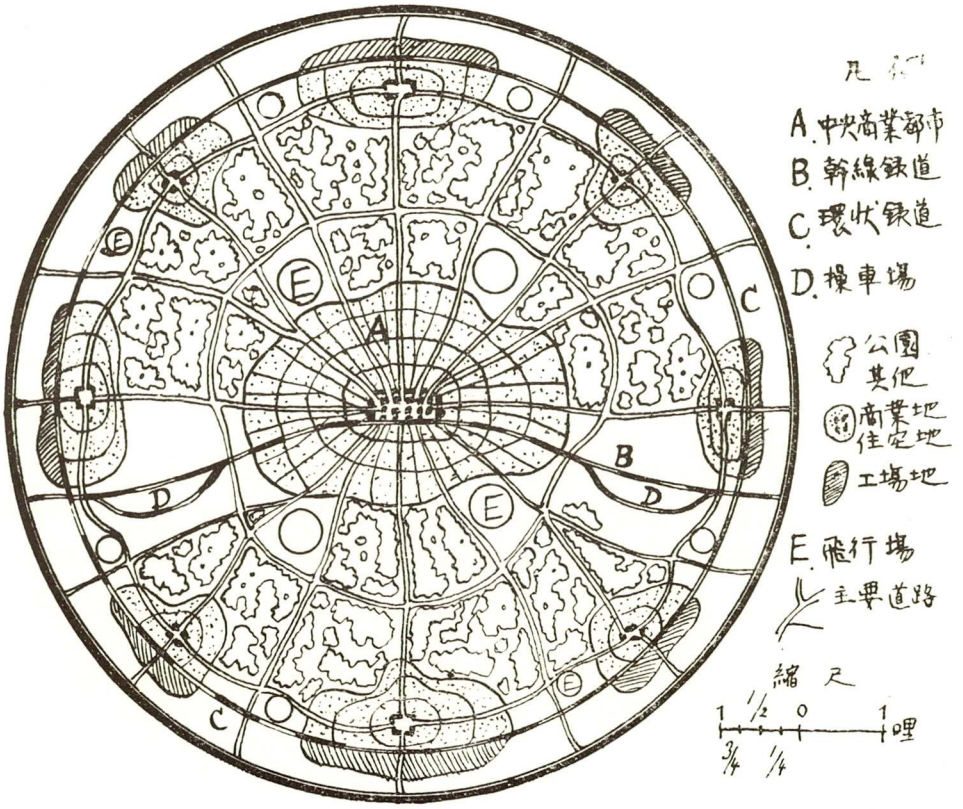
こゝに掲げた圖面は先づ第一に大都市の計畫に於て隣接する開放された擴張地域を如何に利用すべきかを示し、第二には地域構成上に於ける種々の改善し得る諸點を教へてゐる。勿論中部の都市の周圍には數多の隔離した獨立の郊外町村や接續町村が取卷いて居るが、之等の各町村が獨立して立つて行くのは中部都市との間に介在する開放された擴張地域がある間丈で、それがなくなると獨立は出來なくなつて自ら大都市の膨脹によつて併呑される次第である。この論は吾々が屢々耳にする農業耕地の擴張地域起用説とは少々意義が違ふのである。こゝでは開放された擴張地域は都市膨脹の要素となつて直ぐ都市として、或は半都市として次の如き種々な用途

に向つて利用し得られるのである。

大公園、公園道路、運動場、森林地、ゴルフ場、郊外倶樂部、私有別荘地、墓地園、上水道水源池及濾過池、飛行場、公營或は國營農園、諸會館、大私設會館、市場用地、下水處分地、自動車諸車置場、温室、列車庫及操車場等々かくの如く特殊な用途に充て得ると共に郊外町村の獨立上の保證ともなるので、更に幾多の點に於ても役立つのである。例へば都市の大火を局限防止する防火線としても利用され又將來の鐵線幹線路及循環線路、送電線、送油線、送水線、市町村連絡鐵道、乘合馬車道、高速度電車道、自動車專用路、飛行機着發場、散歩道等々の敷地としても實に經濟的な用地となることは明白である。

斯くして將來吾々が運輸、通信の術の大に開發されたる結果として當然到達すべき窮極の秋に際しても、この開放された擴張地域の存在によつて蒙る恩惠は蓋し多大なものであらう。何人も現在に於ては將來の此種要求の如何なるものなるかを的確に思意推定することは不可能なるが、兎に角之等の土地が大必要であらうことは推斷し得るであらう。

次に附屬町村を周圍に有つ中部都市は機能の專門化とも云ふべき事を實施し得る利益がある。例へば中部都市は本來商業地であるから商業從事者家族の居住地としての機能を一層專門化し、周圍の町村は各製產工業地として又その從業者達を居住せしむるを以て足るのである。即ちかくせば交通運輸力を增進し住宅問題が極小限に解決され、その結果は商工業の能率を著しく進め都市の發展を助成するこ




理想之都市構成圖（ロ氏案）

と〻なるのである。且それのみに止まらず各種の製産工業並に他の各所屬町村の活動事業は、其町村に最も適當にして村の調和的發達を助長すべきやうに之を分賦し或は集合せしめねばならないのである。實例に就て述ぶれば、

『コークス』村とも謂ふべき町村にもコークス窯、溶礦爐、展鐵工場があり、『包裝町(パッキングトン)』には荷造工場、倉庫、肥料藥品工場等があり、『鋼鐵町(スチールトン)』には大機械工場あるが如く、『自働車村(アウトセンター)』『製造町(センター)』『紡績町(ミルトン)』『衣服町(ガーメントセレクター)』等夫々各所屬品の製産工場を以て充たされ、『大學町(カレジータウンレセレター)』には國立大學其他の教育機關があると云つた有樣である勿論同樣に他にも又印刷業者の町村、寳石商、雜貨商等夫々の集團した町村がある譯である。

要するに各郊外町村の發達はその道程が任意的即ち自由でなければならない。そして各々町村は中部都市の生活並に事業中各郊外地の眞の機能遂行の上に最も能率を擧げ得べき生産工業或は施設のみを力行すべく、若しも其地の機能に障害を來す事業であるならば全然排さなければならない。然し中部都市にとつては有益な事業であるが既設の郊外町村に不適當である場合には、他にその事業に相當した町村を新たに造るべきである。

以上の所論を約言すれば大都市は單に累集の道程を經て發達して來た錯雜たる自然生成の集團物と見て放置せず、その形體に於ても眞に有機的編成物たるの實に一層接近せしめ、微細に機能を專門化して更に複雜組織の進歩發達を計畫すべきで、都市本性の發露たるこの設計に從へば、それを實現し得て眞の目的に到達することを得るであらう。

その結果は大都市が克く調和を保ち反撥することなく成長して發達するであらう。

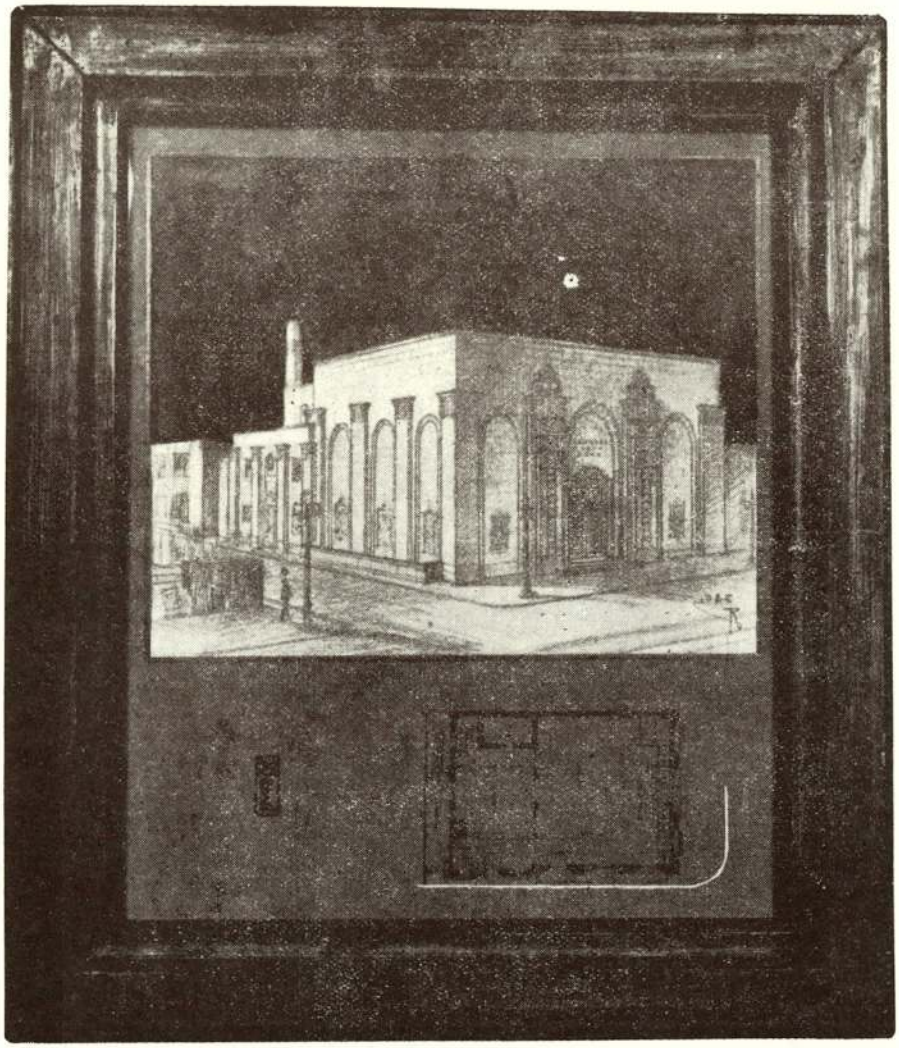
吾人は之を假に都市の優地域案と稱へよう。そして之を提唱して都市改造の實際問題に一光明を投げんとするものである。敢えて『大都市は斯く膨脹すべきである』と題した所以もこ〻に在るのである。(一四、一〇、三〇)

×　×　×



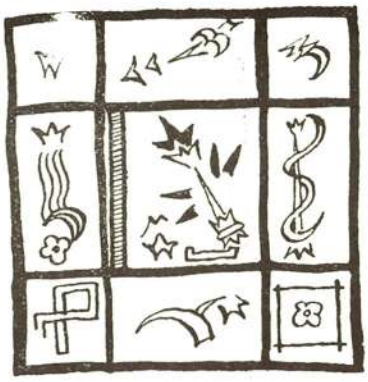
（二八）　觀　展　會　柊

——氏吾精野本　（物靜む含を壺）——



（四四）　觀　展　會　柊

——氏雄武井安　〔物建る或〕——



# 大阪の風力に就いて

池田宮彦

風力は各地方によりて異り又其の土地の狀況によりて異るものである。從つて建造物の設計に當つて其の地方の風力を假定するには之れを外國の例、其他の內地の他の土地の例により判定すべきものでは無く其の地に於て測定したるものを基として考ふべきものである。

大阪市に於ては明治十五年大阪測候所の設立せられて以來今日迄四十三年間、風力を觀測せられたるに其の間最大風速は大正元年九月二十三日に記錄せられたる、一秒間三十七米である、然るに此の數はロビンソン風速計による誤差を含んで居り實際の風力は此の數に〇•七を乘じたるもの即二十五•九米である事が發見せられ大正十四年一月より之れを採用せられることゝなつた。

大阪測候所に於てはダインス式自記風壓計を使用し風壓を測定し、之れを風速に換算して發表せられて居つた、然るに此の機械によりて風壓を記入する用紙はロビンソン風速計に基いて目盛りせられたものであるから測定せられた數にロビンソン風速計によると同一の誤差のあることは言ふ迄もない、據つて大正十四年一月以來大阪測候所では今日迄の最大風速は大正元年九月二十三日、二十五•九米、秒、と發表せられて居る。

風力は同じ場所に於ても高さによつて異り高さの增すに從つて風力の增すことは往々目擊せられる所である。之れに關するStephenson氏の實驗は誠に貴重なる一例である之れを第一表に揭ぐ、表中×印は實驗せられたる高さに於ける風壓である。同氏は此の實驗に基いて地上の高さと風力との關係を次の公式で示して居る。

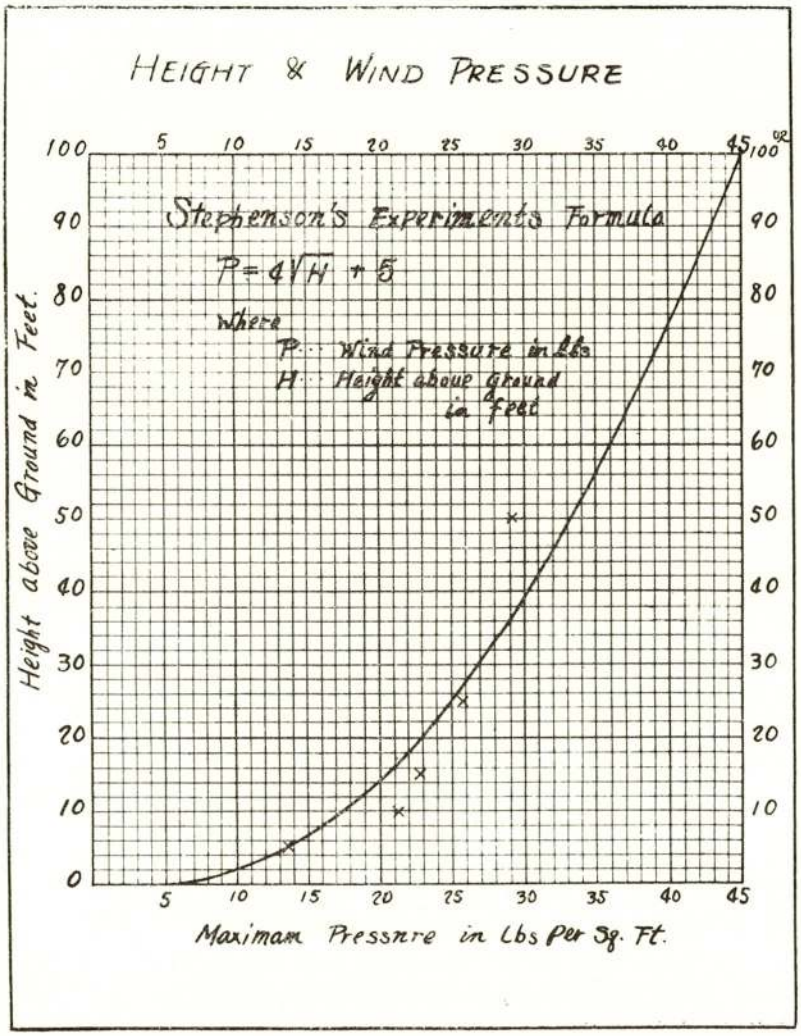
$$P=4\sqrt{H}+5$$

但　P……風壓封度/平方呎

H……地上ノ高サ呎

大阪測候所の風壓測定の高さは地上十六•四米である。尙參考の爲め主要都市の風力を第二表に揭ぐ。

次に風壓と風速との關係を示した公式のうち江湖に知られたもの三種を第三表に掲げ其の關係を示す、但し測候所に於て採用せられて居るものは、




（第　一　表）

である。風速より風壓を算出するに此の公式を用ゆれば他の式よりも最大値となることは同圖表によりて知られる、而してどの公式が最も實際に近いかは他日論ずることとして、大阪の測候所に於ては風壓を測り之れを前記公式によつて風速に換算して發表せられて居るから自然同公式を用ひて風壓を算出すべきである。

次に高さと風力との關係であるが之れは遺憾乍測候所に於ては測定せられて居ない、唯一定の高さに於て測られて居るのみであつて、地上各點に於ける風力を比較することは出來ない。而して大阪測候所の風力測定の高さは地上十六・四米との事である。茲に於て余はStephenson氏の實驗に基き高さの增すに從つて風力の增す率は大阪に於ても同一と見るも大差無きものと假定し同氏の公式に倣ひ、大阪の風力が地上高さ十六・四米（約五十四呎）に於て八十・五瓩・平方米（約十六・五封度、平方呎なるを以て此の點を通過し且つS氏の曲線と同一性質を有する曲線を畫く算式を作れば次のものを得

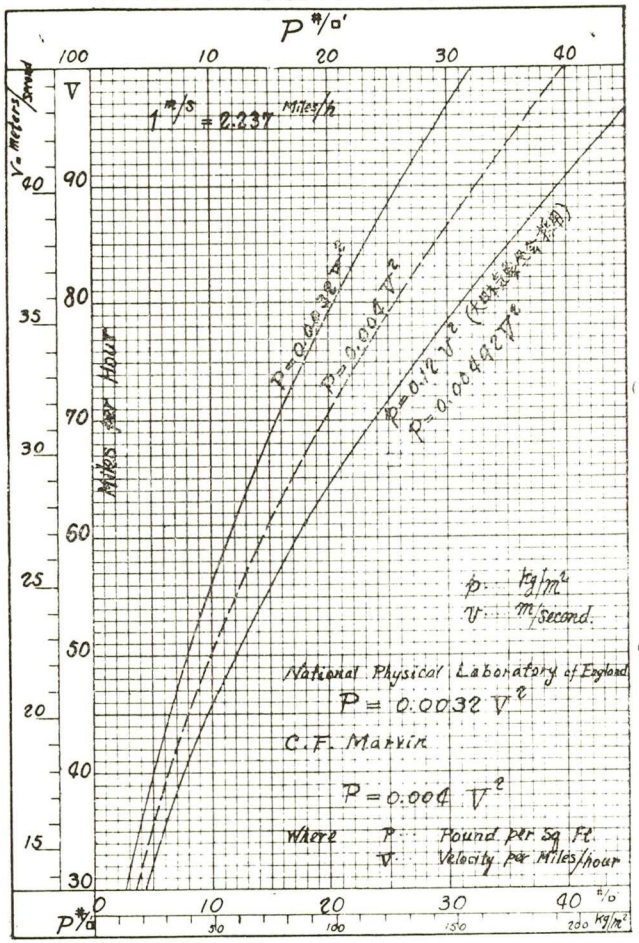
$P = 0.12V^2$

茲にP……風壓　瓩/平方米
V……風速　米/秒

$P = 2\sqrt{H} + 2.5$

但　P……最大風壓封度/平方呎
H……地上高サ　呎

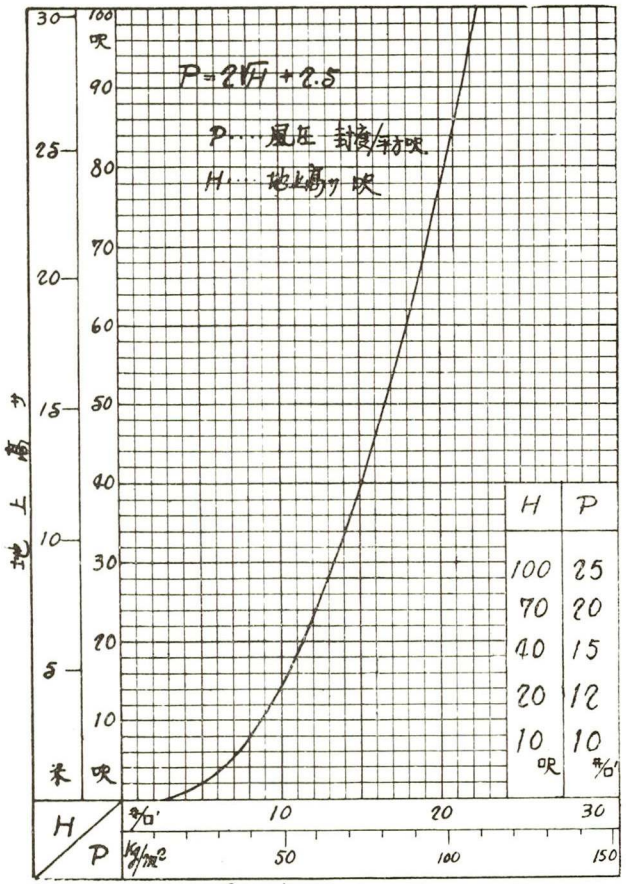
## WIND VELOCITY & PRESSURE




1 kg/m² = 0.2048 lb/□'

第 參 表

## 地上高サト 風壓關係圖表
## （大阪）




最大風壓

（第 四 表）

即之れを第四圖表に示す、本圖表によりて地上高さと風力との關係を推定することが出來る、而して大阪の風力記錄は實に過去四十餘年間の最大記錄であるから今後とても之れ以上に達することは殆んど無いものな考へても大差は有るまいと思はれる。

以上を總括して、余は此の算式によつて算出したるものを以て大阪の最大風壓力として採用するを最も適當と考へられる。尙、實際の使用に當つて此の算式より一々計算するの煩を避け次の値を用ゆるを便利と考へらる。

十　呎以下……十封度、
二十呎以下……十二封度、
四十呎以下……十五封度、
七十呎以下……二十封度、
百　呎以下……二十五封度

以上愚見を述べて先輩諸賢の御指導を希ふ。

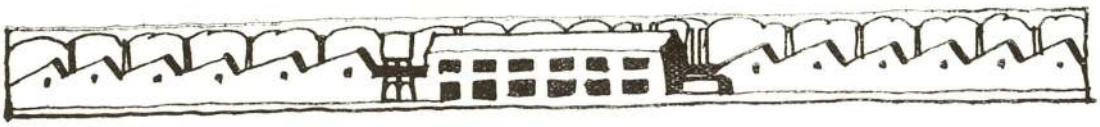
終りに臨み測候所へ希望、

建造物の設計に當つて風壓力を何程に採るかは常に建築家の頭を惱す事であるが特に高き建造物の最高所に當る風力に就ては遺憾乍ら今日迄知られて居ないのである、故に測候所に於かせられては我國建築界の爲に風力の觀測を唯一定の高さの風速のみに止められず、市內の高き火見樓或は高塔等を利用せられて高低による風力の差異につきても觀測御發表あらん事を切望する次第である。（十四年十一月）

（第　二　表）

| 地名 | 風速計による旧風速 m/秒 | 實際風速 m/秒 | 記錄ある年月日 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 岡山 下廣岡 | 44 | 30.8 | 明治28-7-24 | |
| 〃 | 46 | 32.2 | 33-8-19 | |
| 〃 | 25 | 17.5 | 29-5-21 | |
| 〃 | 37 | 25.9 | 29-8-18 | |
| 神戸 | 28 | 19.6 | 37-9-17 | |
| 大阪 | 37 | 25.9 | 大正 1-9-23 | 高サ地上 16.4米 |
| 和歌山 | 42 | 29.4 | 44-6-19 | |
| 津 | 45 | 31.5 | 29-8-30 | |
| 名古屋 | 40 | 28.0 | 大正 1-9-23 | |
| 松江 | 31 | 21.7 | 33-9-28 | |
| 濱田 | 49 | 34.3 | 35-9-28 | |
| 東京 | 34 | 23.8 | 24-9-30 | |

以上、大正九年　神宮神部署發行曆ニヨル、
實際風速ハ在來發表セラルル風速ニ 0.7 ヲ乘ジタルモノニテ大正十四年一月ヨリ採用ス、



# 秋晴れに古刹を仰ぎて

日本遊藝聯盟會秋季大會の感想片々

## 川村平造

我が歸化同人ラフカデイオ、ハーン先生の著『心』の内に日本人は總てのタツチに永久觀念がない、子々孫々に傳ふべき必要のあるものまでが一時的の要素を以つて作られてある、それを見る時は何が故に日本人は、かくの如き觀念を以つて居るのであろうかと思はれると云ふやうな測意の文があるが、然し是れを見てかの大佛を見たる時に是れが一時的の觀念を持つて造營されたるものと思へようか、藥師寺の如來と云ひ災火に依つても尚ほ今日その時代の藝術味に親しみ得るではないか、まして法隆寺がよしんば、木を持つて地の材料とし、少數の不燃質材料なりとふとと云へども其構格と手法とを見る時に唯れが一時的の觀念を持つて建てたものと思へようか、天に祖福地に平和あれ、かくして此の氣高き姿の法隆寺は永遠に續いて行くのである。

## 菅田登美雄

□

何時行つても奈良を出た車窓の中に忙しい自分を發見する。それ藥師寺塔、法起寺、法輪寺の三重塔、法隆寺五重塔、法隆寺驛に着く迄は塔見物で望遠鏡持つ手がつかれる。まして人ごみの其の時は。

□

法隆寺驛に下車すると何時も同じ一種異樣な興奮を感ずる、それは何人にも恐らく感ぜられるであらう古代の神祕の藏する環境に依り起る感情？

□

法隆寺驛から南大門まで行先の急がれる事、無關に急がれる。

□

南大門を入り中門を入る、全堂五重塔を左右に眺め講堂を正面にして立つ、例へ目錄鈔に如何にあらうと世界最古の木造建築物として推古のものと考へたい。

□

金堂に盜人白波入り、藏する所の佛像を盜み去る、佛罰恐るべし。

## 古都にて

## 奇陽人

高き塔朱のひさしのはえ〳〵と
地にさす眞陽の照りて返すに

△　△

池の面は碧く湛えてうつる木の
亂さぬ程に風はなでめり

## 小田惠輔

天高く氣清き時に古代藝術の都の巡遊は會員相互の觀睦を圖る意味に於て、又浩然の氣を養ふ點に於て大いに意義ありし。

古代建築の粋を集めた法隆寺、奈良に於て臨地講演の擧は頗る有益なりし。

何れの點より見るも大成功、有意義なる大會なりしと信ず。

## 皷庵

能き得ることならば、大阪などの都會人——文化病者と文明中毒者——を、斯ういふ處へ交代で一團體づゝ轉地療養さしたら、と思ふた。そして、療養中は無言の業、肺を吹と開いて、あの古い香りの高い空氣を深呼吸すべしと控を設けたら、と考へた。

## 昧戸有固

幹事さん、御若勞でした。お蔭で蒲矛生活——を離れて、(註に曰く板から離れて)　心行くまで、老け徂く秋と、夢を追るような古刹の氣分に醉心地を覺へました。平凡のようでも、やつぱし法隆寺はよいですなあ。

## 奈落生

講堂——、それは千幾百年のそれの中で、靜寂そのもの、古香そのものと云つたような氣分の裡に、ひたと身を沈めて、講演一時間半の間冥想した氣持ちつたらありませんでした。講演者にはお氣の毒だつたが、まつたく無我の境に入りました。奈良へ往つてからは、厭やな氣になりました。それが、さんざめく現代境の絃音と鄙聲を聞くに到つては、奈落の底へ蹴落されたような氣になりました。併し、よい遊行の一日でした。幹事さんへ感謝します。

## 阿尾仁由

惠まれた季節でもあつたでしようが、何にしても場所も佳し、御骨折りも大變で、御蔭を以て近來にない骨休み——いやアタマ休みを致しました。たゞ、奈良の年々俗惡化して行くのを思ひますと、古典文明の破壞！、日本人特有の矜りの頽沒！、何んといふ情けない事でしよう？。

# 寧樂紀

それがし

十月二十五日、恒例である日本建築協會の秋季大會を、大和の法隆寺から、奈良にかけて開いた。それがしも、お伴についた。五年振りで法隆寺に遊んだのだが、いつ行つてみても、閑寂な古典の香り高い雰圍氣は、此處でなくては浸れない特異さを有つてゐる。——三度行つてもよい、五度行つてもよい。いや、文明中毒者の我等は生涯居つた方がよいかも知れん。

午前十一時に法隆寺境内へ參集といふ掟だ。日は日曜、空らは、申分のない秋晴れ。參々伍々——といふも古いやつだが、あの平和な風色の中を縫ふて法隆寺の講堂に集つた者八十人。

赭塗りの圓柱の蔭に臨時の講壇を設けられ、千古の薄暗い斜光を浴びつゝ講演は始められた——題は「飛鳥朝時代の寺院建築」。演者は奈良縣技師岸熊吉氏。講演も佳かつたであらうが、飛鳥時代の氣分が今以つて傳統的に可成り濃く漂ふてゐるように思はれる。斯うした講堂であゝした過去帳の事共を現代の自然科學が拵へ上げたアタマの裡へ受け入れようといふのであるから、新しい革袋に舊い酒。その醉い心地は、どんなものであ





——法隆寺廻廊——

つか知ら?。

一時間半に亘る長講畢りて、斯の古典藝術の講堂内から、秋の日麗ら艸黄ばむ大自然の藝術の中へ吐き出されたる我等は、オーゲストラ、自然の齎らす色彩の諧調樂に、秋の調べを思ふ存分飽滿しつゝ、唐招提寺から藥師等と巡りて、ついに、寧樂の古都へと辿つた。

錆びたる古都と云へば余りに寂し。醒めたる舊都と云へば亦余りにもだらしない。寢覺め姿と云ふこそ、寧樂の都の、今の姿にふさわしい。されど、山河は、大佛梵鐘の響きに谺し昔ながらの音と共に冴へて、いつ來てみても心地佳し。鹿寄せの興は何んの變哲もない仕草。三笠山にケーブルを掛けて一と儲けしようといふ色消しの沙汰を思ふては、あの山に『三笠の山に出でし月かも』であるまじ。況してや、『何んぞお買ひやす……』『お土産お買ひやす』の生きた蓄音器を相手にお土産物の素見も、余りにアンチゼンツルマンなり。されば、午後三時武藏野旅館へ集合といふお達しの時限迄は、一行の自由行動は、何の收獲があつたであらうか。そこまでは、それがしの遠ふ目が——いやペンの尖きが届き申さず。たゞ、それがしの旅び嚢には、遺せる日本建築の珍らしき態樣を、『法蓮村』の家住ひと、名も無き丘にその惠まれたる自然の技巧を、心躍るまでに賞でたる靜閑遊行の幾時間、まことに身も心も暢びやかであつた。

三時、三笠山麓『武藏野旅館』に再び參集。續いて、此處でも講演を開かれ、奈良女高師敎授佐藤小吉氏が、一時間許り『奈良朝の文化に就いて』流石に研究的な講話があつた。



金堂前に於ける一行



謹聽

講演畢るや、日本流の宴會は開かれた。松本理事長と谷委員長の老巧な挨拶に先づ興は始まつて、校書が酒間の斡旋、歡語放笑、飛盞頻りに、艫て『五妻八景』に變手古な振りを附けた舞踊は始まり、次いで棚曝しの『奴さん』を踊つたが、藝術的なんと註文する方こそ野暮、奈良の校書としては、こゝらが身上であらう。それより、絃歌、亂舞、例に依つて例の如し。是にて、先づ、當日のプログラムは茲出度く千秋樂を告げた。

媚娥斜に掛つて、四圍寂たり。吾れ觀樂の騷場を出でゝ暗裡に息を調ふ。何んにしても寧樂は觀る處ではなくして、思ふにふさはしい處である。（畢）

序に當日のプログラムを附けて置く。

○一日　十月二十五日の日曜日

○一集合地　奈良縣法隆寺村法隆寺表門前

○一集合時　午前十一時

但雨天の際は法隆寺等の見學を見合せ隨意奈良古社寺を見學

午後一時三笠山麓武藏野旅館に集合、同二時より四時迄同所にて左記兩氏の講演

○一見學　法隆寺
　　藥師寺
　　唐招提寺

○一講演　法隆寺講堂に於て自午前十一時半至零時半　奈良縣技師　岸熊吉氏
　　武藏野旅館に於て　自午後四時至五時　奈良女子高等師範學校教授兼住藤小吉氏

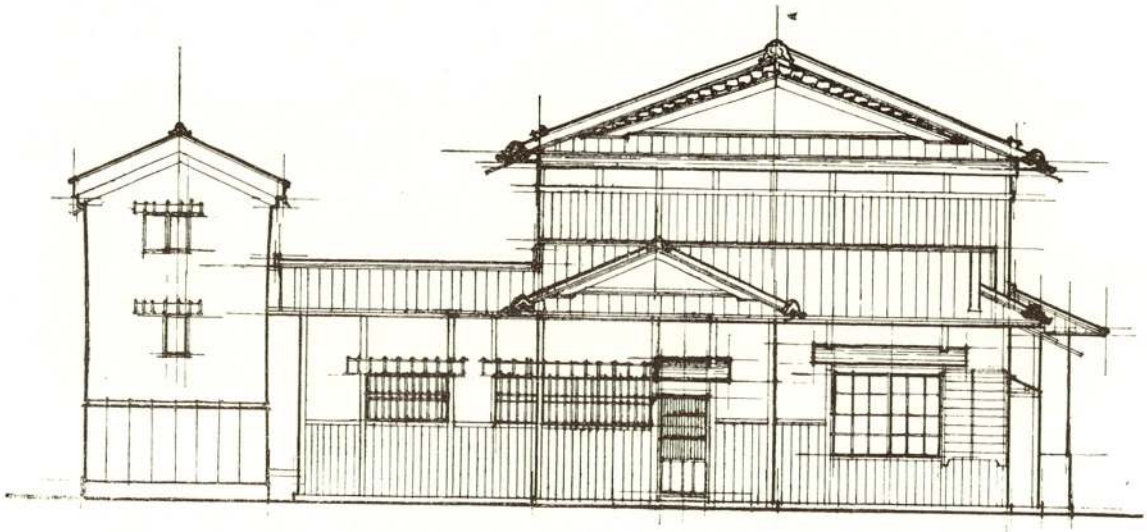
○一餘興　午後三時奈良公園公會堂前に於て鹿寄せを擧行（雨天の際は見合）

午後正三時迄に武藏野旅館へ集合

○宴會　所……三笠山麓武藏野旅館
　　時……午後五時同八時閉會解散



愈々始まる山風



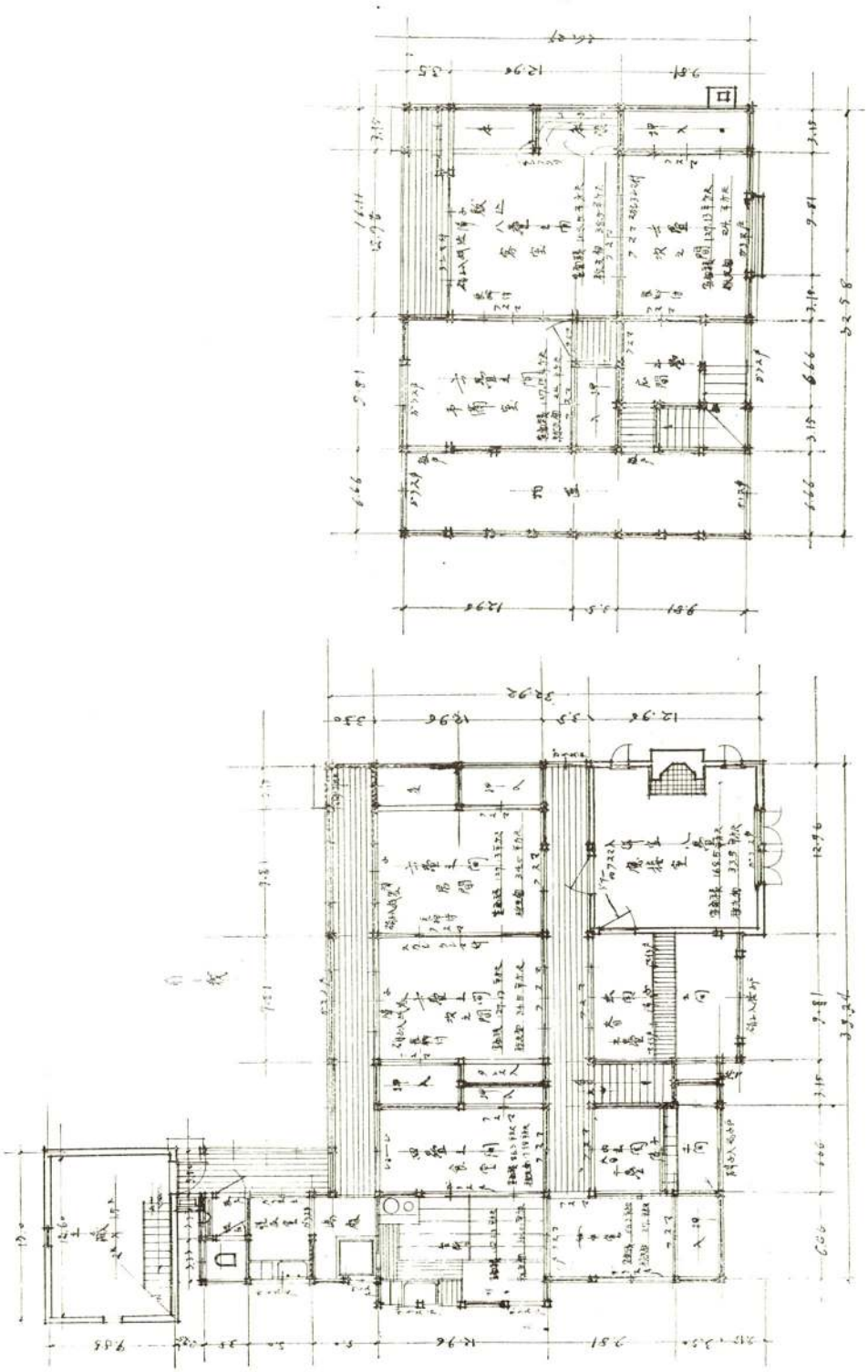
案　　私　　宅　　住

（ 1　　の　　一 ）



案　　私　　宅　　住

（ 1　　の　　二 ）



案　私　宅　住
（2　の　一）



（彫塑——爪切り）

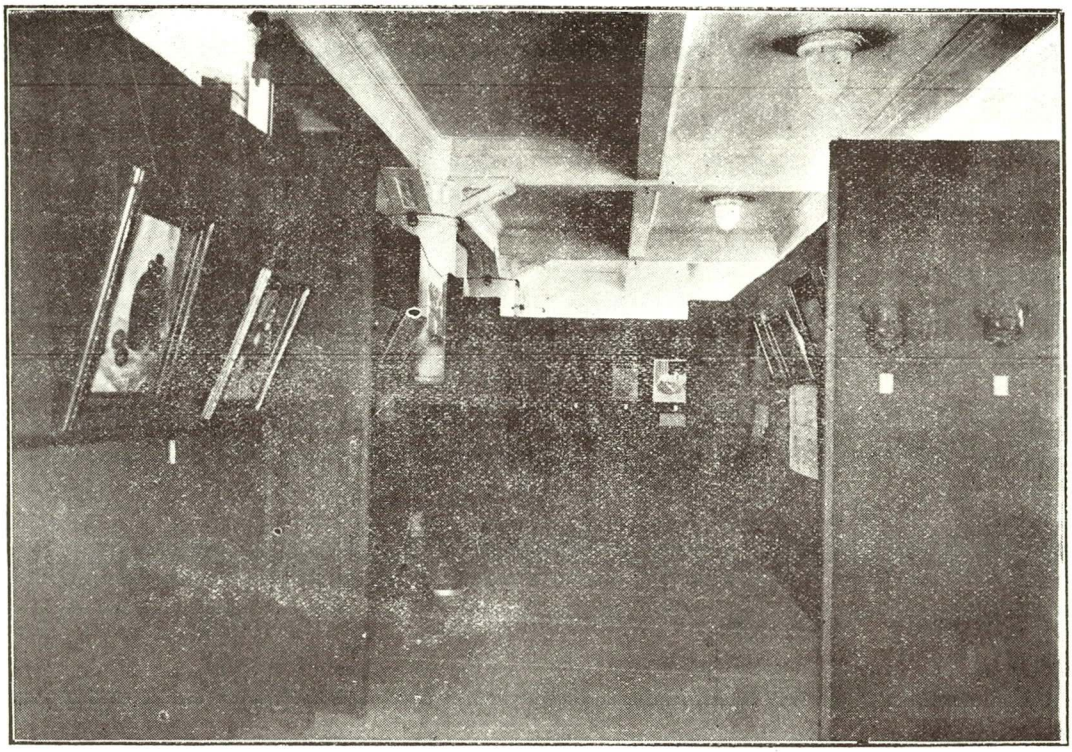
# 柊會の作品展覽會を覽て

江村恒一

所謂アマチュアならざるアマチュアの團體として、何年前か、初めて、その作品の洋畫展を催ふし、主張と抱負を世に問ふて以來、その純眞なる藝術的態度は、遖に可成りな注意を少くとも或る一角に與へたようであつたが、爾來、會を重ぬること幾度び、今その第四回展覽會を、十一月十五日から八日間、高島屋呉服店樓上に開かれた。

『わたくし』の、何よりも嬉しかつたことは、此の幾歳月の間、健全な歩みを續げて、少くとも、出陳者一人々々の、何んにしても、精進の績を、著しく見受けられた事である。今一つは、現に、見惡いいさござは、どういふ譯か斯うした會

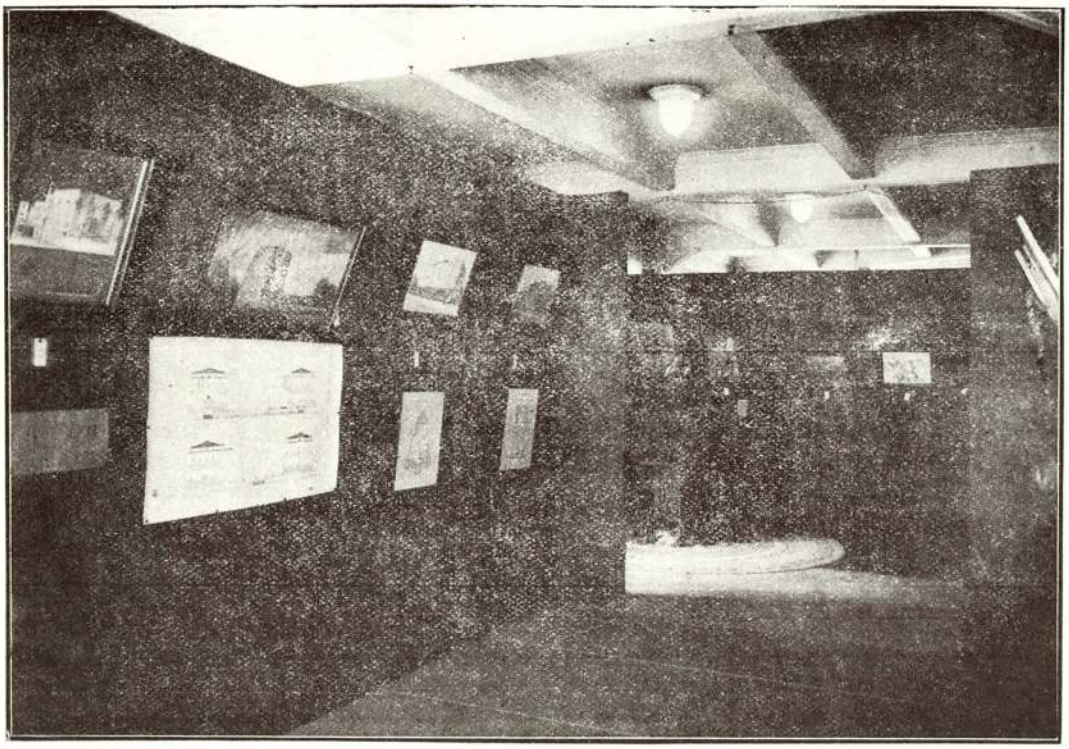
わたくしは、繪畫にも全くの素人である。藝術といふ潤ひは、わたしのアタマの何處を探し廻つても、アラビヤの砂漠に綠帶地を目附けるよりも困難だ。されば、柊會に作品を出陳された諸氏——その多くは辱知の諸氏——の作物を批評なんて、烏が鵜の眞似するよりも一段と無謀な事である。けれども、熱い好意と、わたしの爲し得る最高級の表現方法を以て、やツと御紹介することは、まさか溺れまではしないと思ふ。表現の言葉を知らず見方をも知らない吾れ、若し失禮の廉でもあつたならば、どうぞ御宥しを願ひ度い。先づ斯の證文を差し入れて置きます。



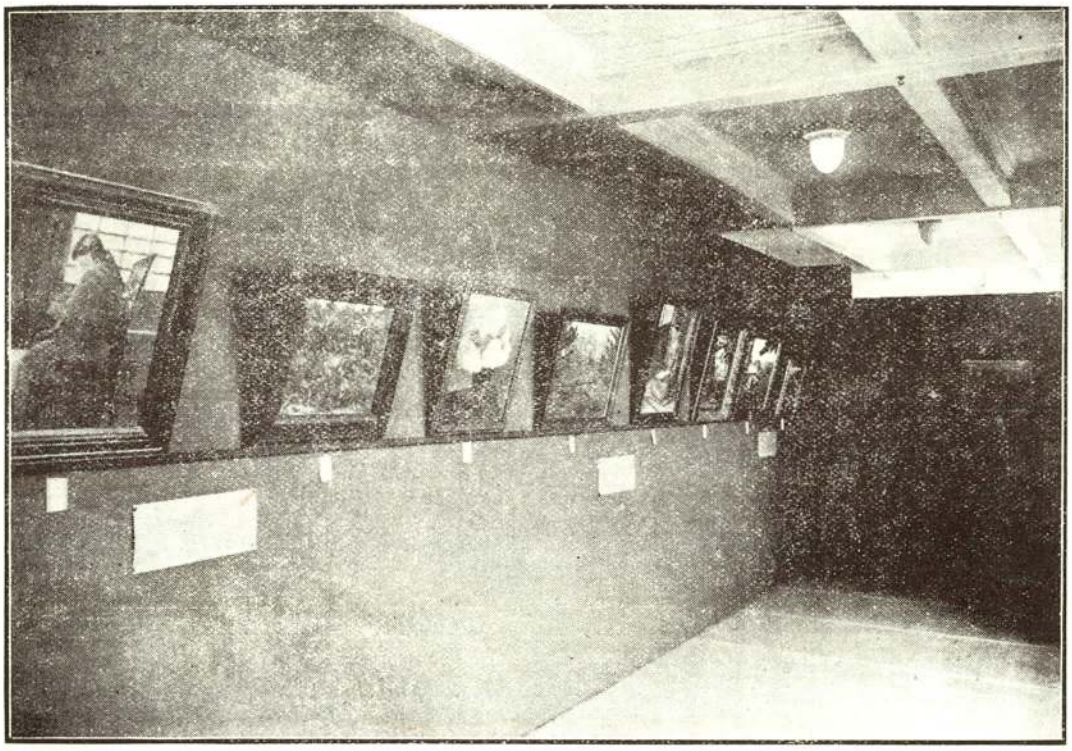
に附きものゝように思はれるが、斯の會には斯うした蔭をちよつとも見受けないと同時に、その一人々々が、たゞ藝術的精進の一途あるのみ、といふ氣意を窺はれることである。尚ほ、も一つ序に附け加へたい事は、今回の出陳者の中には客員といふ名義にもしろ、洋畫界や彫塑界の重鎭とも目される人が他と架を等ふしてゐられることであつた。藝術は本來機會均等主義とも云へるその作物の「質」から自然に生ずる優劣感の外、所謂階級觀念などの存在を容すべき世界ではない筈だが、事實斯うした事の在り得る中に、大家の班に在る人達まで、斯くも、共にその作物を世に質した態度は不覺にもわたくしのまつ毛に露の玉を宿したのであつた。

わたくしは、まつたくの素人だ。その一々を批判するのは不能な事である。けれども、一と渉り見歩いて、強くわたくしの胸を衝いた事は、前年の展觀よりも、著しく進歩の績を見受けられた事である。勿論、その一人々々の業績に、それ〳〵の特異は見出されるが、概して、若々しい、謂はゞ稚巧とでもいふような氣分に觸れたものが、今は、落ち着いた、實り振りを味はれたのは、流石に精進の『時』の賜である。殊に、或る人の如きは、わたくしの見た處で、あの力強い、恰當、小刀をグン〳〵と板面に彫み附けて行くような外延的の強い、色彩の克明な畫風であつたのに、それが、殆んど、別人かの如く、奈何にも冥想的で、內包的な恰度、音樂で云はゞシューマンの『トロメライ』を聽くような感觸を與へる手法?に變つたことは、尠なからず驚いた處である。

△長谷部氏の『靜物』(三)『花』(五)共に氏の一轉期を充分に現はしてゐるようだ。△伊藤氏の『草原晩秋』は、樹梢草頭にも



徂く秋の交響樂を捉へた處流石と思はれて氏の著しき進境を示し、會心のものと狙んだは僻目か。氏の『野未』も甚だ佳いと思はれるが、どんなものだらうか△河村氏の作風は、等しく進境の裡にも、いつばしすなほな、なだらかな明るい畵風を見せてゐることは、氏の一面を知つてゐる吾れには微笑みを禁じ得なかつた、例へば『風景』(一七)でも『夜の靜物』(一九)でも。△木村氏の『寢顏』(二〇)は、色調の綜錯が少々强いようだと思ふたが、非常に引き附けられる作である。△古賀氏の『秋晴』外三點(二四——二七)よりも『窓際』(二三)が一等佳いと思ふ。間違つてゐるかも知れないが、氏の作は風景や何んどよりも、人物の方が得意ではないかと思ふ節がある。△本野氏の『壺を含む靜物』(二八)は、畵の題名の通り、あの小さい壺一つが、その景致を引つ括つて凡てを活してゐるように見受けた。斯の畵の焦點は寧ろ「壺」一つではないかと思はれた。全體としても、雄顯な筆致、流石にと肯かれた。△中牟田氏の『爪切り』(彫塑 一三六)靜中動を摑むだ筋肉の動き、最も佳い表現振りだと思ふ。△山崎氏の『冬の夕』(二四)少々弱は〳〵しさの感はあるが、頗る佳い作である。氏も大層變つて來たようだ。△安井氏の『風景』(四三)力作だ。山嶺地皺の奈何にも偕調的な躍動を克く摑むだ處に、斯の畵の中心を成してゐるのではないかと思ふ。表現の筆致、流石に少なからず吾が心を打つものがある。△百木氏の『無題』(四五)矢木氏の『初冬池畔』共に佳い出來だ。△大國氏の彫塑(五三)小出氏の『裡女』(五一)及び『硝子畵』(五二)、鶴丸氏の『風景』(五六)、齋藤氏の『風景』(五四)及び『花』(五五)、孰も斯界の雄、評する限りでない。以上の外『震災記念堂』(七)『美術學校』



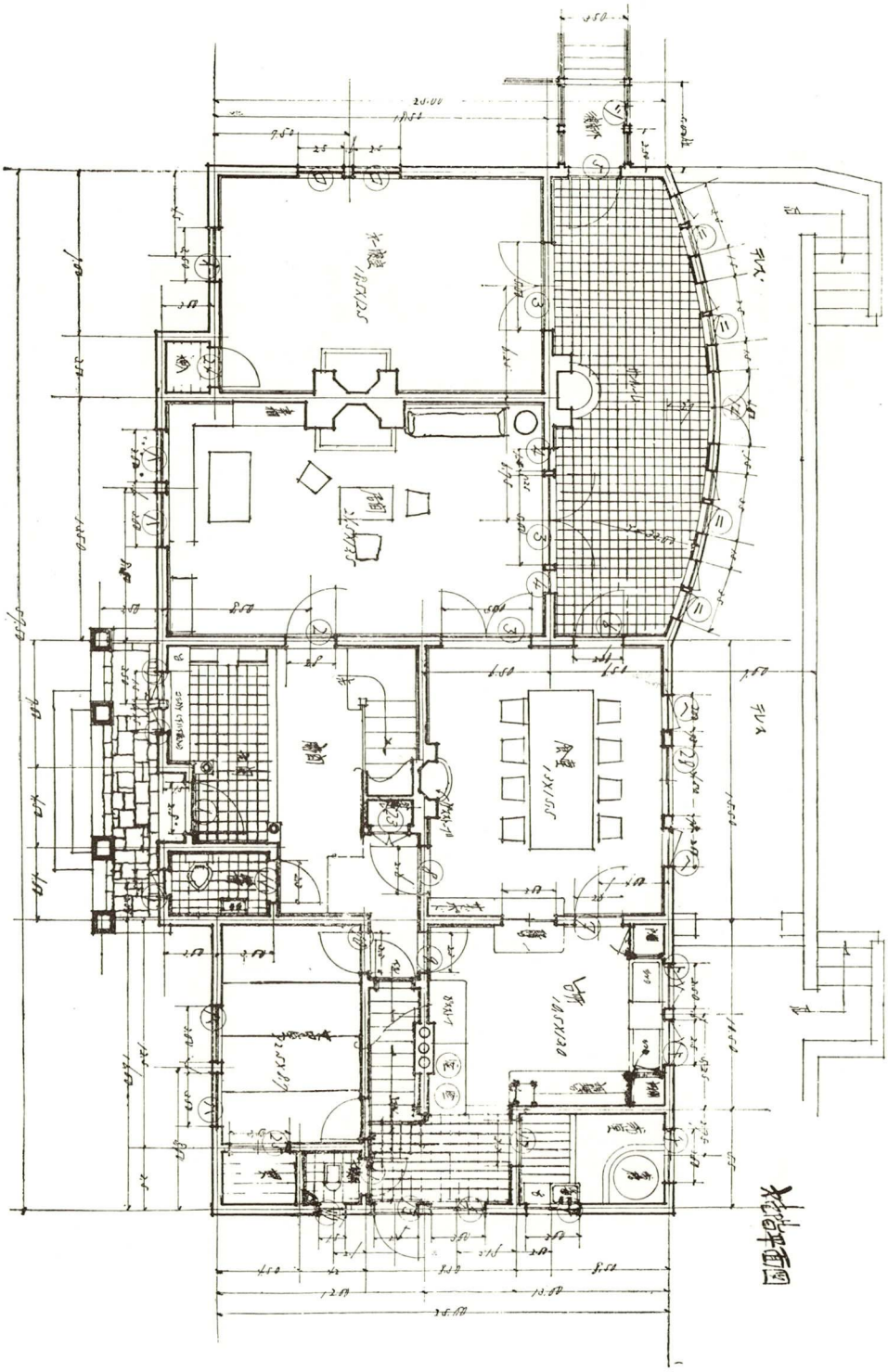
（一一五）『演舞場』（二一二）『舞臺意匠』（二一九——三二二）『或る建物』（四四）『活動寫眞館』（四六、四七）『須磨敬會』（四八　などの建築圖案を交へられてあつたが、是は、柊會員のお手のものとて、特殊な地境を示して居つた。

何にしても、斯うしたアマチュアながら眞劍味のある、そうして、中には、立派に玄人の墨を磨せる作物を我建築家の中に見ることは、ほんうに嬉しくて耐らない。どうぞ柊會に祝福ある前途あれ、と心綴に祈つて筆を擱く。

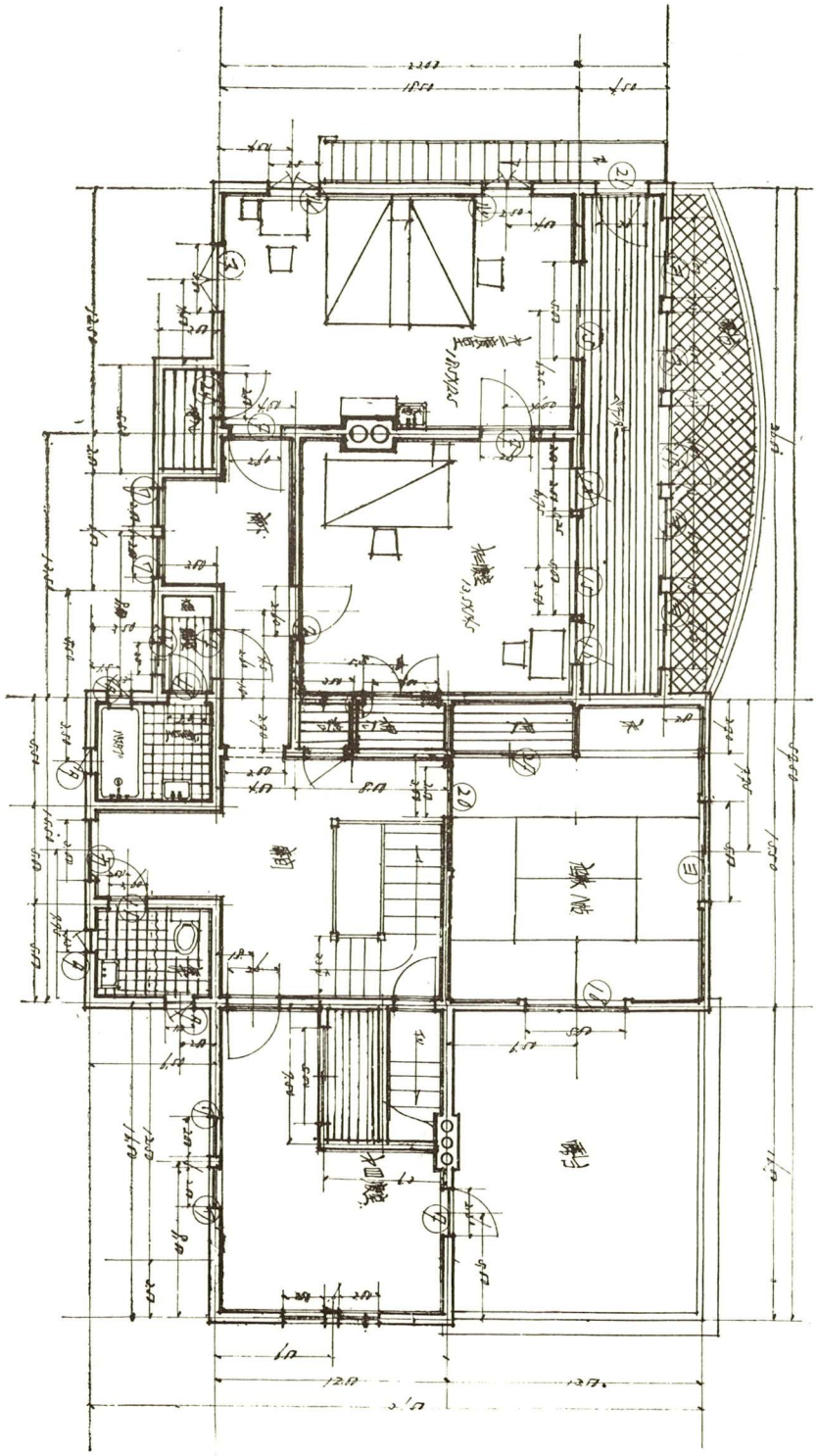
參照のために、出品目錄を左に併架して置く。

## 出品目錄

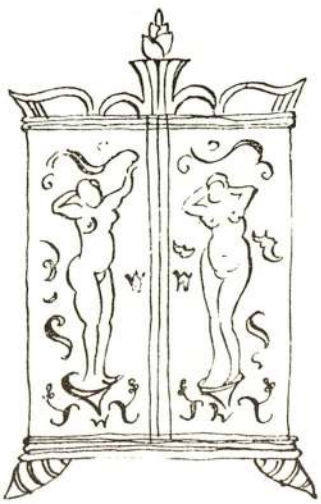
繪畫　會員　長谷部銳吉
（一）初夏　（二）靜物　（三）靜物
（四）少女　（五）花　（六）秋
建築　（七）震災記念堂の圖案　會員　伊藤　正文
繪畫　（八）紫陽花　（九）罌粟　（一〇）樹間秋日　（一一）野末　（一二）秋色　（一三）草原晩秋　（一四）小女習作
建築　（一五）美術學校　會員　川村種三郎
繪畫　（一六）靜物　（一七）風景　（一八）靜物　（一九）夜の靜物　其の一　其の二　會員　木村得三郎
繪畫　（二〇）寢顏　（二一）秋野
建築　（二二）演舞場　會員　古賀　鄕實
繪畫　（二三）窓際　（二四）秋晴　（二五）午過　（二六）秋　（二七）習作　會員　本野　精吾
繪畫　（二八）壺を含む靜物　其の一　其の二
建築　（二九）シング「谷陰」（舞臺意匠）（三〇）シュニッラー「臨終の假面」（舞臺意匠）（三一）ベリカン」（舞臺意匠）
（三二）谷崎潤一郎「その妹」（舞臺意匠）　會員　中牟田三治郎
繪畫　（三三）女學生（三四）風景（三五）彫塑（三六）爪切り（三七）レリーフ小品（三八）煉瓦試刻　會員　山崎萬壽夫
繪畫　（三九）初夏風景（四〇）晩秋風景（四一）森の朝（四二）冬の夕　會員　安井　武雄
繪畫　（四三）風景
建築　（四四）或る建物　會友　百木秀七郎
繪畫　（四五）無題　會友　中村　鎭
建築　（四六）第一學生館（活動寫眞館）（四七）第二學生館（活動寫眞館）　會友　矢木　英夫
繪畫　（四九）初冬池畔　（五〇）天竺牡丹　客員　小出　楢重
繪畫　（五一）裸女（ガッシュ）（五二）硝子畫　客員　大國　貞藏
彫塑　（五三）題未定　客員　齋藏　與里
繪畫　（五四）風景　（五五）花　客員　鶴丸梅太郎
繪畫　（五六）風景



案　私　宅　住
（2　の　二）



案　　私　　宅　　住
（３　の　二）



# 法隆寺雜感

菅田登美雄

汽車は今、中秋の朗かな日の午前奈良を過ぎ、法隆寺えと走つて居る。

郡山、大和小泉、法隆寺と何時も變らぬ車窓の眺め又一段と趣がある。此の邊本邦塔婆の粹を集めた感あり、初づ藥師寺の三重の塔、白鳳唯一の大作に恍惚として居る內に早や法起寺、法輪寺の三重の塔、飛鳥の昔を語り顏に聳ゆるかと思えば、次に御大法隆寺五重塔は遠く四隣を威壓し、古く飛鳥の物語を語るが如く立つて居る。

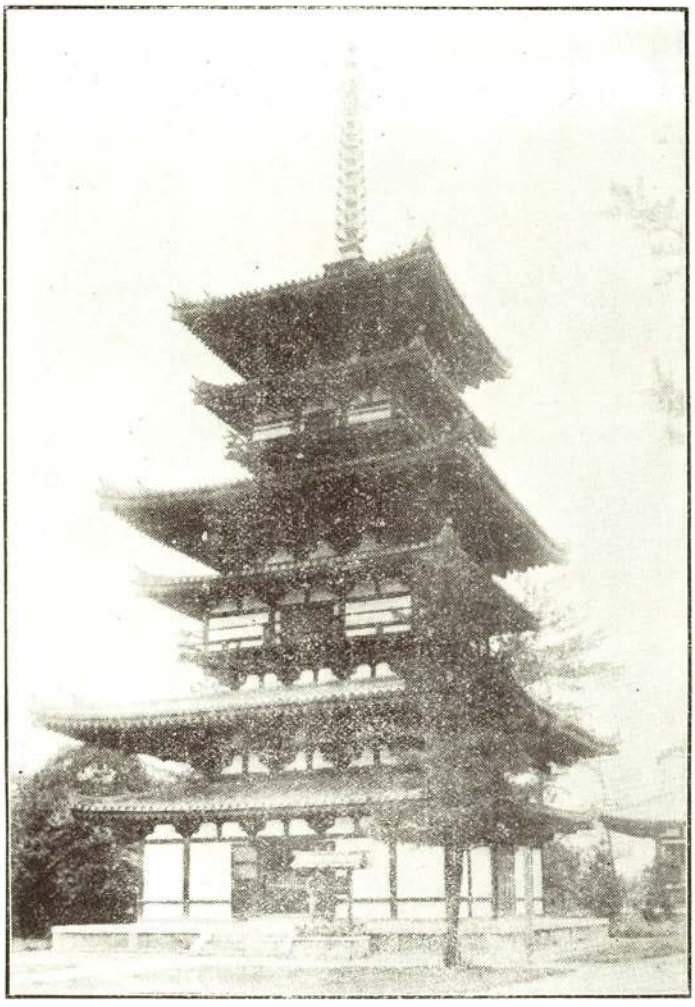
法隆寺驛で下車する、法隆寺行の乘合自動車があると云ふ事で急ぎ飛び込む。ブー、音を立てゝ靜かな田舍道を法隆寺へと飛ぶ。自分は法隆寺にはこれで丁度三度目で、何時も來る度毎に法隆寺驛を下車した時に感ずるのは、一種異樣の興奮である。なんだか行手が急がれる。初め小さく遠く見えて居た塔も、金堂の屋根も、講堂も、中門も、南大門も、刻一刻と大きく、近く、くつきりと、眼界に入つて來るのを覺える。車は何も妨害する物とては無い田舍道を二度三度曲つて轟音高く止る。止つた所は南大門の前。早速寺內に飛び込む。

南大門——室町時代（永享十一年の造立）と稱する。五線入の高塀も威儀正しく、すが〳〵しい空氣、何んだか氣が晴れ〳〵して肩の重荷が下りた樣な氣になる。がしかし、恐らくは何人と雖ども法隆寺に來て南大門で足を止める人は少なからう。若しこれが法隆寺以外の何處？例ねば少々郊外にあつたとしたら喜んであかず跳め入る人もあつたに違いないが法隆寺では少々桁が違ふ。南大門何ぞ取るに足らんや。目ざすは中門、金堂、五重塔と皆中に入つてしまふ。私しは此の點を南大門の爲には悲しむべき事と感じたが又一方、斯く迄勢んな法隆寺に對して如何許り感謝の意を表はした事だらう

中門。私しは再建、否再建の說はあるにせよ。法隆寺に就ては純飛鳥のものとして考へたい。

そのかみ、法隆學問寺、或は斑鳩寺、或は鵤寺、伊河留我寺、伊河留我本寺、伊我留我大寺、或は、鵤僧寺等と呼ばれた當法隆寺、歷史は長し、千數百年の久しき、興亡常ならず、荒廢した事もあつたらうが、何と云つても自分等が大古榮ねしそのものを只今現實に見得る誇り、喜びは何に例えられ樣か、世界最古の木

造建築物として、私しはあかず眺めたい
推古帝と聖徳太子の御建立、その目的は用明天皇の御宣福を祈るにあつた。
こんな事を、次から〳〵へと考へながら中門の前に佇んだ。四門三面の樓門正面に二戸を開く。誰れも云ふ事だが、プランが氣になる。正面の二戸の理由がわからなくなる。古今目錄鈔に『中門二階也、四間也、無二正面一者、聖人者不レ繼二子孫一之表幟也』と某大家もこの說を持つて居られた樣だ、又、或る人は、少々理論的に、構造上からしてこの四間三面が生じたとする。即、中央に門を取る以上は柱間は三間を要する。だが三間ではプロポーションが他と比べて悪い。では柱間を大きくしたらどうか？大きくすると木の性質として無理が出來る。そんなら何故五間にせなんだ？五間にすると柱間が狹少になりすぎるので斗拱がうまく納まらない。それでその中間を取つて四間にしたと云ふ構造上、外觀上より考へた說、又或は云ふ構造なんかはなれて寺院本來の目的に歸へれ、寺の本體は塔にあり、又當法隆寺では金堂に先考の宣福を祈る爲一の門は則ち金堂え他の門は則ち塔婆え、爲に二戸備へられたと議する人もある。が自分にはどれが正しいか悲しい哉斷案を下す事が出來ない。だが何んだか四間の中門が氣になつて頭を離れない。恐らく二王樣にでも特別の思召で伺へば御敎へ下さる事だらう。だが二王は昔の二王でも相も變らずの忠勤振り。和銅年間に造られて以來度々御化粧は變つたらうが、一寸の油斷もなく、四六時中の御勵、これあつてこそ法隆寺の安泰も得られたのか？

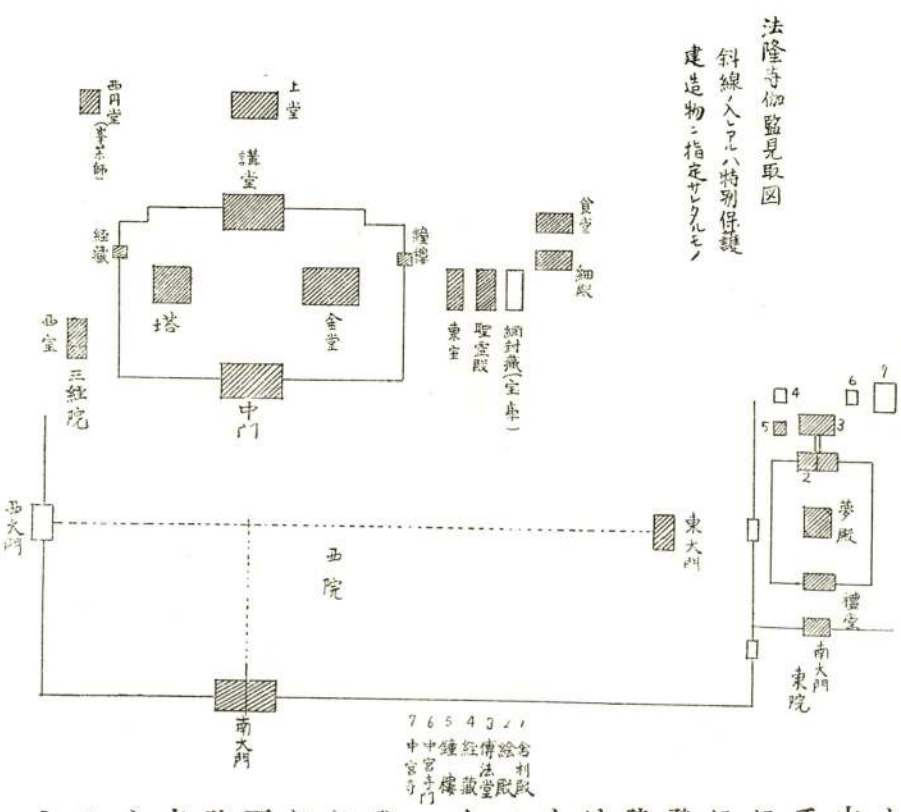


塔東寺二師藥

細部、內部から眺めると一入趣がある エンタシスある其の柱雲斗雲肘木の曲線の運用の工合それについいた廻廊。その簡明なやり方は何時見ても自分を無上に喜ばせる。で大體の細部は金堂。五重塔と等しい。
金堂、法隆寺の御大はなんと云つても金堂だらう。自分は先づ外部より觀察す

る事とする。

プランは五間四面重層で裳階があり、屋根は入母屋造で本瓦葺である、その金堂。次の馬鹿に高い二重の基壇の上に立つた金堂は日本建築中の權威でなくてなんだらう。その二重の基壇と云ふものも初めは人造石でござい。次に凝灰岩でござい、その凝灰岩も何だか、他の石に變りさうな今の世の中に、この金堂の千古異らぬ、容姿には唯々強き感動にしばし、言葉も發し得ない。日本建築史を飾るものは即これであるからだ、まづぼつぼつと考察する事とする。




二重の基壇、下のそれには束石あれど、上のにはこれを欠く。材料も下は花崗岩、上は砂岩？これは下の方は後世手に入れられた事を意味するものではなからうか？

プラン下層の五間四面に對し上層の三間三面その柱も上層、下層獨立した柱、これでこそ、金堂のプロポーションのよいのが伺ひ知られる。

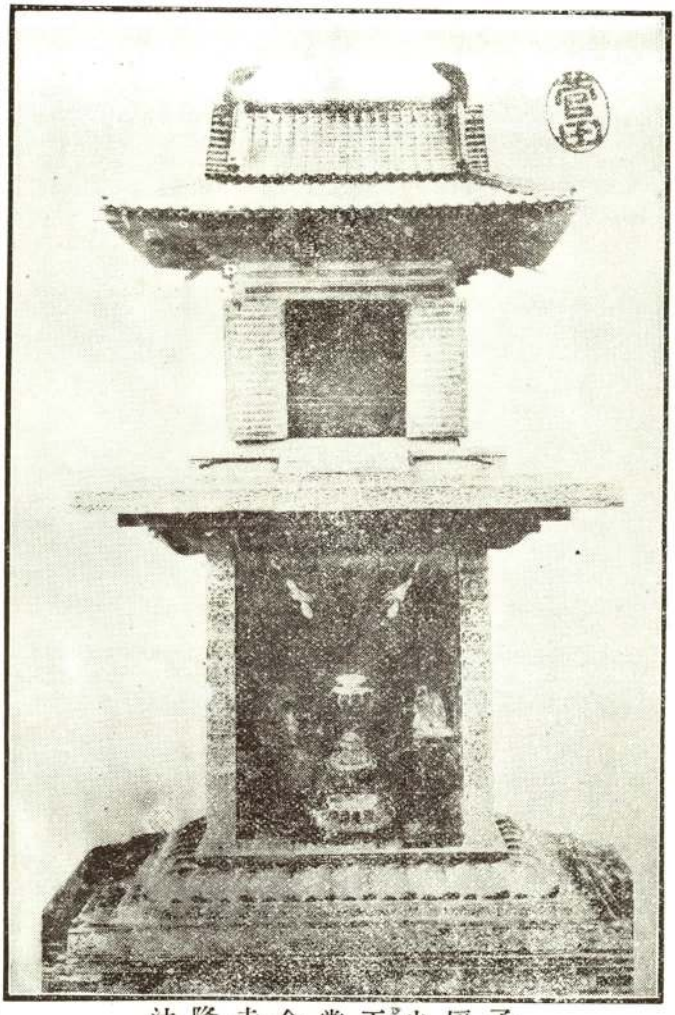
屋根、本瓦葺その勾配の善い事、實に氣持がよい。かゝの江戸？に附加した龍のぐる〳〵巻いた支柱と、その重たさうに附いて居る裳階。さては屋蓋高く二つ突出した避雷針なくもがなと思つた事一度ではない。恐らく誰れでもその感を起すに違いない。

だがしかし、雲斗、雲肘木の美、軒一軒その出の思ひ切つて深い事、さては例の卍字崩しの組子入りの高い勾欄、所謂飛鳥の特長を具備して豪もゆるかせにして居ない。

内部に入る、又觀察に忙しい。丁度、身體が特に眼が二三人分ほしい位。中秋の候とて壁畫も開かれる、藥師三尊、釋迦三尊、玉虫の厨子、すぐに目にうつる、私しは一人ゆつくりと三四回、金堂の中をぐる廻つて、何時しか時間のすぎるのも知らなかつた。

玉虫の厨子、金堂に入つて先づ第一に足を止めるのはなんと云つてもこの御厨子だらう。丁度、圖示の如く入口の所に

人待ち顔に控へて居る。案内の老人、何時誰れに教はつたか知らぬが恐らく參觀に來られる諸大家の御高説を棒暗記したものらしいあたかも立板に水式の爽かさ説明される人少時啞然の體だ。



法隆寺金堂玉虫厨子

推古帝の念持佛で橘寺から移して來たと云ふ歴史の所持者玉虫の厨子は上部の宮殿、中部の須彌壇、それに下部の臺座の三部に區別出來やう。其上部宮殿のやり方、金堂に似る所甚だ多い。その雲斗、雲肘木を使用して居る事、金堂と等しく、柱に皿斗の附いて居る事も又似て居る。鍍金の屋蓋その大棟の兩端には鴟尾を戴いて居る事、これから考へて當時法隆寺の金堂には最初鴟尾あり、その屋蓋も鍍金であつた事が想像される、且つ一方同時代の法輪寺には、鴟尾の斷片を藏し南都東大寺大佛殿(奈良時代)には鴟尾のある事からして、益々當時の有樣が推斷出來る。又例のやかましい忍冬模樣は須彌壇上下にある蓮片にある。臺座には龍の模樣がある。

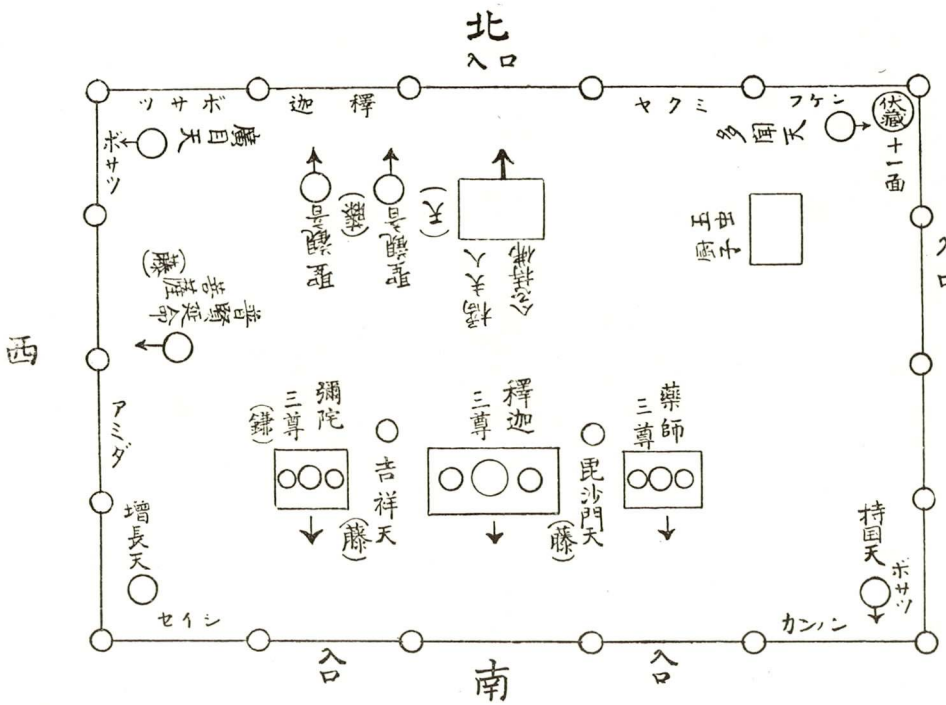
本邦工藝品の鼻祖、最大偉品、玉虫の厨子はあまりに人に知られ過ぎて居る。今又、愚生等の喋々を待たない、が『思ふ事云はざれば腹ふくるゝ業とか』自分の感想を述べる又一興だらう。

その他厨子の密陀繪、その透彫、金具等恐らくこの玉虫の厨子についての考察だけで悠に一大論文が出來やう。

藥師三尊次に眼のうつるのはこの方、元來金堂の御主人公として日光月光を兩脇に從へられ正面にどつしりと控へて居らつしやつた、佛樣。今では、釋迦三尊の爲に遠慮せられてか、少々隅の方に御座る。

藥師如來は、又、藥師瑠璃光如來——と申し奉る御方、金堂内安置の佛樣中で、恐らく一番の年より?でいらつしやる。

其の面相、一寸人間離れして、大きな長い耳が垂れ、その耳には孔がない事を手にした望遠鏡でかすかに見別けられる滅法界大きな光背、そのシンメトリカルな手法、しかも、襞の線の折れ曲る所等鋭く角をなして居る事等所謂北魏式と稱するものか?


北
入口
釋迦
ヤクミ
フケン
伏蔵十一面
入口
東
西
聖観音(藤)
聖観音(藥)
(天)
(藤)
(藤)
(藤

られる隣に、例の橘夫人念持佛及その御厨子がある。この橘夫人とは誰あらう。光明皇后の御母であり、同時に有名な橘諸兄の御母である、奈良朝の才媛、橘三千代、その人である。四天皇は四方を守り、問題の壁畫は、今尚例へ剝落甚しいにせよ、昔しの面影を漂はせて居る。で壁畫の題材大體次の様であるらしい。勿論異論はないでもないが、

東　壁　寶生淨土
西　壁　阿彌陀淨土
北壁(東)　藥師淨土
(西)　釋迦淨土

尚、各小壁には佛諸菩薩像を畫いて居る。

其の他、四天王本邦最古と稱せられる四天王ー東、持國天、南、增長天、西、廣目天、北、多聞天、その法にかなひ、鎌倉の見るから恐ろしい形を聯想して、この四天王の有様を見ると、一種變つた趣がある様に思はれる。

これやあれやを、次から次へと、頭に浮べながらー最後まで、ぐる〳〵金堂の中をまはりながらーはるか彼方過ぎにし推古の朝を夢みるのであつた。

終に金堂を出た。豫定の如くー(何時もそうであるが)ー豫定より遲れて、自分は今、五重塔の前に立つて居る。

五重塔、見れば見る程よいこの塔、飛鳥のその昔、何たるの工匠の業にや、そのプロポーション、その姿態、斯くもなしたる哉！と、嘆息するもの、又一人、自分許りではあるまい。どんな所が一體そんなに善いのだらうか？自分は考へたい。自分は思ふ。

先づ第一に、二重の基壇が善い。氣に入つた。フラン五層目の方二間に對して他の方三間も又與つて力がある。これでこそ、上部の輕快が保たれるのだ。これあつて初めて、五層の斗拱の納りの、工合が善いのだ、まだある。屋根の勾配緩い事、否それ以上にあの軒の出の多い事莊重な感が自然出て來る所以又こゝにある。その軒の出の、ジックザックな事即等差級數的なる事よくも又考へたりやと云はざるを得ない。まだある。相輪の恰好、塔との比、卽、全高の一〇〇に對して相輪の三〇なる、塔としてのプロポーション上又可なりと云ひたい。

だが、斯の様に感心して許り居ても、これが有が故に本邦建築の白眉として、囃される、ものとも考へられない。古い事も、その條件だらうが、又、その歷史その環境による、神祕の力とでも云ふべきものを忘れてはならない。恐らく、法隆寺の五重塔は、法隆寺にあつて、初めて、その美を發揮するもので、若しそれが他に在とすれば、例へ、その絶對値は變らないにしても、只今のそれより、受ける感より、より善い感を受ける事よもやあるまい。

無心の群雀、高らかに囀り、時々、ものす、その糞便の洗禮を受けた、その相輪、雲斗、さては雲肘木。思へばこれ、遠い古、飛鳥の朝より、濁世に超越として、何の變化もなく、浮世の興亡を見下しつゝ、來りたる、又何たる前古の果報ぞや。私しは、その長きを、祝福せざるを得ない氣持になつた。

塔内に入る。釋迦の事蹟を表はした塑像、和銅年間の作と稱せられて居る。その表はす所のもの、

東　維摩文殊問答
西　釋迦茶毘
南　彌勒淨土
北　釋迦涅槃

再び中門に立つ。所謂百濟式悉堂伽藍の配置、その左右に、食堂と、五重の塔婆、中央正面に講堂、鐘樓、經藏もあり

廻廊は中門の左右から出て、講堂の左右に終る。

時正に中秋の午後、空に一點の雲もなく、電車の音に、自働車の音に、驚く心配もない法隆學問寺内、のんびりした、氣持に恍惚として多時。

すき通つた空氣―これあるが爲に、世界最古と誇る事が出來たのだらう。聞く所に依ると大和、特に法隆寺附近在住の士人で、我國民病とも云はれる脚氣病に侵された者一人も無い由。これが事實とすると益々その依つて來る所がわかつた樣な思がする。

然し、或る學者は、法隆寺再建論を主張する。その根據とする所は、

書記に

『夏四月癸卯朔。壬申夜半之後、災◎法◎◎寺、一◎屋無餘◎大雨雷震』

又、七大寺年表に、

『和銅元年戊申、依詔造太宰府觀世音寺、又作法◎◎寺』

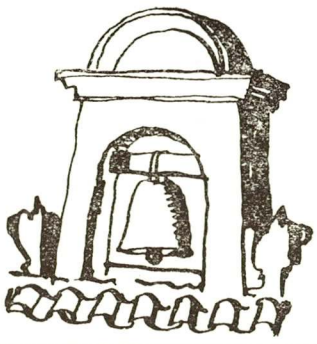
又、法隆寺に藏する記錄にも、その罹災の說を傳へて居る由これや、あれやから再建論者の主張が生れたのだ。

又一方、非再建論者の主張は又、一理ある、即關野博士の尺度說である。その主張とする所は大體次の樣である。

凡そ、尺度は時代々々に依り長短がある。飛鳥時代は高麗尺だつた。所が奈良時代唐尺が輸入された。でその唐尺には大小二種あつて勿論、飛鳥時代に使用した。高麗尺と異なつて居る。で、例の大化の改新に尺度も唐尺に改まつたが、當時も尙昔しの高麗尺を用ひて居た所もあつた樣だ。和銅の六年に全く唐制に擬へ全然、唐尺の大尺、小尺を用ひ高麗尺は全然放棄した。でこの高麗尺で、例の金堂を計つたらその結果は如何？殆んど完全な整數を得た。又各々材料を計つたら如何、高麗尺ならでは計り得ざる寸法がある。等々からして再建論に旗が擧げたくなる。がしかし前者は主として歷史家であり、文學者門の主張であり後者は建築家の主張である、自分は悲しい哉何と云つて善いかわからぬが。建築家として後者の說を固執した、まして、こんな立派な根據のある事なれば、これを主張する即これ我等の義務であるべきだ。

此の一文は協會の秋季大會に參加した時に特に感じたまゝを書き綴つたに過ぎない。だから自分の隨筆とも云へば云へ樣。（一四・一一・二〇）

×　×　×



# 大阪及び大阪人

北村兼子

大阪を開いた太閤さんのヤリ方は江戸ッ兒式で江戸を開いた東照權現は贅六式でスタートを切つた時には、こんな道へ出る筈はなかつたのであらう。それで太閤さんは中之島公園で東向いて欠伸をかみ殺してゐらつしやる。その前の浪花橋でも四頭の獅子が後合せに居眠つてゐる。

雪のないところ、花のないところ、月のないところ、月はあるにはあるが、かう烟がヒドくては。

ベニスの水郷、そこは糞尿の流れるところ、否、流れもあへず淀んでゐるところ、その汚い水で釣るところ、釣つたドロ臭い魚を食ふところ、コレラになるところ、防疫吏の忙しいところ、桃山病院に病床の不足するところ・火葬場の遠いところ。

ビルディング到るところに建つて、飛び〳〵に洋行した感じがある。官報の告示で大阪の人口二百十三萬二千六百人とある。その端數の二千六百人が新に出來た大阪ビルデイングに巢喰つて、丸ビルよりも一割狹いだけだと威ばつてゐるものあり、それだけが氣に喰はぬと憤慨する者あり。

樹木が煤烟で枯れる。よつて庭園がない。よつて息がつまる。よつて唾を吐きちらす。よつて肺癆科の醫者が多い。自動車の數では東京にまけるが、憚んながら死亡率ではヒケは取らねへ。

青は藍より出でゝ藍より青く、蠣は廣島から來て廣島で喰はうより咁い。鰻のつけ燒は京都に比べて味は劣るが。

潮地方局長から冷評かされた通り、一望千里五穀豊穰の農村を市に包容して、大大阪市中に小作爭議が起つたら、何が東洋のマンチエスターだ。三多摩を大東京に加へたら市中に野猿が啼く……それよりマシか。

ノツペリした顔、ネツチリした態度、ヅベリとした着もの、ネナ〳〵した談話ベタ〳〵した化粧、總てに於いて要領を得ないように見えて割合に實行力に豊んでゐる。市會でも議論が少くて妥協ばかりだが、社會施設も可なりに出來て、市政も割合に腐敗してゐない。砂利も食はない。見かけによらない。

電車のコミ合ふ街、いのちがけで飛び乘る人、幸福な人。乘れない人、氣の毒な人。ツリ革にブラ下る人、結構な人。腰掛けてゐる人、天國へ行つた人。車外へハミ出してブラ下る人、地獄のぞきの人。

情實によつて線路がヘシ曲つて、脚許のグラつく人、足をふむ人、ベラ棒めの人、喧嘩を吹く人、ウヤムヤに畢つて降りて行く人。

支那のボイコツト一番コタへる都市、關稅會議が氣にかゝる都市、日貨低制で

ポコペンの都市、鮮人勞働者に脅威せられる都市、太閤さんは朝鮮征伐、大阪人は朝鮮から征伐せられる。

山村流の舞は優しいがカッポレはダメ義太夫の咽では都々逸の聲が出ない。

斯瓦會社がホジくる。土木課がなほす電氣局がほる。土木課がなほす。電話局がほる。なほす。水道課なほす。下水道なほす。堀る。なほす。三度に一度はチト氣をつけておくんなはれ。道が歩けまつかいな。

雨には泥道から鮹もすくへさう。エッサッサと歩くことも出來ない。晴れてはコールタールが湧いて、木煉瓦が浮いた〳〵。

道路擴張で不等邊三角形の家、五角、七角、九角と多角形の家、ダイヤの家、中には間口七間、奥行半間といふのがある。

藏相の西下を迎へて御高說を拜聽する機關には商業會議所と銀行集會所とがある。

粗製なら名物の一つ、兩端にシンがあつて中間は木ばかりの鉛筆、石入りの白墨、穴のないボタン、糸の通らぬ針、デキ腐るインキ、發火せざる燐寸——これが眞正の安全燐寸。

大阪タクシーの强敵として圓タクが現はれ、その下をクグる半助タクも近く出來るさう、その次にボロタク會社、ガタタク合資會社も目論見書作製中と聞く。不正メートル會社も出來てプレミアムが付かう。

心ブラ黨たる者銀ブラに恐るゝ勿れ。銀座の賃貸價格が坪一圓四十錢に對する心齋橋のそれは一圓七十七錢だもの、履む上の値段から考へても資格が一枚上だ多いもの佛敎少いもの基督敎。藝妓より娼妓が多く。勞働者多くて學者が少い。高いもの天王寺の塔、安いもの取引所株、巾の利くのは絹糸より綿糸、もてるのは官吏、意張りたい人は大阪で知事となれで、大臣となつたら大阪の歡迎會に臨むがいゝ。次官でもいゝ。

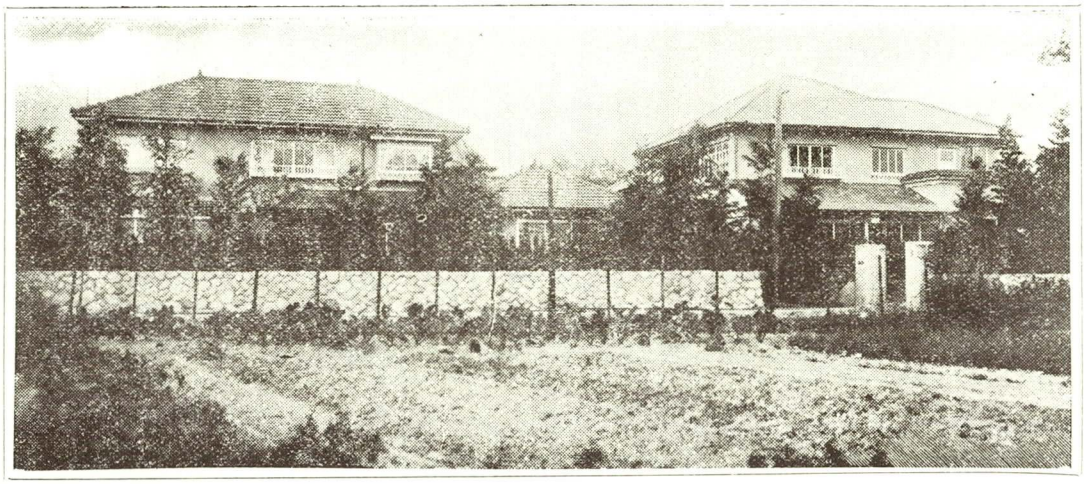
公園の晝は不良兒の跳梁するところ、夜は盜賊の集合するところ、時を選まぬ變態性慾者のうろつくところ。

關東煮が流行つて、蒟蒻や芋や蛸といふ女の好くはずのものを、筋肉勞働者が好んで食ふのが不思議、浪速の芦に不景氣の葉ずれの音たつようになつては、それさへ賣れない。

米高うして人痩せたりは天高うして馬肥えたりの誤植。

巡査は鹿兒島、高知より、林檎は北海道、青森より、娼妓は和歌山、德島より、女工は中國より、學生は九州より、下女は山陰より、小僧は江州と加賀より、學者は東京より、入口はコミ合ます。奥へ順々におつめ合はせを願ひます。（をはり）

×　×　×



# K・H兩氏の住宅

（口繪參照）

松本儀八

摩耶、六甲の翠巒を背にして、名だたる灘の藍潮に脚下を洗ふ茅海の邊り、『住吉』の高燥なる山の手を卜してK、H兩氏の住宅が、今年の春先から起工され、去る秋の初めにやつと竣工したのであつた。

住宅として格別に面白い出來榮へだとか又理想的な設備を整へた家だとか云ふ譯でもないが、今迄自分が手に掛けた多くの住宅の中でも、施主が住宅に對する要求とでも言はふか又考へとでも言はふか其處に一寸面白いと思つた所があるので、思はず筆を執る事にした。

## ◎隣同士に住宅を構へた

住宅は人間生活の容器であつて、心身の慰安所、休息所であると云ひ條、住宅周圍の關係が實際生活の閃きの上に影響する所が少くないと云ふ考へから、相理解し合つた家族同士が隣接して生活を營むと云ふ事は一層の意義ある事ではあるまいかと云ふ所から、そこに兩氏の意氣相投じて、敷地續きに之を試みた。そしてプライベートのコンヂションを除いて双方から相利用し、利用されようといふ事に力めた、夫れは庭木の植込みから一寸したものゝ注意に至るまでも。

## ◎深みのある生活を

見への建物でなくして深みのある生活を營み得る住宅、そして夫れは約り經濟的に!!と云ふ要求から、外觀の體裁と云ふよりも經費の容す範圍に於て內容の充實主義を濃厚に發揮してみた。

## ◎住宅は家族共用のもの

住宅は動もすれば客間本意でなくとも主人

や主婦の獨占主義に傾き易い弊がある。此處では主人の室も主婦の室も小供や老人の室も格別偏重せない事に力め度いと云ふのであつて、寧ろ家族全部で共用する居間、食堂、浴室、便所、と云つた樣な所にはより注意を施してみ度いと云ふのであつた。

### ◎台所は出來る丈け狹く

臺所必ずしも廣きが能でない。能る丈け狹くして作業能率を高める樣に仕向ける事が肝要だと云ふ事は今更でもないが、兩家庭共八九人の家族に對し臺所面積としては僅かに二坪弱を割愛し、而も立體的に使用する事に力めた。

### ◎造付けの家具にし度い

出來上つた室に次から次へと、いろんな家具を持込むよりも、始めから其室の用途、目的に依つて押入の一隅や壁の出隅入隅などを叮く利用して便利に家具の役目を仰せ付けたならば、どちらから考へても必ずや調法であらうと云ふので、所謂造付け家具を出來る丈け應用する事にした。

### ◎設備萬端當座的に

K、H兩邸共將來は兎に角、當時の家族の希望と要求とを滿し得る間取や、設備をしてみたい。そして趣味と境遇が段々變る毎に建替へるなり、改造するなりしよう。大體斯樣な希望や要求から出發されて出來上つたのである。

K氏の家の坪數は
- 階下三十四坪五合
- 階上二十五坪
- 外洗濯場三坪

延六十二坪五合

H氏の家は
- 階下四十六坪
- 階上二十三坪二五
- 外洗濯場物置三坪

延七十二坪二五

神無月風に紅葉の散る時は
そこはかとなくものぞかなしき



—創　作—

# 枯れゆく向日葵

和倉　泰

## 1

なんでもないんだのにと思ふと肚が立つた。自分が一寸立てばいゝんだのにと思ふと一層すなほになれない氣持だつた。向うにすれば、ま近くにゐるあなたが立てゆけばいゝぢやありませんか、そんなこと、今更ら言ふまでもないぢやありませんか、といふ肚であるに違ひなかつた。

女つて、こちらの考へてゐてやるよりも案外圖々しいもんだつていふ感じが、嫌や應なしに自分に強ゐられてゐるやうな氣持だつた。圖々しく構えるつていふよりは、生れつきがもう鈍感にできてゐるんだと、彼は呟うちした。

さういへば、なんだかかう、お産をしてから少し目立つて肉つきがよくなつた彼女が、そのからだつきの全躰にも、如何にも主婦らしい一種のさり氣ない落ち着きができて來たのが、彼にもわかつてゐた。この落ち着きといふ感じは、どちらかと言へば、家庭といふものゝ一種の溫かさを有つた。爽々しい、圓滿な感じであるには違ひなかつた。妻のその安心しきつたやうな健康さは、夫である彼にもある爽々しい心安さを覺えさせるのでもあつた。だから、彼だつて、いちがひに彼女が立派な主婦になつてくれるのに反對したいといふのではなかつた。立派に一人前の女らしい押しのきく女、どこの家庭へいつ出ていつたつてさう大したひけはとらないといふ程の女、主婦らしく手際のよいきてんのきく女、さういふ家庭的に圓滿な感じをもつた女になつてもらひたがつてゐたのは、彼も他の聰明な夫達と同じである筈であつたが、唯、彼は彼女が所謂世帶くさくなつてくれるのには、あたまから反對だつた。世帶くさくなるといふことは、世の妻といふ妻の、そこになんの熱意も感じることの能きない愚劣な常識であるにすぎないのだつた。

從つて、彼は自分達の家庭からは一切の常識的なものを、思ひきりよく拋り出してしまつて、ちつとも悔いやうとはし

なかつた。いつか、こどもの生れる二三ケ月前だつたか、長火鉢を一つ買ふ買はないの問題で、二人は昼中あはせに拗ねあつて寝てしまつたことがあつた。もとより、彼は長火鉢を買ひませうといふ彼女の言ひ出しを、自分でもすぎたと思ふ程頑強に拒んでしまつた。この自分があの一種冴えきらない長火鉢の前へ坐らなければならないなんて眞つ平らだと思つた。そんな世帶くさい常識は死んでも嫌やだと彼は言ひ張つてきかなかつた。それよりも彼は自分の妻が長火鉢の前へ坐り込む姿を考へるのがむしやうに嫌やだつた。まあ一休みなんかと、洗濯半ばの彼女がうつかり襷がけのまゝで、そこへ坐り込んでお茶を飲んだり、それへ肘でもついて居眠りでもされては大變だと思つた。海邊の散歩や郊外の果樹園のあたりや、時としては街の公會堂のコンサアトの休憩時間のひと時などで、誰にも秘められて育まれて來た二人の過去も、三疊の間の長火鉢にであつては、ひとたまりもない酷い幻滅だと思つた。俺が嫌やだから嫌だといふのがそんなにほしいかと、彼は彼女を責めた。えゝ、ほしいのほしくないのつていふより、實際あれが要るのよ、新しいのが今駄目なら、十五六圓も出せばちつともさうは見えない中古のいゝのが、二三日前この町の店にあるのを私みてをいた、あれならあなたも屹度買つてみやうつていふ氣持になるわ、と彼女はあくまでも主張した。ふん、中古の常識なんて眞つ平らだ、と彼は吐き出すやうに突つ離した。よほどほしかつたと見えて、彼女は、いくらあなたがお嫌ひでも、私が買つて下さいと言へばあなたが前に變らず私を愛してゐて下さるなら、默つて喜んで買つて下さる筈だ、とすでに涙ぐんだ。ふゝん、こどもだな、こんなこと位がそんなに哀しいか、お前こそ、俺を變らず愛してゐるんなら、俺の言ふことはよしどんなに嫌やなことだらうと、默つてきく筈だ、と彼は言つてしまつた。——水かけ論だつた。今更ら引けない意地だつた。馬鹿々々しいとはよく〳〵思ひ乍らも　早速にこちらから折れてゆくにしては、二人とも片意地になりすぎてゐた。今でもよくおぼえてゐるが、それからその翌日、彼はもう少時はどこへもゆけないからと、その初産に間もなかつた彼女を汽車で誘つて街まで出、立派に新しい長火鉢の買へたゞけの金を、意識して彼女の前に費つてみせた。といふのは、強ゐて高いので有名な料理屋で贅澤な食事をしたゝめた後、特等席におさまつて見たくもなかつた芝居を見たのである。する程でもないのに強ゐて理由づけて無念ばらしをした氣持、どうだ、俺の氣持にこれから逆らふなよとの、高飛車な和解だつた。

圖々しく落ち着きはらつてゐるのは、むしろ彼の方だつた自ら唇へまで動きあがつて來る苦笑を、ありまいな感じて揉み消してまはらなければならぬ弱さを意識してゐた。だが、彼は自分がさうであればある程、彼女のさうした同じやうな態度に苛立たしい反撥を感じてゐた。鈍いのなら鈍いでいゝも少し自ら鋭くならうと努力してくれなくちや助からないと思つた。

先刻からこれでもう三度目ぢやないかと苛立ち乍ら、彼はもう一度彼女を呼んだ。

井戸端では洗濯に夢中になつてゐるらしい水の音が聞えてゐた。あれだから全くちつとも聞えてゐないのかも知れないと彼は一寸考へた。が、じつとしんぼうしてゐることは能き

なかつた。

『母あちやん、先刻からあんなに呼んでゐるのが聞こえないか』と、つい大聲が出てしまつた。

たつた三間しかない家だ、こちらの聲が聞えぬ筈があるものかといふ意氣込みだつた。

水音がふと止んで、彼女が一度腰を伸ばして再びしやがみ直した氣配だつた。女の洗濯姿程醜いものはないといふのが彼の常からの意見だつた。

『何か言ひなすつたんですか。』と、ぼんやりしたとりつくろはない聲だつた。

『先刻からあんなに度々呼んでゐたのがわからないか。』と、彼は歯痒さに肚が立つて來てゐた。

『一生懸命、お洗濯をしてゐるんですもの。』

『だからさ、俺も一生懸命大きな聲で呼んでゐたんだ。』

彼女が顔を顰めたかも知れない、と彼は思つた。

『なんかご用なんですか。』と、聲はこちらの熱してゐる程にもなく冷たかつた。

返辭をしないで、彼は輕く下唇を噛んだ。早速には應じてやれない氣分の歪みだつた。

『なんでもなかつたんですか。』と、彼女は再び冷たかつた。

彼女がすでにすゝぎものを盥の中で搖り初めた音がした。

『陽子がこんなに泣いてゐるのがわからないか。』と、彼は追つかけた。

『一寸見さればいゝぢやありませんか。』

と、多分そのことだらうと思つてゐたといふ口吻だつた。

『俺が見てやつてすむものなら、こんなに大きな聲でお前を呼びはしない。お前でなければならないからお前を呼ぶんだお乳の時間ぢやないか。』

早速彼女があたふたと出て來てくれゝば、彼の氣持もそのまゝですむのだつた。

『今こんな急がしくしてゐるんですもの。』

と、何の奇もない返辭だつた。

當然のはなしだつた。そんなことはもとよりわかつてゐた遊んでゐるなら見てやつてくれといふつもりではなかつた。どんなに急がしくつても、こどもは見てやつてくれといふ意味だつた。急がしければ急がしいなりに、こどもは大事にしてやつてくれとの氣持だつた。仕事なんかは棄てゝをいてもこどもの要求の通りに動いてくれなければならないといふのだつた。

『そんな仕事、一寸位手を離したつていゝぢやないか。』

素直に立つて來てくれと彼は希つた。むしろ、自分の氣持を宥めるためだつた。

『もう少しですもの。今はどうあつても手は離せないんですもの。』と、彼女はすでにすゝぎものに熱中してゐた。

『手が離せないなんていふことがあるものか。どうあつたつて、今直ぐ來てくれ。』と、彼は例の癖でつい大聲を出してしまつた。

彼はついに立ち上つて井戸端の見える臺所口まで動いていつた。肚が立つてしやうがなかつた。彼女はやはり盥の前に曲み込んでゐた。この後姿が嫌やなんだと思つた。

『俺のかう言つてる氣持がわからないか。』

彼女はうしろも向かなかつた。

『そんなに大きな聲を出さなくつたつていゝぢやありませんか。私のこの氣持だつて知つて下さらなければ、私、なに一つ滿足にすることは能きないぢやありませんか。』

『そんなことなんかより、今の場合は陽子の方が大事だといふんだよ。そんなもの、五分や十分中止したつてどうなるつていふんぢやあるまい。陽子が今乳を求めてゐるつていふ氣持は今の絶對なんだ。もう五分も十分も、小さな赤ん坊をこのまゝ哀しませてをけないつていふんだ。一寸今その手をやめて五分間ばかり陽子をあやしてやつたうえで、又ゆつくり洗濯したらどうだい。それだけで赤ん坊は充分得心するんだ。』

『だから、あなたが少時あやしてゝ下さいつてお希ひしてゐるんぢやありませんか。』

『それが、俺では駄目だといふんだ、お乳が要るんだ。俺の仕事は今どんなことがあつたつて手を離すことは能きないんだ。』

『私の仕事だつて大事なんです。』

『お前は陽子を愛してゐないんだ。俺はそんな洗濯なんかに夢中になつてもらひたくはないんだ。たとへ、そこに火が燃えついてゐたつて、そんなものは棄てゝをいても、こどもに夢中になるやうな女が好きなんだ。お前はこどもが目の前で井戸の中へ落つこつたつて、まあまこのお洗濯をすませてからなんかと、圖々しくかまえてゐられる女なんだ。こどもよりは洗濯の方が大事だといふ女なんだ。そんな女は嫌ひだといふんだ。』

『そんな冷たい父うちやんは、私だつて嫌ひだといふんです。』

『勝手にしろ。實に不愉快だ！』

書きかけの原稿紙の何枚かを机の上から引つ摑むと、彼はそのまゝ荒つぽく表をあけて、戸外へ跳び出してしまつた。これでも俺達は仲のわるい方ぢやないらしいぞといふ感じが瞬間、彼の頭に來た。

こどもの泣き聲はまだ止んではゐなかつた。

さて、一歩戸外へ出てみると、ちつとも不愉快ぢやないつていふ感じだつた。自分の勢ひに吃驚させられたといふ氣持だつた。單純な俺といふ苦笑が來た。あのまゝ彼女がやつぱり洗濯を續けてゐるだらうか、それとも　早速とびあがつて陽子をあやしてゐるだらうか、どつちにしたつて、彼女の困つてゐるに違ひない樣子を面白がつてやりたい氣持になつたそのまゝ彼は裏へまつて　臺所の外へそつと立つてみた。平凡な夫であることに滿足しようとしてゐるのであつた。

## 2

平凡な諍ひと平凡な仲直りとがしばしば厭かずに繰り返されてゆくのだつた。これでも仲よくいつてる方だといふ彼等の肚の底の安易さが、一層二人をしば〳〵反撥させ、又直ちに相寄らせることになるのであつた。

食事の時彼女が話しかけてゐるのに彼が默つて返辭をしなかつたとか、たま〳〵彼が汽車で街へ出て約束の汽車で歸つて來ないとかすると、それだけ私を忘れてゐるんだと彼女が拋ねたり、俺が歸つて來てゐるのに喜んだ顏をして迎へなかつたとか、俺が呼んでゐるのに早速返辭をしなかつたとか言

つては、彼も彼女にかどを立てたりした。多くはかうした他愛のないものばかりだつたが、諍ひは殆んど毎日のことのやうに思はれたのだつた。事が些細なことであればある程、それが毎日のやうに繰り返へされ、二人を思ひの外の片意地にしたり、素直にしたりしてしまふのであつた。

時々、

『この四五日、喧嘩はしないわねえ。』と、彼女がふとした調子に言ひ出す時、

『ぢや、また今日あり喧嘩をするかな。』と、彼は笑ふのだつた。

『いつたいあなたは、嘩喧してゐる時としてゐない時と、どつちが私可愛いゝの。』

『さあ。どつちの時もかあいくもあるし、かあいくもないしだね。第一、女つて、うるさくつていけない。』

『さうでせうとも、どうせさうでせうとも。あなたは私なんかどうでもいゝのよ。』

『さうだとも。こんな女どうでもいゝんだ。こいつ、ひとつ思ひきり投げつけてやらなくつちや。』

彼が一歩近づくと、彼女は女學生のやうな聲をあげて、大袈裟に逃げ出すのだつた。そこで、踊つてゐるのか、摑み合ひをしてゐるのかわからない大騒ぎで、二人が座敷の中をきやつきやつと走り廻るのだつた。

月日がありふれたまゝに過ぎていつた。

## 3

陽子が追々大きくなるに連れて、彼の仕事の邪魔になるといふので、彼等は二階に二つの部室のある以前よりは少々大きな家に轉つてゐた。大きな音と人と建築物との渦である大市街から、汽車で二つ目の驛の近くの所謂郊外住宅地だつたので、附近に家もあまり混んではゐず、まだ大部分に田や畑が家の周圍をとりまいてゐるといふ靜けさだつた。後に少々小高い杜を負うて、同じやうな一軒建ての家が數軒並んで建つてゐるうちの一軒であつた。簡單な板塀で圍まれた數坪の庭があつた。朝顔が枯れ絲瓜が引き抜かれてしまつたあとには、今、向日葵とコスモスと葉鷄頭と秋海棠とが家のぐるりを飾つてゐるのだつた。向日葵は彼が他のものよりも好きなので、表の門を一寸はいつたとつかゝりに五六本を並べて咲かせたのであるが、表に向いた二階の窓際の机に凭つてゐる彼は、丁度その向日葵のま盛りを眞下に見下すことになるのだつた。どれもこれも思ひの外脊高く伸びてゐるが、一本で四つも五つもの花をつけてゐるのや唯一個大きなのをつけてゐるのがあつたりして、どれもこれもが一樣に、風にゆら〳〵その明るい頭を搖るのだつた。彼は仕事に厭きると、よく座薄圍を窓際に寄せて、ぼんやりと、その向日葵を下すのだつた。風が少し吹く日など、裏になり表になつてひら〳〵流れるそのまつ蒼な廣い葉を見てゐると、何故ともなく、周圍の單調に厭き易い彼の心が、一種の惡戲に滿足を得た感じで宥められるのだつた。時をり、後の杜で百舌が鋭く叫んだ。秋が長けたなあ、と思はせられる頃の或る日であつた。

彼女は今朝から氣分が勝れないと言つて、二階の八疊の間に伏せつてゐた。

この二階の八疊の間は、もと〳〵彼が自分の仕事の最中は

誰もあがつて來てはいけないといふ約束で、自分の仕事の部屋に使つてゐるのであつた。彼はそこで一日中の何時間かを兎も角も一人きりになつて、前からかゝつてゐた或る長い神學上の着述を完成させやうとしてゐたのであつた。

朝食をすませて彼が立ち上ると、陽子がすぐ彼のあとを追はうとするのが例であつた。

『父うちやんお勉強よ。』と、彼はいつものきまつた口吻で言はねばならないのだつた。

『父うちやん、おべんきよ?』と、素直に陽子が立ち控へるとき、

『陽つ子、母あちやんと遊びましよね。』と、母親がそれをひきとるのだつた。

『いやん、いやん、陽つ子もおべんきよ。父うちやんとおべんきよ。』と、陽子の氣嫌のよくない時は、

『陽つ子も少時おべんきよさせてやつて頂戴よ。ねね、陽つ子、父うちやんにね、久しぶりだから、ちこん(蓄音器)をかけて頂きましよね。』と、母親までが陽子の通りになるのだつた。

そこで、彼は自分一人であがるつてきかない陽子の手を引いて、よつたり、よつたり、階段をあがつて、さて、本居みどりのレコオドをかけて、少時を陽子と遊ばなければならないのだつた。彼が仕事に夢中になつてゐる時、こつとりこつとり輕い跫音がすると思つてゐると、あがるまでは注意してこつとりこつとりやつてゐた陽子が、さて、一番上の段まであがると、大急ぎで、わあああと叫んで、横側から彼にとびつくことがよくあつた。かうした時、彼は少時を陽子と遊んでやつたのち、いつも原稿紙のはしきれに『陽子をあげるべからず』と書いて、これを母あちやんに渡してお出でと言つて下ろすのだつた。

『陽つ子、ゆうびんね。』と、その紙片を大喜びで、またこつとりこつとり下りてゆく陽子がかあいくて、もう一度呼びとめて膝へ抱きあげることもしばしばあつたりした。

時々、この小さな跫音に似たしのび跫で、妻が、彼のそばへそつとあがつてくることがあつた。

『お邪魔?』と、微笑んで、彼女はきまつて机の上へ目を落すのだつた。

『陽つ子はどうしたのさ。』と、彼は片肘をついて、彼女の方へ向き直るのだつた。

『お隣りへ遊びにいつてるの。』

『年頃になつたんだねえ。』

二人はふと獨身者同志のやうにお互にそれとない魅力を感じ乍ら、笑ひあふのだつた。

もう陽子が數へ年で三つになつて、一人でお隣りへ遊びにゆく位になつたんだから、二人が家をもつてから、もう足かけ四年にもなるんだなと、しみじみとお互を瞶めあふことのある瞬間だつた。

少時をとりとめもなく遊んでしまふと、やがて、彼は原稿紙を一枚引き抜いて、『母あちやんをあげるべからず』と書いて、さて、

『これをね、陽つ子に渡してをいで。』と、笑ふのだつた。

『おやおや、ゆうびんを貰つてしまつた。』と、彼女はあまり不服でもなく下りてゆくのだつた。

時をり、彼の方から淋しくなつて下りてゆくと、彼女が縫物か編物をしてゐるそばで、陽子は一人ごと言ひ乍ら、向日ぼつこをしてゐたりした。わるくはない家庭らしさだと、思はないではゐられない心の和やぎだつた。

もう一ケ月も前から、彼女は健康がどうも勝れなかつた。一日中、寝るといふでもなく起きてゐるとでもないといふありまいな容態が、だらだらと續いてゐた。で、晝間床に就いてゐなければならぬ時は、階下の部室は淋しいし、暗らくもあるといふので、二階の彼の仕事部室に床をのべて、横になるのが癖になつてゐたのであつた。明るいといへばこの部室は南北ともに窓が大きくあいてゐたので、一番よく光線もはいるし、高いので眺望もきいたのであつた。

彼女が二階にあがつてくると、陽子も自然二階で走りまはることになるのであつた。

『閉口だ』と、彼は時々顔を顰めてみせたが、さて、外にどうするつていふ程でもないので、默つて机の前に坐つてゐることにしてゐたのであつた。

二階まで彼が運んだ食卓で、簡單な夕食をすませてしまふと、陽子が早速眠入つたあと、二人はあゝゝと伸びをしたいやうな氣持で、いよいよ二人きりになつたんだなといふ事實に、輕い喜びを感じやうとしてゐるありふれた自分自身に氣がつくのだつた。こんなのが夫婦つていふものかなあ、と自ら可笑しがつてやりたいやうな、なだらかな、とり繕はない氣持だつた。

『今日も亦なかつたんだろ?』と、彼はふと訊いてみた。

『えゝ。ほんとに、どうしたのかしら。』と、彼女は沈んで答へた。

『ぢや、今夜またやつてみるかな。』と、彼は早速立つて階下へ下り、石鹸や其他のものを西手にもつて來た。

『リスリンはもうないやうだから、今日は石鹸だよ。』と、彼は今まで原稿紙ののつてゐた机の上へ道具を並べた。

『あま戸を閉めて下さいな。今夜は風が酷いやうね。』と、彼女が弱々しい聲を出した。

『さうだな。又今夜中は嵐かも知れないな。』と、彼は立つて四枚のあま戸を繰つた。

東北の風が思ひの外激しかつた。杜では樹々の葉ずれの音がした。前一面の稻田は吹き伏せられて騒がしい音を立てゝゐた黑雲の足が早い流れのやうだつた。

石鹸箱に白湯をそゝいで、彼は二本の指先で石鹸をうすめ初めた。

彼女の徵候は姙娠の徵候とちつとも變つてゐないやうに見えてゐた。あるものがすでに三ケ月なかつた。食物がちつともおなかにたまつてくれなかつた。酸味の勝つたものがほしくなつてゐた。それに、今まではさう大して好きだといふのではなかつた。牛肉のすき燒きが、むしやうに食べたいと言ひ出したのであつた。が、困つたことには、默つて棄てゝをけば、五日でも、七日でも、通じがないことだつた。激しい腹痛が時々思ひ出したやうに來た。

十日ばかり前に來てくれた醫者は、その徵候はまだないやうです。腹がお弱いんでせうといつて、藥を置いて歸つていつたのであつた。頓服は早速きいてくれたが、それから後の毎日々々の藥は、反つて激しい吐氣を誘ふばかりだつた。通

じのつけやうがなくなつてしまつた。彼が灌腸をしてやらなければならないのだつた。

「あなた、私が嫌やにならないの。』と、ふと彼女はかう言つたかと思ふと、くるりと向ふを向いてしまつた。

淋しい世帶やつれの見透かされさうな姿だつた。

『たとへ嫌やになつたつて、どうもしやうがないぢやないか』と、彼は薄笑ひをして見せた。

俺自身もすでにいゝ加減生活ずれがしてしまつたのぢやないだらうかといふ感じがふとした。

『私、やつぱりさうらしいわ。今度は男の子だつたらいゝのにね。』と、彼女はふと違つたことを言つてみた。

三十グラムを二度、彼は彼女に灌腸してやつた。頑固な便秘なので、それから少時を待つたうえ、ゆつくりと階下へ下りて、便所へゆくのに充分間に合ふのだつた。

便所は椽側から三間ばかりの廊下を歩いた向ふにあつた。一歩先きへ立つた彼女に續いて彼が廊下へ出た時、棄てやうと思つて持つて來てゐた石鹸水の殘りが、激しい風にあふられて、冷たく腕の方へこぼれて來た。

『酷い風だなあ。』と、呟いて、彼は壁のまそばへしやがんで蠟燭を點けた。マツチ箱の上へ立てゝ風の當らぬ隅つこへ置き、彼はそこへじつとしやがんだまゝにゐた。

『お氣の毒ねえ』とぼんやりと、彼女は聲を投げた。

早くよくなつてくれねば全く困ると、彼はしみ〴〵思つたのであつた。

その翌朝、彼があま戸を繰つた時、第一に見たのは、昨夜の嵐に中途から折れてしまつた一本の向日葵だつた。無慘なみものだつた急いで下りて見ると、莖は經七八分なのが丁度花から一尺ばかりのところで折れてしまつてゐるのであつた計つてみると、花は掌一抔の長さにあまる大輪だつた。經七寸にもあまるだらうと思ふと、むら〳〵と惜しくなつてきたで、彼はそれをそこから折りとつて、せめてもの氣安めに、二階の窓からよく見える屋根の上へあげてみた。全一日中、そこにはきら〳〵と十月の陽の光が一面に當るのであつた。

二日三日、机から伸びて見下ろす彼の目には、屋根の上の向日葵ばかりが、一入きら〳〵と輝いてみえたのであつた。

數日後の朝、いよ〳〵近くの町の產婆に診察してもらふ氣になつた彼女が、俥に乘つて家を出やうとした時、陽子の手をひいてやつぱり町へ出やうとしてゐた彼が、ふとなんの氣なしに家の方を振り向いた時、灰に塗れたやうにうち萎れた向日葵が、陽の明るい屋根の上に見えたのであつた。

もう一人位はこどもがほしいものだと眞面目に考へ乍ら、彼は急いでゆく妻の俥のあとを、ぼんやりのつそりと、歩いていつたのであつた。

# 俳壇

## 溪舟選

### 夜寒

ポプラ並木星空更けて夜寒哉　てる穂
子等寝せて獨り物縫ふ夜寒哉　同
河口を出るごみ舟や夜寒の灯　六魚
部屋夜客煎薬の香の流れゐる　同
物置に炭挽く音も夜寒かな　朧月
袂さぐり〳〵門を出る夜寒哉　同
柳疎らに片側町や夜寒の灯　陽關
草山に月は出てゐる夜寒かな　同
湯戻りの夜店夜寒く通りけり　芹川
カンテラや夜寒の辻に菊を賣る　同
水楼を夜寒く下る微酔かな　牛歩
梅の影障子にありて夜寒かな　同
風に拍つ戸音いづらや夜寒き　波青
膝に猫夜寒く物をかきゐたり　同
夜寒さや楼脚をうつ水の音　牡丹精
はしけ迎ふ提灯や波止の夜寒き　同

寥松亭（二句）

夜寒し瀬音きゝつゝ酌みゐたり　蕃岫
空園に竹四五本の夜寒かな　同
壁隣り夜寒の機を鳴しけり　修三
川料理障子明るき夜寒かな　同
水甕に水汲みいるゝ夜寒かな　一峰
火ちろ〳〵夜寒の雨のごみ焼場　同
講果てて肩衣疊む夜寒かな　林子
山の尾の驛の灯見えて夜寒かな　同
僧訪へば栗燒いてゐる夜寒哉　方外
月細し夜寒の門の裸桐　同

夜語

送り出して戸締りをする夜寒哉　葩東
夜寒さに紛れぬ狸囃子かな　同

貧厨（二句）

蠟燭に物漬けてゐる夜寒かな　覆幟
鍋鳴らす夜寒の棚の鼠かな　同
夜寒し語りつゝ橋を火事戻り　懸魚
爐火哀へて酒醒むる夜寒かな　宏一作
來べき人も來ず寢てしまふ夜寒なる　蛙聲
夜寒さや裏木戸出づる小提灯　中徹
胴の間に押合うて寢たる夜寒哉　同

霜

かしま立つ晨の霜や杉の垣　懸魚
落葉焚くにまはりの霜はとけにけり　同
泊舟入江更けたる夜霜かな　六魚
日曇や霜冴ねて草野ひろ〳〵と　同
あけてある書室の窓や夜の霜　てる穂
霜どけの雫す桐の枯葉かな　同
庭木みな霜の中なる梅もどき　僧凝
大霜に簀たいたる夜市かな　同
家なりに影をのこして霜消ねて　牡丹精
藪の霜垣を斜めに大椿　同
屋根の霜日表とけて朝雀　九英
裸木の中の乾沼や草の霜　同
霜とけて凍て草の根の青み哉　觀堂
この樋いつも水乏しき石の霜　同
霜どけの菜をひく葱の隣り哉　神兒
籠の鳥ちつとも鳴ず霜の朝　蛙聲
霜どけの土肌黒し杉畠　朧月

### 俳句をつのる

（投稿を歓迎す）

◇課題『寒さ』『雑煮』各五句まで、別題別紙に認む

◇締切『十二月十八日』

◇届先　大阪市堂島ビルデイング三階　日本建築協會

# 文化俳句

溪舟

◎Hさんがいふ、

俳句なんてものは詰らないぢやありませんか？

予は反問す、

何うしてです？

何うしてと云つて、古臭いぢやありませんか。

あなたにはさう思へますか。

何んだか知らん、古臭いやうに感じられますよ、今の俳句と元祿の俳句を、ごちやごちやにして、それを列べてみても、恐らくどれが元祿なんだか、大正なんだか、とんと分らない位ぬぢやありませんか。

あなたにはさう思へますか。

思へますとも、少くとも私には。

しかし、自然は元祿でも大正でも、別に變つちやぬないでせう。俳句はやはり自然嘆詠ですから、双方似てゐるのは當然ですよ。

でも、世相人事がマルで違つてゐますよ。

違つてゐたら、違つてゐるやうに詠ぜられるがこれも當然なんですがね。

それに、何もかも同じやうだから、私達は俳句は嫌ひです。

それは、あなたはまだ本とうに俳句といふものが分らないからですよ。今の俳句だからと云つたつて、新しいものは新しいやうに、違つてきてゐるものは違つてゐるやうに詠んでゐますよ。

さうか知ら……ぢや、あなた、この部屋の模様を句に作つてみて下さい。五句でも十句でもいゝんですから。

◎Hさんのこの部屋は、全然文化的のものだつた。私は近來、他人の句を見てカレコレ云ふことだけは云ふが、さて作るとなると、マルで近年作句を怠つてゐるので、忽ちハタと行詰つて頭を掻いてしまつた。

◎だが、兎に角、理屈を云つた責任上、何か責塞げでも五句か七句か作らればならない場合になつた。口は災の門、今更芭蕉翁の「口あけば五ぞうのみゆるあけみ哉」が思ひ出される次第である。

◎私は、泣出しさうな顔をして、きよろきよろ部屋の中を見廻した。

青磁色のカアテンに秋の日ざし哉

まづこの一句、まづい寫生だなと思ひながら紙に書いてHさんにみせる。

◎Hさんはいふ、

なアるほど、斯ういへば元祿の句とは少々違ふやうだ、上出來々々、直ぐもう一句やつてみて下さい。

◎上出來々々に恐縮した私は、すぐもう一つ矢繼早に出す

梨むいて浸たせる銀の器かな

何んでもかんでも、こんな時は寫生でゆくより外はないと思つたので續々やる、

秋の薔薇ピアノの上の玻璃の壺

木炭紙針打つてある秋の蝶

窓に晴る〳〵摩耶六甲や小六月

おつとちよつと待つた、この「小六月」といふのはをかしい、秋を六月とは變ですれ」

とHさん——

いや、小六月といふのは小春の異名で、秋の末冬の初めあたりの、春めいた時候をいふのですよ。「十月小春梅蕾綻」です。

と私——

それにしても、これは文化の句ぢやありませんよこんなのが元祿の……

いけません、いけません、元祿だつて大正だつて、自然に違ひがないのですから、斯ういふより外はありません。

◎それからまた三四句、

卓の上のダリアの鉢や掛鏡

秋の雲寫るや壁の掛鏡

鵙鳴くや丸籠のインコ靜もりて

アルバムに挟む銀杏の一と葉哉

菊の香のこゝまで椽の籐椅子哉

ちよつと待つた、とHさん

菊の香が實際こゝまで來たかれ、あの菊とこゝとでは七八間も離れてゐるんですぜ、君の鼻のヒシカンなのには驚くなア、

いや、さう嚴重に云ふ必要ないんです、こゝまで來たと感じたら、さう云つて差支へはない筈です。

窓の畫木扉の香にひたりひめ

これはいゝ、實際木扉が匂つてくるんだから、これは無難々々——上等々々、

とHさんは嬉しがつた。

◎更に二三句、

夜寒さの此頃を裸婦の塑像哉

この塑像は書棚の横にあつた。

置時計のチクタクも侘し秋の聲

この時計はチイク材の細高い丸卓の上にあつた。

秋風のきて吹く書架の帷り哉

# 主要建築材料値段

◎耐火リノリウム
市内施工
大阪耐火リノリーウム會社
チョコレート色 四分仕上坪 八、五〇〇
褐色同同 八、五〇〇
赤色同同 九、〇〇〇
青色同同 三、〇一〇
マグネシアセメント市内倉庫渡し 九五、〇〇〇
ドロマイトプラスター同 八、〇〇〇
一號品 一タル四切半 七、〇〇〇
三號品同 中
ストロブロック(模造天然石)工事 八五
寒水石大理石類 尺坪 一、三〇〇
花崗石類同 一、一〇〇
防水劑ポースイ 一、五〇〇
三封度入 二、三二〇
五封度入 三、〇〇〇
四〇封度入

◎リノリユーム 英國チーアン製
奥村重兵衛商店
巾六呎 長九〇呎(十五坪巻) 一、九ミリ 一坪ニ付 七、八〇〇
X 二、二同 同 八、六五〇
E 三、〇同 同 三、四〇〇
B
寸法 巾三呎 長六呎 巾四呎 長九呎 巾四呎 長八呎

◎ウオールボード
英國ゼームス純製
一坪 四、二〇〇

◎メタルラス(和製)
廿六番 巾二呎長六呎 一枚 〇、四八〇
廿四番 巾六呎長六呎 同 〇、五五〇
廿番 巾三呎六呎 同 三、〇〇〇
十八番 巾三呎長六呎 同 三、八〇〇
十三番 巾五呎長六呎 同 四、八〇〇

◎壁紙
英國製 巾一尺七寸 長三十六尺(張上約一坪五合) 一巻 一、〇〇〇以上各種
米國製 巾一尺五寸 長五十三尺(張上約二坪) 一、二〇〇以上各種
張手間 一坪 一四四十錢以上

◎金屬天井
材料 蛇腹 逃板付 一坪 三、〇〇以上
同 逃板ナシ 同 一〇、〇同
張工貸 同 二、〇〇同

◎日の出印便利瓦
日本建築紙工 大阪出張所
半號 巾三尺二寸 附屬品及 長七十二尺 ペイント添 一四、五〇〇
一號 一巻 同 一七、五〇〇
二號 一巻 同 二三、五〇〇
三號 一巻 同 二五、五〇〇

◎鶴印便利瓦
半號 一巻 巾三尺二寸 附屬品及 長七十二尺 ペイント添 三五、五〇〇
一號同同同 三五、五〇〇
二號同同同 八、五〇〇
三號同同同 三、三〇〇

◎日の出印砂付便利瓦
半號 一巻 三尺一寸 長七十二尺 附屬品及 ペイント添 一八、〇〇〇
一號同同同 九、〇〇〇
二號同同同 三、三〇〇
三號同同同 七、〇〇〇

◎日の出印建築用紙 ビルヂングペーパー
一號 一巻 巾三尺二寸 長七十二尺 三、〇〇〇
二號同同 四、一〇〇
三號同同 五、三〇〇

◎日の出印パーマネントルーフ井ング
一號 巾三尺長三十六尺 坪 三十六尺平方尺 七、〇〇〇
ヲ以テ一巻トス

◎日の出印衛生疊下用紙
一號 一巻 巾三尺二寸 長七十二尺 三、七〇〇
二號同同 四、四〇〇

◎日の出印瀝靑(モスパーヒール)
一號 一枚 巾二尺八寸 長三尺二寸 一、二五〇
二號 一枚 同 一、〇〇〇
三號同同 一、二五〇

◎日の出印アスファルトフエルト
一號 一巻 巾三尺二寸 長七十二尺 三、一〇〇
二號同同 四、二〇〇
三號同同 五、二五〇

◎スレート
淺野スレート販賣株式會社

◎波形板
長 巾 一枚單價 一枚單價
荷造ナシ 荷造共
六尺 二尺二寸 三、二九〇 三、三五〇
七尺 二尺二寸 三、三五〇 三、三五〇

◎大平板
長 巾 厚
六尺 三尺 一分五 同 二、三五〇 二、三五〇
同 同 二分 二、五〇〇 三、〇〇〇

◎同波形附屬品 ゴム座付 長三吋 丸額釘 同三吋 〇、二五 〇、三五

スレート角板
大サ 白又ハ黒 董 赤 青
淡黒 一六吋 一、二一〇 一、三五〇 三、〇〇〇
一二吋 一、一五〇 一、一五三 一、九五三
八吋 〇、九五 一、〇五三 一、六五三
〇、七五

◎石綿スレート
石綿スレート株式會社大阪支店
淺野スレート販賣株式會社
金剛商會
野澤幸三郎商店

| | 十六吋角 | 一枚 | 〇、三一〇 | 〇、三七〇 | 〇、四八〇 | 〇、五九〇 | 〇、七三〇 | 〇、八八〇 | 〇、九九〇 | 一、一〇〇 | 一、二一〇 | 一、三二〇 | 一、四三〇 | 一、五四〇 | 一、六五〇 | 一、七六〇 | 一、八七〇 | 一、九八〇 | 二、〇九〇 | 二、二〇〇 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 灰白色 | 十二吋同 | 同 | 〇、二三〇 | 〇、二八〇 | 〇、三六〇 | 〇、四五〇 | 〇、五五〇 | 〇、六七〇 | 〇、七三〇 | 〇、八二〇 | 〇、九一〇 | 一、〇〇〇 | 一、一〇〇 | 一、二〇〇 | 一、三〇〇 | 一、四〇〇 | 一、五〇〇 | 一、六〇〇 | 一、七〇〇 | 一、八〇〇 |
| 淡黒色 | 十吋同 | 同 | 〇、二三〇 | 〇、二八〇 | 〇、三六〇 | 〇、四五〇 | 〇、五五〇 | 〇、六七〇 | 〇、七三〇 | 〇、八二〇 | 〇、九一〇 | 一、〇〇〇 | 一、一〇〇 | 一、二〇〇 | 一、三〇〇 | 一、四〇〇 | 一、五〇〇 | 一、六〇〇 | 一、七〇〇 | 一、八〇〇 |
| 灰黒色 | 十二吋同 | 同 | 〇、二三〇 | 〇、二八〇 | 〇、三六〇 | 〇、四五〇 | 〇、五五〇 | 〇、六七〇 | 〇、七三〇 | 〇、八二〇 | 〇、九一〇 | 一、〇〇〇 | 一、一〇〇 | 一、二〇〇 | 一、三〇〇 | 一、四〇〇 | 一、五〇〇 | 一、六〇〇 | 一、七〇〇 | 一、八〇〇 |
| 董色 | 十二吋同 | 同 | 〇、二三〇 | 〇、二八〇 | 〇、三六〇 | 〇、四五〇 | 〇、五五〇 | 〇、六七〇 | 〇、七三〇 | 〇、八二〇 | 〇、九一〇 | 一、〇〇〇 | 一、一〇〇 | 一、二〇〇 | 一、三〇〇 | 一、四〇〇 | 一、五〇〇 | 一、六〇〇 | 一、七〇〇 | 一、八〇〇 |
| 赤色 | 十二吋同 | 同 | 〇、二三〇 | 〇、二八〇 | 〇、三六〇 | 〇、四五〇 | 〇、五五〇 | 〇、六七〇 | 〇、七三〇 | 〇、八二〇 | 〇、九一〇 | 一、〇〇〇 | 一、一〇〇 | 一、二〇〇 | 一、三〇〇 | 一、四〇〇 | 一、五〇〇 | 一、六〇〇 | 一、七〇〇 | 一、八〇〇 |
| 綠色 | 十二吋同 | 同 | 〇、二三〇 | 〇、二八〇 | 〇、三六〇 | 〇、四五〇 | 〇、五五〇 | 〇、六七〇 | 〇、七三〇 | 〇、八二〇 | 〇、九一〇 | 一、〇〇〇 | 一、一〇〇 | 一、二〇〇 | 一、三〇〇 | 一、四〇〇 | 一、五〇〇 | 一、六〇〇 | 一、七〇〇 | 一、八〇〇 |

◎葺上標準値段
(一號アスファルトフエルト下葺)
(銅鉄、亞鉛鍍鐵釘使用手間賃共)
◎菱形葺(網目葺) 十六吋角使用
重ヲ 灰白淡黒 黒 董 赤 綠
二吋半 七〇〇 七五〇 七七〇 八一〇 九六〇

◉同　上　十二吋角使用
二吋半　八、三五　八、九〇　九、〇五　九、五七　一一、二四

◎**一文字葺**（十六吋角二ッ切使用）

| 色合 | 葺足五寸 | 五分葺足五寸 |
|---|---|---|
| 灰白、淡黒色 | 一〇、六〇 | 一一、七〇 |
| 灰黒色 | 一一、八〇 | 一二、八〇 |
| 薫色 | 一二、八三 | 一三、〇八 |
| 赤色 | 一三、五七 | 一三、九〇 |
| 緑色 | 一四、九五 | 一六、六五 |

◎**石綿盤葺上標準値段**

（一面坪單價）
野澤幸三郎商店
網目葺（菱形）ノエルト一號品敷込材料
間儀共

| 色合 | 十六吋角重二重 | 十二吋八吋重二重 |
|---|---|---|
| 寸法 | 吋半二吋 | 吋半二吋 |
| 灰白色 | 六、九〇 | 七、四〇 |
| 淡黒色 | 七、五〇 | 八、二〇 |
| 黒色 | 七、五〇 | 八、二〇 |
| 薫色 | 七、七〇 | 八、三〇 |
| 赤色 | 八、一〇 | 八、八〇 |
| 緑色 | 九、六〇 | 一〇、三〇 |

◎**ロツコー瓦葺上標準値段**

（阪神間ニテ）
平瓦各號共一尺一寸角葺足九寸
一坪約四十三枚葺、軒先及鰹羽棟
伏等道具瓦完備

| | | |
|---|---|---|
| 灰白色、黒色、薫色、赤色共フエルト敷込 | 一面坪ニツキ | 八、五〇 |
| 棟駄斗二段半圓形伏 | 一間 | 三、七〇 |
| 同　同　箱歴振伏 | 同 | 五、八〇 |
| 駄斗一段積 | 同 | 七、五〇 |
| 緑色ハ三割高 | | |

◎**亞鉛引平鐵板**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 月星印30 | （米一） | 一、二四 | 円 | |
| タヒ印30 | （米一） | 一、二二 | 品切 | |
| 犬印30 | （米一） | 一、二二 | 品切 | |
| 三星印30 | （米一） | 一、三三 | 品切 | |
| 太陽印30 | （米一） | 一、三三 | 品切 | |
| エビ印30 | （米二） | 一、三〇 | 品切 | |
| 船印30 | （米二） | 一、九一 | 品切 | |
| 月星錨印30 | （米二） | 一、三〇 | 品切 | |
| 山星印30 | （米二） | 一、三〇 | 品切 | |
| 五寸切レ | （米板） | 一、二四 | 品切 | |
| 蝶印30 | （英一） | 一、三三 | 品切 | |
| ラクダ印30 | （英一） | 一、九一 | 品切 | |
| 地球印30 | （英一） | 一、九一 | 品切 | |
| 赤丸一印30 | （英一） | 一、九一 | 品切 | |
| 桃印30 | （英二） | 一、七一 | 品切 | |
| 首印30 | （英二） | 一、九〇 | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| #18 | 一級品 | 百斤ニ付 | |
| #26 | 一級品 | | |
| #24 | 一級品 | | |
| #22 | 一級品 | | |

◎**同浪板**　同店

| | | | |
|---|---|---|---|
| #30 | 六尺 | 〇、九八 | |
| #30 | 七尺 | 一、〇六 | |
| #30 | 八尺 | 一、一五 | |

各參錢上り

| | | | |
|---|---|---|---|
| #30 | 六尺 | 一、三三 | |
| #28 | 七尺 | 一、五〇 | |
| #28 | 八尺 | 一、七〇 | |
| #26 | 各尺 | 一、七〇 | |
| #24 | 百斤ニ付 | 一、六五 | |

◎**鋼瓦板**　巾一尺　長一尺二寸

| | | |
|---|---|---|
| 名稱 | 一枚目付 | 井筒政藏商店（大阪）薄增値 |
| 自拾二代 | 一二〇匁 | 單價和 |
| 至八代 | 八〇匁 | 建値 |

百斤ニ付

| | | | |
|---|---|---|---|
| 七代 | 七〇匁 | 三、〇〇 | （三、一〇） |
| 六代 | 六〇匁 | 四、〇〇 | 三、七〇 |
| 五代 | 五〇匁 | 八、一〇 | 七、〇〇 |
| 四代 | 四〇匁 | 六、〇〇 | 八、六〇 |
| 三代 | 三〇匁 | 三、〇〇 | 八、九〇 |
| 二代 | 二〇匁 | 四、〇〇 | 九、五〇 |

◎**パイプ**

金剛商會大阪支店

| 内經 | 厚 | 長 | 價格 | |
|---|---|---|---|---|
| 二吋 | 四分ノ一吋 | 六呎 | 一、七〇〇 | 一、八〇〇 |
| 二時半 | 同 | 同 | 二、〇〇〇 | 二、一〇〇 |
| 三吋 | 同 | 十六分ノ五吋 | 二、五〇〇 | 二、六〇〇 |
| 三吋半 | 同 | 八分ノ三吋 | 三、五〇〇 | 三、六〇〇 |
| 四吋 | 同 | 同 | 四、三〇〇 | 四、五〇〇 |
| 五吋 | 同 | 同 | 七、〇〇〇 | |
| 六吋 | 同 | 二分ノ一吋 | | |

◎**金剛板**　巾三尺　長六尺　一枚ニ付

| 厚サ | 重量 | 円 |
|---|---|---|
| 二分 | 五貫二五 | 三、二〇〇 |
| 三分 | 七貫五〇 | 五、二五〇 |
| 四分 | 一〇貫五〇 | 七、五〇〇 |
| 五分 | 一二貫七五 | 九、七五〇 |
| 六分 | 一五貫〇〇 | 一二、五〇〇 |

◎**塗料**

日本ペイント製造株式會社
大阪營業所

| | | |
|---|---|---|
| シンクペイントA印 | 一二瓩半 | 九、九〇〇 |
| 白鉛ペイント | 同 | 一〇、一五〇 |
| 同 | 同 | 八、三五〇 |
| 光明丹 | 同 | 一四、〇五〇 |
| 同 | 同 | 一一、五〇〇 |
| ボイル油 | 一六瓩 | 一四、〇五〇 |
| 同 | 一哦 | 六、五〇〇 |
| コーパルワニス | | |
| ゴールドサイス | | |
| 建築用特種塗料 | | |
| 調合ペイント白色上塗 | 六〇磅 | 三、〇〇〇 |
| 同　白色下塗 | 同 | 一六、〇〇〇 |
| 上各色 | 同時々引合 | 一四、二〇〇 |
| 光澤塗料（プライド） | 一〇〇磅 | 七、一〇〇 |
| 水性壁塗料（メロニア） | 四〇〇磅 | 一六、五〇〇 |
| 亞鉛松用トタンペイント | 三〇瓩 | 一六、五〇〇 |
| 暖房塗料 | 一立 | 三、五〇〇 |

| | | |
|---|---|---|
| スパーワニス（耐水性） | 一哦 | 六、〇五〇 |
| 金屬磨（コウミヨー） | 大罐 | 三、五〇〇 |
| コンクリートペイント | 三〇瓩 | 三、〇〇〇 |
| パテ | 七〇磅 | 四、九五〇 |

大東塗料株式會社
大阪營業所

| 品名 | 容量 | 定價 |
|---|---|---|
| グラファイト | 五〇ポンド入 | 三四、〇〇〇 |
| ペイント各色 | | |
| セクロン | | |
| 乙種黒色 | 五〇ポンド入 | 七、〇一〇 |
| 特製黒色 | 同 | 一八、〇〇〇 |
| ネヅネ色 | 同 | 三三、〇〇〇 |
| 銅及赤色 | 同 | 三〇、〇〇〇 |
| 木管用黒色 | 同 | 五〇、〇〇〇 |
| 不二水性 | 五〇ポンド入 | 二一、〇〇〇 |
| ペイント | | |
| 各色共 | | |
| 大阪及東京渡値段 | | |

田中源太郎商店

| 性質 | 品名 | 種類 |
|---|---|---|
| 水性、壁、塗料 | アラバスチン | 白 |
| 容器 | 單價 | 三、〇〇 |
| 五封度入 | 各 | 三、五〇 |
| 同 | 色 | 四〇ヨリ |
| 同 | | 一、五〇迄 |

| 性質 | 品名 | 種類 |
|---|---|---|
| 艶消ペンキ | 赤三角又ハ紅葉印サテン艶消ペンキ | 各色 |
| 容器 | 單價 | |
| 一ガロン入 | | 一、五〇〇 |
| ジンクペンワンダー用ホワイト | 外部用 | 白 |

同　一ガロン入　紅葉印コーパルバニシ　一ガロン入　六、五五〇
同　ワンダーホワイト　艶消白　一ガロン入　一〇、八〇
同　同　二分ノ一ガロン入　五、七五
エナメル代用　ワンダーホワイト　エナメル白　一ガロン入　一一、三〇
同　同　二分ノ一ガロン入　五、八五
コンクリート塗料　コンクレライト　各色　五ガロン入　四九、八〇
一ガロン入、　一三、〇〇〇

大阪及東京渡値段

## フエデラルバニシ會社製品

| 性質 | 品名 | 種類 | 電略 | 容器 | 單價 |
|---|---|---|---|---|---|
| 滲透性本質着色料 | オイルステイン | 各色 | カロン | 一ガロン入 | 一五、〇〇 |
| 同 | マホガニー色 | マホガオイン | ¼ガロ | 一ガラス入 | 二六、〇〇 |
| 同 | 各色 | カオイン | ¼ガロ | 四、四〇 |
| 同 | マホガニー色 | マホガオイン | ¼ガロ | 四、九〇 |
| 塗替用色ニス | フユデラルバニシステイン | 各色 | 1/16ガロン | 入 | 二、一〇 |
| 油ネリ目止 | フエデラルウッドフィラー | 各色 | 一封度 | 入 | 一、八 |
| 中塗色ニス | オイルスインコーター | 各色 | ¼ガロン | 入 | 二、七〇 |

各種ワニス

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 耐水耐熱ワニス | スパー外部用フ | 一ガロン | 入 | 一五、四〇 |
| 同 | 内部用フイン | 一ガロ | 入 | 一三、三 |
| 家具用艶ツトワニス | ベルベフヘン | 一ガロ | 入 | 一三、三〇 |

## ◎防水劑

### □急硬防水劑

ケーテーオー日本工劑株式會社

一罐（二五封度入）　一、五〇

日本セメント防水劑製造所

| | | |
|---|---|---|
| ウオータイト | 一〇ポンド入 | 五、五〇〇 |
| 同 | 七〇ポンド入 | 三五、〇〇〇 |
| クヰツクウオータイト | 一〇ポンド入 | 六、〇〇〇 |
| 同 | 六〇ポンド入 | 三〇、〇〇〇 |

油脂化工社

| | | |
|---|---|---|
| マノール | 一〇ポンド入 | 五、一〇 |
| 同 | 四〇ポンド入 | 二〇、〇〇〇 |
| 急結マノール | 一〇ポンド入 | 三、六〇〇 |
| 同 | 五〇ポンド入 | 一七、五〇〇 |
| エキストラ | 一ガロン入 | 四、一〇〇 |
| エキストラ | 四ガロン入 | 一六、〇〇〇 |
| 既設壁防水塗料 | リグアウオータイト三封度入（十坪塗差分） | 七、五〇 |

## ◎木材其他

田村商會（神戸）

| | | |
|---|---|---|
| 平飯石角 | 一坪ニ付 | 八、五〇 |

## ◎メタルラス（引伸金網）

| | | |
|---|---|---|
| 船來品#26 | 一坪 | 二、八二〇 |
| 船來品#24 | 一坪 | 三、二〇〇 |
| 和製品#26 | 同 | 一、五〇〇 |
| 同　#24 | 同 | 一、六〇〇 |

## ◎米松角材（木場渡し）

| | | |
|---|---|---|
| 大角材 | 一八吋角上　長 | 二四呎以上 一、七〇〇以上 |
| 中角材 | 一二吋角上　長 | 二四呎以上 一、五五〇以上 |
| 大角材 | 一〇吋角上　長 | 二四呎上 一、四五〇以上 |
| 小角取合 | 四吋角 | 一〇呎 八五〇 |
| | 四吋四分ノ一角 | 一三呎 一、〇〇 |
| | 四吋四分ノ三角 | 二〇呎 一、四五〇 |
| 平材No.8 | 厚六吋巾一二吋上長二〇呎 | 一、四五〇 |

## ◎米栂角材

| | | |
|---|---|---|
| 大角材 | 一〇吋角上　長 | 二四呎上 |
| 小角取合 | 四吋角 | 一〇呎 八五〇以上 |
| | 四吋四分ノ一角 | 一三呎 九〇〇以上 |
| | 四吋四分ノ三角 | 二〇呎 一、四五〇以上 |

## ◎米杉（尺〆一本ニ付）

| | | |
|---|---|---|
| 丸太 | 一等級　末口一八吋上長一三呎 | 一五、五〇〇 |

## ◎米檜（尺〆一本ニ付）

丸太ノ口クリヤ級末口二四吋上　長一三呎　二七、〇〇〇以上
同　末口一八吋上　長一二呎上　一五、〇〇〇以上
米松床板（神戸同店渡し一延呎ニ付）
巾六吋マーチャンタブル級　一、〇五五以上
巾六吋板目無節　一、〇六〇以上
巾六吋柾目無節　一、〇七〇以上
上巾四吋板目無節　一、〇四五以上
巾四吋柾目無節　一、〇五〇以上
同　二等級　同　三、〇〇〇
同　三等級　同　二、七五〇

## ◎檜、榧、赤樫、白樫、櫻、栓、（建築家具用）

新田ベニヤ製造所

三枚合、片面、巾二尺以上ハ厚サ一分五ノ（十六分三）　一、六四
巾二尺一寸以上ハ厚サ二分（四分一）何れも一平方尺ニ付キ　一、八九

| 寸法 | | 定價（一枚ニ付） |
|---|---|---|
| 巾 | 長 | 青二ツ星 青一ツ星 |
| 一尺一寸五分 | 六尺四寸 | 一、六四 一、八九 |
| 一尺二寸 | 六尺 | 一、六八 一、九三 |
| 一尺三寸五分 | 六尺四寸 | 二、〇三 二、三三 |
| 一尺五寸 | 六尺 | 二、三五 二、七〇 |
| 一尺六寸五分 | 六尺四寸 | 二、七三 三、一四 |
| 二尺 | 六尺 | 二、九五 三、三四 |
| 二尺五寸 | 六尺 | 三、四八 四、〇〇 |
| 三尺 | 六尺 | 四、二四 四、八三 |
| 三尺五寸 | 六尺 | 四、九四 五、六八 |

## ◎二等品（家具用）

| 厚一分五厘（十六分ノ三）又ハ二分（四分ノ一） | | 片面 代價（一枚ニ付） | 表三枚又四枚矧混合 |
|---|---|---|---|
| 三枚合 | 長 | 六尺 | 二、六二 三、四三 |
| 巾 | 尺 | | 三、五 四、五 |
| 二尺 | 六尺 | | 同 同 |

## ◎天井用（一坪ニ付）（京間）

| 巾 | 長 | 青二ツ星 | 青一ツ星 |
|---|---|---|---|
| 一尺 | 六尺 | 九、八四〇円 | 一一、三〇 |
| 一、一五 | 同 | 一〇、一五〇 | 一二、六七〇 |
| 一、三五 | 同 | 一〇、九二〇 | 一三、七〇〇 |
| 一、六五 | 六尺四寸 | 一一、四四〇 | 一四、三三〇 |
| 二、二五 | 同 | 一五、〇四〇 | 一九、〇〇〇 |
| 三、二〇 | 同 | 一七、五〇〇 | 二二、三三〇 |

◎同　上（江戸間用）

寸法　定價（一坪ニ付）

巾　長　青二ツ星　青一ツ星

一尺六寸　一尺二寸六尺　一尺五寸六尺　二尺六尺　三尺六尺　九、四〇〇　八、四〇〇　九、六〇〇　一〇、四〇〇　一一、八〇〇　一三、〇〇〇

◎格天井用　厚巾二尺以下一分五厘　巾二尺一寸以上二分

三枚片面

楢　欅　樺　櫻な　栓　黄櫨

寸法　樹種　代價

二尺角　青二ツ星　一〇、四〇〇

同　青一ツ星　一一、〇〇〇

二尺五角　青二ツ星　一一、〇〇〇

同　青一ツ星　一三、一〇〇

三尺角　青二ツ星　一三、六〇〇

三尺五寸角　青二ツ星　一五、三四〇

四尺角　一八、八〇〇

◎腰羽目用　厚巾二尺以下一分五厘　巾二尺一寸以上二分

三枚合片面

楓　樺　櫻　なし　栓

巾　長　青二ツ星　青一ツ星

一尺三寸五分　三尺二寸　一、〇一〇　一、二〇〇

一尺六寸五分　三尺二寸　一、三七〇　一、五八〇

二尺　三尺　一、七四〇　二、〇〇〇

二尺五寸　三尺　二、二七〇　二、六一〇

◎楓、欅、玉杢

三枚合、（巾二尺以下一分五厘　片面、厚（巾二尺一寸以上二分

寸法　定價（一枚ニ付）

巾　長　赤四ツ星　赤三ツ星　赤二ツ星　赤一ツ星

一尺三尺　二、六〇　二、三五　三、一八　四、七七

一尺四尺　二、六一　三、一四　四、二四　六、三七

一尺五尺　三、一四　三、九三　五、三七　七、九六

一尺六尺　三、六五　四、七〇　六、三五　九、三五

二尺　四尺　四、八六　六、二五　八、四〇　一二、〇四

二尺五尺　六、二五　八、一三　一〇、四〇　一五、〇四

三尺　六尺六寸　七、七四　一〇、〇四　一三、〇四　一九、二〇

二尺六尺　九、七四　一二、七一　一五、九二　二三、七一

二尺五寸　三尺六寸　六、三五　一〇、三五　一三、五四　一九、七一

二尺五寸　四尺八寸　八、三二　一〇、三三　一三、八〇　二〇、七一

二尺　五尺　五尺一〇、六五　一三、七八　一六、三五　二五、八九

二尺五寸　六尺三、七八　一五、三三　一〇、七〇　三一、〇八

三尺　三尺八、三六　一〇、〇二　一三、九四　二〇、三〇

三尺　四尺二、一四　一三、三六　一八、〇四　二七、〇七

三尺　五尺三、九三　一六、七一　二三、三六　三三、八四

三尺　六尺六、七一　二〇、〇四　二七、〇七　四〇、二〇

◎楢、榊、樺、櫻（京間用）

五枚合、片面、青一ツ星

寸法　定價（一枚ニ付）

巾　長　三分厚　四分厚　三分厚

二尺　六尺四寸　六、八三　七、六八　八、三二

二尺五寸　六尺四寸　八、九四　一〇、〇六　一二、一八

五尺二寸　六尺四寸　一三、八四　一五、五二　一九、三〇

三尺二寸　九尺六寸　二四、二四　二七、七七　三五、七〇

◎同　上（江戸間用）

寸法　定價（一枚ニ付）

巾　長　三分厚　四分厚　五分厚

二尺　六尺　六、四〇　七、一〇　八、〇〇

二尺五寸　六尺　八、三八　九、四三　一〇、四八

三尺　六尺　一〇、九二　一二、二九　一三、六五

三尺九尺　一三、六七　一五、二七　一八、二〇

◎楢柾目ベニヤ板（兩面物及ビ厚物ハ別ニ）

三枚合、片面、厚

巾二尺以下一分五厘　巾二尺一寸以上二分

寸法　定價（一枚ニ付）

巾　長　梅　竹　松

二尺　六尺　三、一三　三、六〇　四、六八

二尺五寸　六尺　四、三五　五、〇〇　七、〇五

三尺　六尺　五、六五　七、九三　一〇、四四

◎新田式ベニヤ製圖板

寸法　定價（一枚ニ付）

厚　巾　長

七分　二尺　三尺九寸　九圓

七分　二尺五寸　三尺五寸　十一圓

七分　三尺　四尺　十三圓

◎丸　鐵

山本東作商店

長サ　徑　二分　三分　四分　五分

十二尺　四、八〇　五、三〇　六、〇〇　六、七〇　七、四〇

十八尺　五、四〇　六、〇〇　六、七〇　七、五〇　八、三〇

二十尺　五、四〇　六、〇〇　六、七〇　七、五〇　八、三〇

十二尺　四、八〇　五、三〇　六、〇〇　六、七〇　七、四〇

十六尺　四、八〇　五、三〇　六、〇〇　六、七〇　七、四〇

十八尺　四、八〇　五、三〇　六、〇〇　六、七〇　七、四〇

二十尺　四、八〇　五、三〇　六、〇〇　六、七〇　七、四〇

十二尺　四、八〇　五、三〇　六、〇〇　六、七〇　七、四〇

十五

◎Lアングル

| 厚サ | 巾 | 高 | 目付ポンド | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 一分 | 二十尺位 | | | 四、四〇 | 五、〇〇 | 四、二〇 |
| 八分 | 同 | 同 | | 四、八〇 | 五、〇〇 | 四、二〇 |
| 一寸 | 同 | 同 | | 五、〇〇 | 五、〇〇 | 四、二〇 |
| 一寸二分 | 同 | 同 | | | | |
| 一分五厘厚 | | | | | | |
| 一寸 | 二十尺位 | | | 四、〇 | 五、〇〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | | 同 | 同 | 同 |
| 一寸二分 | 同 | 同 | | 三、七 | 五、〇〇 | 四、二〇 |
| 一寸四分 | 同 | 同 | | 四、〇 | 五、〇〇 | 四、二〇 |
| 一寸六分 | 三十尺位 | | | 四、五 | 四、八〇 | 四、二〇 |
| 二分厚 | | | | 四、〇 | 五、〇〇 | 四、二〇 |
| 一寸 | 三十尺位 | | | 同 | 同 | 同 |
| 二寸 | 同 | 同 | | 同 | 同 | 同 |
| 三寸 | 同 | 同 | | 同 | 同 | 同 |
| 二分五厘厚 | | | | | | |
| 一寸六分 | 三十尺位 | | | 同 | 同 | 同 |
| 二寸 | 同 | 同 | | 同 | 同 | 同 |
| 三寸 | 同 | 同 | | 同 | 同 | 同 |

◎Iチヨイスト

| 厚サ | 巾 | 高 | 目付ポンド | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 分厘 | 三寸 | 四寸 | 九、五 | 一、七 | 三、五 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 一、〇〇 | 同 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 一、二〇 | 一、八〇 | 四、二〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 一、四〇 | 二、一〇 | 四、二〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 一、六〇 | 二、四〇 | 四、二〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 一、八〇 | 二、七〇 | 四、二〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 二、〇〇 | 三、〇〇 | 四、二〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 二、二〇 | 三、三〇 | 四、二〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 二、四〇 | 三、六〇 | 四、二〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 二、六〇 | 三、九〇 | 四、二〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 二、八〇 | 四、二〇 | 四、二〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 三、〇〇 | 四、五〇 | 四、二〇 | 四、二〇 |

◎コチヤンネル

| 厚サ | 巾 | 高 | 目付ポンド | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 分厘 | 三寸 | 四寸 | 五、一 | 三、三 | 四、〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 五、五 | 同 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 六、〇 | 三、七 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 六、四 | 四、〇 | 四、五 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 七、〇 | 四、四 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 七、六 | 四、八 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 八、〇 | 五、〇 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 八、八 | 五、五 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 九、六 | 六、〇 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 一〇、〇 | 六、八 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 一〇、四 | 七、〇 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 一〇、八 | 七、三 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 一一、二 | 七、五 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 一一、六 | 七、八 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 一二、〇 | 八、〇 | 同 | 同 |

◎丁形

| 厚サ | 巾 | 高 | 目付ポンド | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 分厘 | 三寸 | 四寸 | 五、一 | 三、三 | 四、〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 五、五 | 同 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 六、〇 | 三、七 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 六、四 | 四、〇 | 四、五 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 七、〇 | 四、四 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 七、六 | 四、八 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 八、〇 | 五、〇 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 八、八 | 五、五 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 九、六 | 六、〇 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 一〇、〇 | 六、八 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 一〇、四 | 七、〇 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 一〇、八 | 七、三 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 一一、二 | 七、五 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 一一、六 | 七、八 | 同 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 一二、〇 | 八、〇 | 同 | 同 |

◎合掌用切鐵板

| 厚サ | 巾 | 長サ | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一分 | 二寸 | 二寸 | 五、〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 二寸半 | 五、三〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |
| 同 | 三寸 | 三寸 | 五、五〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 四寸 | 五、八〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |
| 二分 | 同 | 同 | 五、〇〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 五、〇〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 五、〇〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |
| 三分 | 同 | 同 | 五、〇〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 五、〇〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 五、〇〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 五、〇〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 五、〇〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 五、〇〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 五、〇〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |
| 同 | 同 | 同 | 五、〇〇 | 五、三〇 | 四、二〇 |

◎丸鐵

| 径 | 長サ | | | |
|---|---|---|---|---|
| 一寸二分 | 十八尺位 | 五、〇〇 | 四、三五 | 四、〇 |
| 一寸四分 | 同 | 五、一〇 | 四、三五 | 四、〇 |
| 一寸六分 | 同 | 五、二〇 | 四、三五 | 四、〇 |
| 一寸八分 | 同 | 五、三〇 | 四、三五 | 四、〇 |
| 二寸 | 同 | 五、四〇 | 四、三五 | 四、〇 |
| 二寸二分 | 同 | 五、五〇 | 四、三五 | 四、〇 |
| 二寸四分 | 同 | 五、六〇 | 四、三五 | 四、〇 |
| 二寸六分 | 同 | 五、七〇 | 四、三五 | 四、〇 |
| 二寸八分 | 同 | 五、八〇 | 四、三五 | 四、〇 |
| 三寸 | 同 | 五、九〇 | 四、三五 | 四、〇 |
| 三寸二分 | 同 | 六、〇〇 | 四、三五 | 四、〇 |
| 三寸四分 | 同 | 六、一〇 | 四、三五 | 四、〇 |
| 三寸六分 | 同 | 六、二〇 | 四、三五 | 四、〇 |
| 三寸八分 | 同 | 六、三〇 | 四、三五 | 四、〇 |
| 四寸 | 同 | 六、四〇 | 四、三五 | 四、〇 |

◎角鐵

| 一分五厘 | 十二尺位 | 五、〇〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
|---|---|---|---|---|
| 二分 | 同 | 五、〇〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 二分五厘 | 同 | 五、〇〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 三分 | 同 | 五、〇〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 四分 | 同 | 五、〇〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 五分 | 十五尺以上十八尺位 | 五、〇〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 六分 | 同 | 五、〇〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 七分 | 同 | 五、〇〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 八分 | 同 | 五、〇〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 九分 | 同 | 五、〇〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 一寸 | 同 | 五、〇〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 一寸二分 | 同 | 五、〇〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 一寸四分 | 同 | 五、〇〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 一寸六分 | 同 | 五、〇〇 | 四、二〇 | 四、〇 |

◎平鐵

| 厚 | 巾 | | | |
|---|---|---|---|---|
| 一分 | 十二尺位 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 三分 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 四分 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 五分 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 六分 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 七分 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 八分 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 九分 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 一寸 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 一寸二分 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 一寸四分 | 十五尺以上十八尺位 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 一寸八分 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 二寸 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 二分厚 | 十二尺位 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 三分 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 四分 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 五分 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 六分 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |
| 七分 | 同 | 五、一〇 | 四、二〇 | 四、〇 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 八分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 一寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 一寸二分 | 同 | 十五尺以上十八尺位 | 同 | 四七〇 |
| 一寸四分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 一寸六分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 一寸八分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二寸二分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二寸四分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二寸六分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二寸八分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 三寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 三寸半 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 四寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 四寸半 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 五寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 五寸半 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 六寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 七寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 八寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 九寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十一寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十二寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十三寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十四寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十五寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十六寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十七寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十八寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十九寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十一寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十二寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十三寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十四寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 一寸六分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二寸 | 同 | 十五尺以上十八尺位 | 同 | 四七〇 |
| 二寸六分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 三寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 三寸半 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 四寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 四寸半 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 五寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 五寸半 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 六寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 七寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 八寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 九寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十一寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十二寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十三寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十四寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十五寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十六寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十七寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十八寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十九寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十一寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十二寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十三寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十四寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 一寸六分 | 同 | 十五尺以上十八尺位 | 同 | 四七〇 |
| 二寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二寸六分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 三寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 三寸半 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 四寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 四寸半 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 五寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 五寸半 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 六寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 七寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 八寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 九寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十一寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十二寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十三寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十四寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十五寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十六寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十七寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十八寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十九寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十一寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十二寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十三寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十四寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 一寸六分 | 同 | 十五尺以上十八尺位 | 同 | 四七〇 |
| 二寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二寸六分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 三寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 三寸半 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 四寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 四寸半 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 五寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 五寸半 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 六寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 七寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 八寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 九寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十一寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十二寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十三寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十四寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十五寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十六寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十七寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十八寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 十九寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十一寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十二寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十三寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二十四寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 八分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 一寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 一寸二分 | 同 | 十五尺以上十八尺位 | 同 | 四七〇 |
| 一寸四分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 一寸六分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 一寸八分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二寸 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二寸二分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二寸四分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二寸六分 | 同 | 同 | 同 | 四七〇 |
| 二寸八

## 本誌定價表

| 本誌 | 冊數 | 定價 | 郵稅 |
|---|---|---|---|
| | 一冊 | 七拾五錢 | 貳錢 |
| | 十二冊 | 九圓 | 貳拾四錢 |


大正十四年十一月廿日印刷
大正十四年十二月一日發行（毎月壹回一日發行）

大阪市東淀川區中津町一九八番地
發行兼編輯人 江村恒一

大阪市東區內淡路町一丁目廿一番地
兼印刷人 江村恒一

印刷所 大阪市北區堂島濱通一丁目一番地堂島ビルヂング 大阪活版所

發行所 日本建築協會
電話北四二九一番
振替口座大阪三九九七五

特約販賣店 大阪市西區京町堀羽子板橋北 柳々堂書店
電話（土佐堀二四四〇番）
振替口座二〇八五番




1020

# 日本建築協會々報

第八輯
第十二號

# 日本建築協會々則

第一條　本會ノ目的ハ我國建築界ノ堅實ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條　本會ハ日本建築協會ト稱ス

第三條　本會ハ事務所ヲ大阪市ニ置ク

地方ニ支會ヲ設クルコトヲ得

第四條　本會ハ人格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トス會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記錄ス會員タラムト希望スル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ入會希望書及履歷書ヲ本會ニ提出スベシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ決議ス

第五條　本會ハ其ノ目的ヲ贊成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員トス贊助員ヲ分チテ左ノ四種トス

一　名譽贊助員―地位又ハ學識アル名望家

二　終身贊助員―金參百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家

三　特別贊助員―建築ニ關スル特種ノ技術家又ハ事業家

四　普通贊助員―建築ニ關係又ハ趣味ヲ有スル者

贊助員ノ氏名住所寄附ノ金額又ハ物件ハ各贊助員名簿ニ之ヲ記錄ス

第六條　名譽贊助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス

終身贊助員タラムトスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及寄附ノ金額又ハ物件ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ決議ス

特別贊助員タラムトスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ議決ス

普通贊助員タラムト欲スル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ議決ス

第七條　會員ハ第十九條ニ關スル權利ヲ享有ス

會員ハ會內ニ於ケル其ノ言行ニ付會外ニ於テ責ヲ任セサルコトヲ得

名譽贊助員ハ本會ノ優遇及第十九條ニ基キ相當ノ利得ヲ受ク終身贊助員、特別贊助員及普通贊助員ハ第十九條ニ基キ會誌ノ配布其ノ他各相當ノ利得ヲ受ク

第八條　會員ニシテ脫會セムトスル者ハ其ノ旨ヲ本會ニ申込ムヘシ

前項ノ規定ハ贊助員ニ之ヲ準用ス

第九條　本會ハ會員ニシテ本則ノ規定ニ違背シ又ハ本會ノ名譽ヲ汚スノ行爲アリト認メラルヽ者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ其ノ權利ヲ停止シ若ハ之ニ脫會ヲ勸告シ又ハ例會ノ決議ヲ經テ之ヲ除名スルコトヲ得

第十條　脫會其ノ他ノ事由ニ依リ會員タルノ資格ヲ失ヒタル者ハ既納會費ノ返還ヲ求メ又ハ其ノ債務ヲ免カルヽコトヲ得ス

前項ノ規定ハ贊助員ニ之ヲ準用ス

第十一條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一　會　頭　一名

二　副會頭　一名

三　理事長　一名

四　理　事　十名（理事長タル理事ヲ含ム）

會頭ハ會務ヲ總監シ本會ヲ代表ス

副會頭ハ會頭ヲ輔佐シ會頭事故アルトキ其ノ職務ヲ代理ス

理事長ハ會務ヲ總理シ會頭、副會頭事故アルトキ其ノ職務ヲ代理シ理事會ヲ代表ス

理事ハ會務ヲ處理シ理事長事故アルトキ理事會ノ決議ニ依リ其ノ職務ヲ代理ス

第十二條　役員ハ會員中ヨリ例會ニ於テ之ヲ選擧ス但シ會頭副會頭ハ名譽贊助員中ヨリ之ヲ選出スルコトヲ得

理事長ハ理事之ヲ互選ス

役員ノ任期ハ二年トス　但シ理事長ニ付テハ一年トス

理事ノ改選ハ每年半數トス但シ引續キ重任スルコトヲ得ス

第十三條　本會ニ左ノ職員ヲ置ク

一　主　記　二　名

二　主　計　二　名

三　編　輯　五　名

四　書　記　若干名

主記ハ庶務ヲ、主計ハ會計ヲ、編輯ハ編纂ヲ處理ス

書記ハ理事長理事ノ命ヲ受ケ會務ニ從事ス

第十四條　主記、主計、編輯ハ理事之ヲ互選ス

書記ハ理事會之ヲ任命シ有給ト爲スコトヲ得

第十五條　本會ハ調査研究ノ必要ニ應シ例會ノ決議ニ依リ各部ノ委員會ヲ設ケ各部ニ委員長一名委員若干名ヲ置ク

委員長及委員ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名シ委員長ハ當該委員ノ互選トス

理事會ハ特殊事項ニ關シ會員外ノ專門家ヲ囑託委員ト爲スコトヲ得

第十六條　委員長ハ當該委員會ヲ代表シ委員長事故アルトキハ當該委員會ノ決議ニ依リ委員ノ職務ヲ代理ス

委員會ノ經過ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス

委員會ノ調査研究報告ハ例會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但シ緊急事項ニ付ハ理事會ノ名ヲ以テ發表スル事ヲ得

第十七條　本會ハ每月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ヲ審議シ報告會、談話會、討論會又ハ講演會ヲ催ス但シ理事會ハ必要ト認ムルトキハ臨時之ヲ開催スルコトヲ得

例會ニ於ケル議案其ノ他ノ事項ハ理事會之ヲ會員ニ豫告ス但シ緊急事項ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第十八條　本會ハ春秋二季大會ヲ擧行ス

第十九條　本會ノ行フ事業左ノ如シ

一　建築ニ關スル諸般事項ノ調査研究

二　調査研究報告ノ發表

三　建築ニ關スル重要事項ノ議決

四　決議事項ノ實行促進

五　會誌ノ發刊

六　建築ニ關スル圖書ノ刊行

七　建築ニ關スル講演會ノ開催

八　建築ニ關スル展覽會ノ公開

九　建築ニ關スル視察

十　建築ニ關スル有志者ノ親睦會

十一　理想的建築ノ計畫

十二　其ノ他建築ニ關スル有益ナル事項

第二十條　會員ハ會費年額金拾八圓ヲ本會ニ醵出スヘシ但シ例會ニ出席シ難キ地方在住ノ會員ノ會費ハ半額トス

一時ニ金貳百圓以上ヲ出ストキハ爾後前項ノ會費ヲ免ルヽ會員タルノ承認ヲ得タル者ハ入會金五圓ヲ本會ニ納付スヘシ特別贊助員ハ特別贊助費年額金拾貳圓ヲ、普通贊助員ハ普通贊助費年額金六圓ヲ本會ニ前納スヘシ但シ六期以內ニ之ヲ分納スルコトヲ得

第二十一條　本會ノ經費ハ會費入會金寄附金贊助費其ノ他ノ收入ヲ以テ支辨ス

本會ノ財產ハ理事長之ヲ監理ス

第二十二條　本會ノ財產債權債務及每月ノ收支ハ理事會ニ報告ス

本會ノ財產債權債務及每年ノ收支ハ理事會ニ於テ報告ス

第二十三條　本會及本則ニ關スル詳細ノ事項ハ例會ノ決議ニ依リ細則ニ之ヲ定ム

第二十四條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得

# 會告

會員、賛助員所在不明者の件

會員、賛助員の現住所並勤務先不明者はお知合の諸氏より御報知に接し漸次判明致して來ましたが尚左記會員、賛助員は不明の爲整理上差支へて居ります就ては止むを得ず例會に附議して除名致さねばならぬかと存じますから御承知のお方は何卒本協會事務所へ御通報下さる樣願ひます

大正十四年十二月

日本建築協會

會員　高堂德治

地方會員　安田繁

普通賛助員　伊藤武夫　吉本新之助　矢田部喜平　清原佐市　八木幸助　好岡享　肥塚房春　宮崎加平　戸山音二郎　政安熊市　渡邊三郎　野々山政金　坂根秋光　板垣要　杉本久吉　松原喜太郎　太田四郎　地福勇吉　青木立三　田中儀一　平田茂樹　大下守造　湊饒　延山政雄　權藤洗二　若林俊一　小枝實　田代正熊　小林久之助　桑田誠一郎　池永恒男　山口辰治　林德一

## 會報

一、塗師工講習會開催の件

今回建築職工敎化の目的を以て大阪市及建築業協會關西支部、本協會の三者聯合により左の要項の通塗師工講習會を開催致しました

一、科目　塗師工
二、講習會場　渥美小學校
三、期間　十一月九日より十四日迄六日間
四、應募資格　建築業協會員及其他の選出せるもの
五、講習料　不要
六、講師及講習科目

色彩　安井武雄氏
ペイント材料　田坂吉二郎氏
リニス材料　田坂吉二郎氏
塗師施工法　遠藤演氏
漆塗　川合漆仙氏

本協會側よりは敎化委員中の井上新二、小笠原銅、波江悌夫、酒井勇三郎、宮本長治、澁谷五郎、姫野武、渡邊圭吾の八氏本講習會に關する委員を依囑せられ種々斡旋の勞をとられました

其結果申込數二一七名、出席者數二〇二名修了證書授與者數一三五名の好成績を得ました次第であります

一、關東震火災視察記寄贈の件

今回全國工業學校の內建築科を有する三十五校へ敎授參考資料として關東震火災視察記を各一部宛寄贈致しました

一、動力、國産奬勵、工業敎育の三問題に關する件

左記事項揭載方依賴により登載致します

謹啓益々御健勝大慶至極に奉存候

偖工政會主催の下に全國四十三工業團體の協贊を得て十月十六、十七、十八の三日間東京市に於て第三回全國工業家大會を開催し全國各地より約一千名の代表的工業家會合し、動力國産奬勵、工業敎育の三問題に付愼重審議せる結果左の如く決議致し候處等三問題は現今工業に關し最も緊急實行を要する國家的重要問題と確信致候に就ては是非御贊成の上本決議の趣旨達成に御援助被成下度御依賴迄得貴意申候　敬白

大正十四年十月二十五日

社團法人工政會
理事長工學博士　加茂正雄

決議

動力問題に關する決議

一、吾人は政府が速に權威ある動力調査委員會を組織し以て送電幹線網の完成を促進し動力資源活用の完璧を期すると共に各種資源の開發上遺利なからしむるの方策を確立せんことを望む

國産奬勵に關する決議

一、吾人は政府が權威ある中央機關を設け各官公衙及び公共團體等を奬勵して國産奬勵の目的を達成せんがために速に適切なる處置を採らんことを望む

二、吾人は全國の産業及び經濟に關する公益團體相提携聯絡して國産奬勵に關する一大機關を作り政府と協力して其目的を貫徹せんことを期す

工業敎育に關する決議

一、吾人は工業敎育を普及發達せしめ殊に工業補習敎育の改善を計り之れを擴張充實するを以て急務と認む

二、吾人は官民協同して優良なる職工長養成の途を講じ其の待遇を改善せんことを期す

三、吾人は工業に關する社會敎育施設例へば工業圖書館、工業博物館等の普及發達を望む

附帶決議

一、本決議の實行に關しては之を社團法人工政會に一任す

大正十四年十月十八日

第三回全國工業家大會

## 會合

### ○職工敎化講習會打合會

△日　時　十月十日午後四時——八時
△會　場　建築業協會關西支部
△出席者　建築業協會側
久保田種吉(久保田組)野呂長四郎(橋本組)平塚鎗吉(竹中工務店)
日本建築協會側
小笠原敎化委員、波江敎化委員

△記　事　一、本打合會は大阪市主催兩協會後援の下に毎年行ふ建築職工講習會に付下準備として會合したるものにして左記事項に付協議したり

1. 講習會に要する經費及支出の件
2. 會場及會期の件
3. 講習科目及其內容の件
4. 講師の件
5. 聽講者取纏の件
6. 其他

二、右協議の後大洋軒食堂にて夕食を了り散會

### ○敎化委員會

△日　時　十月十三日午後四時——六時
△會　場　本協會々議室
△出席者　委員　井上新二、小笠原銅、酒井勇三郎、姫野武、波江悌夫、

△記　事　一、小笠原委員より建築職工敎化講習會開催に關し去る十日建築業協會關西支部委員と會合し協議したる經過に付報告說明ありて後理事會に提出すべき報告案に付協議し原案の通可決せり

一、次に右講習會は大體に於て塗師工講習會と決定したるも其の科目の內容、講習時間、講師の選定等は本協

會に委任せられしに付是等に付協議したり

一、本夕は委員長欠席に付委員長の都合を問合せ至急本委員會を再開することに決定

一、會後清交社に於て秋季大會委員と共に夕食を了り散會せり

## ○秋季大會委員會

△日　時　十月十三日午後六時――十時三十分

△會　場　清交社

△出席者　理事　園部文雄、和田貞治郎　伊藤正文、光安楫之助、松本儀八　委員　錦織喜代治、小川安一郎、谷民藏、中西六郎、中島智喜、佐藤節雄、

△記　事　一、夕食後本委員會を開會し先つ園部理事座長席に着き自分は本夕松本理事長病氣欠席に付代理に選ばれし旨を述へ一場の挨拶ありて直に委員長を互選し本委員會の成立を乞ふ

一、委員長の互選に移り左の通決定せり

委員長　谷　民藏氏

一、次で谷氏座長席に着き簡單なる挨拶を述べ園部理事より秋季大會擧行に關し理事會の意見として日時は本月廿五日頃法隆寺、奈良方面に見學旅行をなし目的として臨地講演を行ふ希望なれども委員會に於て宜しく選定されたき旨を述ぶ

一、是より協議に入り左の事項に付決定す

1. 期日及出發時集合地
2. 見學場所
3. 會費及汽車賃晝食
4. 宴會場
5. 講演會場及講演者
6. 雨天の準備
7. 豫算
8. 各委員の分擔事項
9. 其他

## ○教化委員會

△日　時　十月十九日午後五時――九時

△會　場　本協會會議室

△出席者　委員長　古宇田實　委員　小笠原銅、酒井勇三郎、澁谷五郎、姫野武、波江悌夫、渡部圭吾

△記　事　一、塗師工講習會の講師依囑に關し交涉結果に付各委員より報告あり未承諾の分は尚催促の上早急決定することに決す

一、大阪市に報告すべき本講習會委員は左の八氏とし波江、小笠原兩委員に特に世話役を願ふことに決定、小笠原、酒井、澁谷、姫野、波江、渡部、井上、宮本各委員

一、園部文雄氏委員辭退に付幹事缺員の處幹事は理事の委員たるものに依囑する前例により本夕左の通依囑し承諾を得たり

幹事　澁谷　五郎氏

## ○秋季大會委員會

△日　時　十月廿三日午後五時――八時

△會　場　本協會々議室

△出席者　理事　園部文雄、澁谷五郎、松本儀八、

委員長　谷民藏、

委員　今林彦太郎、錦織喜代治、小川安一郎、吉田健治、中尾保、中西六郎、佐藤節雄

△記　事　一、谷委員長より今日迄なしなる準備事項に付報告ありて尚當日に於ける設備其他に關し協議打合せをなす

## ○秋季大會

△日　時　十月二十五日の日曜日

△目　的　見學と臨地講演

△旅行地　法隆寺、奈良地方

△出席者　講演者　佐藤小吉、岸熊吉、名譽贊助員　渡邊千代三郎　會員　服部萬次郎、朝永國次郎、土井軍治、沼館與惣吉、小川久市、大澤幸平、小田惠輔、小島淳吉、渡邊源治、川村種三郎、高林幸太郎、多田七五三一、武田經一、坪井誠一、大工庄七郎、中川彌八、中出丑三、坂口芳三郎、武藤甚右衛門、浦英之助、久保田筆雄、矢木英夫、八木幸次郎、松本仁重郎、古橋剛丸、船本晉、前田清二、高麗建城、赤松重一、安井武雄、酒井勇三郎、左谷米三郎、坂口正雄、宮川豐藏、白川雄一、島村佐次郎、姫野武、森篤次郎、菅田登美雄、恩田秀、丸山正吉、工藤榮治郎、

贊助員　石川安太、伊東敏夫、石井久男、布袋惣平、川野平追、笠井新十郎、川村育藏、川口清太郎、村井季四郎、駒井喜兵衛、植松佐則、山田千代松、山下清太郎、馬淵信治、松本文平、增本榮六、藤田友太郎、藤村愛資、古賀鄕實、北村久男、鈴木只重、菅谷元治

役員　松本理事長、澁谷理事、伊藤理事、古塚理事、松本儀理事

大會委員　谷委員長、今林委員、錦織委員、小川委員、吉田委員、中西委員、中尾委員、中島委員、佐藤委員

書記　江村恒一、西谷節、大和榮衛、薦田夏治郎、鷹取陽

△記　事　一、當日絕好の旅行日和に午前十時を過ぐるや會員は三々五々法隆寺脇の休憩所に集合をはじめ午前十一時半來會者の絕へしを見て一同法隆寺內に入り紀念撮影をなし直に講堂に於て岸熊吉氏の左記演題により熱心なる臨地講演を聽講し續いて同氏の精細なる說明の下に同寺の

寶物見學を了り是に於て藥師寺及唐招提寺見學團と奈良見學團とに別れ法隆寺を去る

飛鳥時代の寺院建築に就て

奈良縣地方技師　岸　熊吉氏

一、午後三時半一同は奈良三笠山麓武藏野旅館に再び集合し餘興の鹿寄せを見て同館に於ける佐藤小吉氏の時餘に渉る熱心なる講演を聽く

奈良女子高等師範學校教授

奈良朝時代の文化　佐藤　小吉氏

一、亟いて懇親宴會に移り松本理事長及谷大會委員長の挨拶ありて獻酬交歡快談縱橫奈良の名妓十數名此間を斡旋して各自歡を盡して午後九時歸途につく

一、本日は近年稀なる大集會にして大盛會裡に無事閉會を告げしは本協會の欣幸に堪へず委員諸君の勞を多謝する所なり

## ○塗師工講習會講師打合會

△日　時　十月二十九日午後六時——八時半

△會　場　大洋軒食堂（大江ビルヂング地階）

△出席者　講師　川合漆仙、田坂吉二郎　安井武雄、遠藤演　敎化委員　小笠原斜、酒井勇三郎ノ諸氏

△記　事　一、食後小笠原委員より一場の挨拶ありて講師各擔任科目に付打合せをなし散會

## ○定例理事會

△日　時　十一月九日午後五時——九時

△會　場　本協會々議室

△出席者　園部理事、和田理事、澁谷理事、伊藤理事、光安理事

△報　告　澁谷理事より左の報告說明ありて何れも承認せり

1. 十月分會計報告
2. 秋季大會決算報告
3. 大大阪記念博覽會出品に關する決算報告
4. 關東震火災視察記出版に關する決算報告

△議　事　一、十一月例會に關する件

例會に於て擧行すべき事項に付協議し講演者は懇談會開催のことに決定

一、本年名簿作製に關し印刷所の件決定

一、會員詮衡

## ○構造計算調査委員會

△日　時　十一月十日午後五時——八時四十分

△會　場　本協會々議室

△出席者　委員長　增田清　委員　今林彦太郎、池田宮彦、渡部圭吾、田邊平學、八木幸次郎、青柳貞世、永澤毅一

△記　事　一、左の件に付研究し意見の交換をなし下記委員に附託となる

1. 垂直荷重曲能率の件　八木委員に附託
2. 鐵筋混凝土壁の應壓强度（其一）に關する件　田邊委員に附託
3. 鐵筋混凝土壁の應壓强度（其二）に關する件　永澤委員に附託

## ○例會

△日　時　十一月十七日午後六時——九時

△會　場　府立實業會館中會堂

△出席者　講演者　福永佐和吉　役員　和田理事、澁谷理事、光安理事、松本儀理事　會員　石川寬三　錦織喜代次、朝永國次郎　沼館興惣吉、大澤幸平、小川安一郎　渡實幸、加藤善吉、田中光治、谷民藏、中島智喜、中村義雄、中西六郎　藤枝良一、小寺彌一、兒玉廣大郎、左谷米三郎、南孝三、芝田知重、白川雄一、森本藤吉、山中茂一、大河原達海、古橋剛丸、岩崎甚太郎、贊助員　中村喜七、石井久雄の諸氏

△記　事　一、定刻光安理事は松本理事長病氣欠席に付理事長代理として開會を宣し一場の挨拶ありて直に會務報告をなす

一、次いで同理事は講演者福永佐和吉氏を紹介し同氏は左の演題の下に時餘に渉る視察談をなす

歐米視察談

一、右了りて質問應答ありて和氣藹々の裡に散會を告ぐ

## ○塗師工講習會講師慰勞會

△日　時　十一月十八日午後五時—八時

△會　場　大洋軒食堂（大江ビルヂング地階）

△出席者　講師　川合漆仙、田坂吉二郎　遠藤演の諸氏　委員　大阪市役所側　一名　建築業協會側　四名　日本建築協會側　六名（古宇田委員長、波江、小笠原、澁谷、酒井、姫野各委員）

△記　事　定刻一同食堂に入り會食をなし宴酣にして古宇田委員長立て講師に對し今回の講習會に付勞を謝する一場の挨拶あり次いで竹本大阪視學の叮重なる挨拶ありて快談の裡に散會せり

## ○新入會會員及贊助員

會員の部

春日井政一君　大阪府豐能郡岡町山ノ上

石本　熊吉君　尼崎市別所村二九五

小田　惠輔君　大阪市住吉區天王寺町二〇三八今泉方

普通賛助員の部

杉本　久俊君　大阪市北區中ノ島四ノ一四

紙谷作次郎君　大阪市港區安治川南通一ノ三八大谷方

## ○退會會員及賛助員

會員の部

白江四郎三君　中山正之君

古谷芳三郎君

地方會員の部

佐々木岩太郎君

普通賛助員の部

片山菊次郎君　安藤伊右衛門君

## ○住所及勤務先移動

會員の部

本多　二郎君　東京市麹町區丸ノ内三菱合名會社地所部

光安梶之助君　大阪市住吉區天王寺町三二五三(文の里)

村上　徹一君　大阪市東區淡路町三船場ビルヂング三階村上徹一建築事務所

(宅)　兵庫縣武庫郡六甲村八幡字山田六六

藤井　庄作君　大阪市東區淡路町三船場ビルヂング二〇二號藤井工業所

馬野　七登君　京都市外御室仁和寺寶物館新築場

(宅)　京都府葛野郡花園上谷字五反田

鷲尾　九郎君　兵庫縣精道村芦屋字寺田二二

地方會員の部

後藤　信勝君　東京府豊多摩郡杉並町阿佐ヶ谷七六四

福井　福君　大阪市南區高津五番丁三一

箕浦　實一君　東京市牛込區新小川町二ノ四

中根　龜一君　東京市麹町區永樂町一ノ一大林組東京支店

川崎　鉄三君　横濱市本町四ノ六三若尾ビルヂング四階若尾幾太郎商店

(宅)　横濱市根岸町坂下五九九

黒住福三郎君　鹿兒島市冷水町二——

清水芳次郎君　大阪市東淀川區本庄町二九四

普通賛助員の部

井上　利男君　大阪府豊能郡中豊島村曾根二七五

鴻上　佐藏君　兵庫縣川邊郡小田村杭瀬三ノ坪一ノ一

吉成　完造君　大阪市天王寺區勝山通四丁目翠光園

遠山　秀吉君　大阪市天王寺區上本町大軌電鐵上本町建築場大林組出張所

吉村　種敏君　大阪市北區澤上江町四ノ二九

西田　榮一君　横濱市青木町鶴屋町三四九七ノ二

伊藤　重雄君　神奈川縣鶴見町生麥キリンビール工場建築場大倉土木出張所

大山　啓次君　廣島縣賀茂郡原村第五師團經理部派出所

本田　久雄君　神戸市中山手一柴田ビルヂング原科建築事務所

中宮　勝二君　金澤市高岡町上藪ノ内一九

井上　義一君　東京市外千駄ヶ谷青山穏田七九山本方

工藤　壽男君　神戸市北長狭通五ノ九三

岡本　賢藏君　大阪市住吉區天王寺町苗代田二一九八

藤村　愛資君　大阪市天王寺區堂ヶ芝町七七

横田　音七君　東京府下杉並町天沼二二二長尾方

岩柳　三朗君　東京府下西巣鴨町字池袋四三五勝山方

吉岡　富藏君　神奈川縣内務部營繕課

今井　圀一君　名古屋市中區御器所町島方

竹内　一郎君　西浦五五安藤方

江藤　猛夫君　神戸市大手寺西二六伊藤方

東京市役所復興總務部

半田　芳夫君　兵庫縣明石郡伊川谷村前開

木原　駒作君　岡山縣嬬負郡細入村蟹寺日本電力蟹寺發電所

藤原　節雄君　東京市京町區内幸町貴族院集築場大林組内幸町出張所

松下　藤治言　大阪市北濱四ノ五〇宗建築事務所

(宅)　東京市本郷區菊坂町一六紅葉園

兵庫縣明石郡伊川谷村前

## ○渡歐

會員德政金吾君は歐米建築界視察の爲九月下旬渡歐されました

## ○歸朝

會員福永佐和吉君は歐米建築界視察中のところ十月上旬勞農露國を經由歸朝されました

## 寄贈圖書

工業ノ大日本　十　號　工業ノ日本社

電氣評論　十一月號　同　社

都市人第十一光都人社

學士會月報四五二月號　學士會

建築世界第十一號　建築世界社

セメント界彙報(第三七號)　日本ポートランドセメント同業會

建築畫報十一月號　同　會

住宅十一月號　住宅改良會

工政七、二月號　工政會

土木建築　十月號　土木建築社
建築新潮　十月號　洪洋社
大阪工業俱樂部　七七號　大阪工業俱樂部
滿洲建築協會雜誌　十月號　同會
帝國鐵道協會報　第五號　同會
工業タイムス　九月號　同社
滿洲技術協會誌　十月號　同會
電氣學會雜誌　四四七號　同會
鐵道軌道經營資料　十月號　鐵道同志會
生活　十月號　生活改善同盟會
國際建築時論　十月號　國際建築協會
建築の普及　十月號　帝國工業教育社
工業評論　九號　同社
朝鮮と建築　第十號　同會
建築雜誌　十月號　建築學會
通俗衛生　十月號　大阪府衛生會
趣味ノ園藝　十月號　關西園藝會
經濟資料　第十號　東亞經濟調査局
朝鮮鐵道協會雜誌　九月號　朝鮮鐵道協會
都市問題　第七號　東京市政調査會
名古屋工業會々報　第三一號　名古屋工業會
大阪市商工時報　第五八號　大阪市產業部
木材彙報　第六號　大阪木材協會
土木建築工事畫報　十月號　工事畫報社
建築工材　第六號　日本實業興信所
都市研究　第四號　兵庫縣都市研究會
庭園　第十一號　日本庭園協會
新建築　十一月號　其社
京都の實業　第七號　京都商業會議所

## 役員及職員

會頭　片岡安
副會頭　宗兵藏
理事長理事　松本禹象
主記理事　園部文雄
同　理事　和田貞治郎
主計理事　吉井長七
同　理事　渋谷五郎
編輯理事　伊藤正文
同　理事　田中綱
同　理事　古塚正治
同　理事　光安梶之助
同　理事　松本儀八

編輯係　江村郊郁　薦田夏治郎
庶務係　西谷節　鷹取陽
會計係　大和榮衛　山口スエ

| 會員 | 三七八 | 會員（地方） | 一七五 |
|---|---|---|---|
| 名譽贊助員 | 七〇 | 終身贊助員 | 五四 |
| 特別贊助員 | 二六 | 普通贊助員 | 五一四 |
| 合計（十一月二十日現在） | 一二一七 | | |

# 第五拾四回決算報告

（自大正十四年五月一日至同年十月三十一日）

## 貸借對照表

| 貸方 | | 借方 | |
|---|---|---|---|
| 株金 | 五、〇〇〇、〇〇〇・〇〇 | 未拂込株金 | 壹、四〇〇、〇〇〇・〇〇 |
| 諸積立金 | 壹、貳參五、四七貳・〇四 | 土地建物 | 壹、〇七壹、四六八・八貳 |
| 退職手當資金 | 四五、八六四・〇〇 | 機械器具什器 | 九貳壹、七貳七・壹參 |
| 研究資金 | 參〇、〇〇〇・〇〇 | 賣掛 | 八九壹、六參五・參參 |
| 買掛及未拂 | 四貳、八六七・四六 | 受取手形 | 貳〇參、七七參・八四 |
| 預リ及假受 | 壹貳貳、四八九・九八 | 原材料製品仕掛品 | 壹、四〇貳、四參五・貳五 |
| 前期繰越及當期純益 | 四五四、參八壹・貳貳 | | |
| 合計 | 六、九參壹、〇七四・七〇 | 合計 | 六、九參壹、〇七四・七〇 |

| | |
|---|---|
| 有償証券 | 六四、壹壹〇・貳〇 |
| 現金及預金 | 九參壹、九八七・〇參 |
| 假出金 | 四參、九參七・壹〇 |

## 利益金配當

| | |
|---|---|
| 前期繰越及當期純益金 | 四五四、參八壹・貳貳 |
| 内 | |
| 諸積立金 | 四〇、五六五・〇〇 |
| 賞與及退職手當資金 | 三一、〇〇〇・〇〇 |
| 株主配當金（年壹割壹分） | 壹九八、〇〇〇・〇〇 |
| 後期繰越金 | 壹八四、八壹六・貳貳 |

## 日本ペイント製造株式會社

専務取締役社長　小畑源之助

監査役貳名滿期改選ノ處早瀨榮之助田中新七兩氏再選重任セリ

## ●第八集 第一二号 掲載広告一覧（掲載順）

ミドリ商会
井上幸三商店
飾磨化学工業
大野正営業所
日本エレベーター製造
特許エレベーター製造
浅野スレート販売
小原鉄工商事
東洋コルク工業
伊丹商店大阪出張所
カール・ツアイス
石綿スレート大阪支店
大阪ビトロライト工事
南満鉱業
浅野物産
ベニス工房
木下商店
丸三セメント工業所
田村商会
玲光社
東亜鉄工所
大平工業所

油脂化工社
日本ホロタイル
KENSEISHOKAI
日本建築紙工大阪出張所
小籔一弥商店
原田商会
日本セメント防水剤製造所
野沢幸三郎商店
日本洋瓦大阪出張所
金剛商会
大阪陶業
大坪電気工業所
浅海商店
桐田商会
山中商会
阿部鉄工所
長田商店
日本工剤
森川組
田中昌司商店
大福海上火災保険
三井物産

小野田セメント製造
伊奈製陶
HANKEN SSEISAKUSYO
城口研究所
出浦建築事務所
新海建築工務所
池田建築事務所
大阪建築相談所
小笠原建築事務所
岡部建築事務所
大阪建築所
和田建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所
横河工務所
横浜建築事務所
竹内建築事務所
宗建築事務所
国枝工務所
野村、橋本建築事務所
安井武雄建築事務所
柳下建築事務所
増田清建築事務所
真水工務所

真水三橋建築事務所
遠藤於菟
設楽建築工務所
西原衛生工業所大阪支店
大阪窯業
池田勘蔵
大倉土木大阪出張所
大阪橋本組
大林組
竹中工務店
長瀬組
中新
佐伯組
野村組
久保田組
熊取谷熊次郎
山本組
松村組
藤木工務店
正木工務店
岡本工務店
鴻池組
有山組
駒井喜商店

安藤組大阪出張所
辰巳吉之助
森本建築社
清水組大阪支店
銭高組
山田大理石製作所
矢橋大理石商店
大阪耐火リノリウム工業
須賀商会
栄進社
松尾鉄骨橋梁
新田ベニヤ製造所
大阪青写真調製所
山本窯業商店
常盤貿易商会
高島屋呉服店
石川商会
東亜ペイント
萩原煖房工務所
東洋建材工業所
みどり製作所
日本木材工芸
熊谷組
河村青写真調製所

デウエット商会
日米建築資料社
田中源太郎商店
建築金物商会